

三度たく飯さへこはしやはらかし 思ふまゝにはならぬ世の中
などの狂歌

いなづまに悟らぬ人の尊さよ (芭蕉)

我が事と泥鰌の逃げし根芹かな (丈草)

夕涼みよくぞ男に生れける (其角)

どうなりとあなたまかせの年の暮 (小林一茶)

何のその百萬石も笹の露 (同上)

などの俳句

盗人をとらへて見れば我子なり

居候三杯目にはそつと出し

昔ならなあお爺さんさうだとも

あの隅におれがやつたる雛もあり

湯治から歸つて悪い藝がふえ

などの川柳

親の意見と茄子の花は 千に一つもあだはない

親の意見と金米糖は 甘いやうでもかどがある

まるい卵も切様で四角 ものも言様でかどがたつ

などの俚諺

目糞鼻糞を笑ふ

鰯の頭も信心から

六日の菖蒲十日の菊

二階から目薬

豆腐に鏡

などの諺

ことわりなきがことわりの誠なり。ことわりのごと行はるゝものならば、何のかたきこともあらじを、さも知らで人とあらそひ政をそしりなどしてたかぶるものは、事はりの誠を知らぬとやいふらむ(松平樂翁 花月草紙) 吾翁色と義の道をしらしめ給へる詞にも「色をおもふことはうどんを見るがごとく、義を守るとは唐がらしの辛きに類せよ」と云々(森川許六の飲食欲色箴)

などの文は何れも立派な警句であり、通常所謂格言俚諺と云はれるものは何れも警句が生命になつてゐる。けれども、國文は漆着語であるが爲めに、生ぬるい「てには」でつなぐ爲めに、山椒の小粒がヒリ／＼するやうに、一言一句で人を動かすやうな遒勁調は成立ちにくいし、思想方面の抽象語彙が乏しい爲めに一句の裡よく、千萬無量の感慨を含むやうな弾力性に富むだ語句を工夫することもむづかしい。そこへ行くと漢文は遙に優れて居る。 隠れたるより顯るゝはなし、

信言は美ならず美言は信ならず

警 句

萬物皆吾に備る身に反して誠ならば樂みこれより大なるはなし
三人行はゞ必らず我師あり、
士は己を知る者の爲めに死す

など口を衝いて出るものを書きあけても随分澤山ある。

歐米文學については委しくは知らぬが、それでも英文だけでも立どころに左の數句を思ひ出す程警句に富んでゐる。

Education is the cheap defence of nations.—Burke.

教育は廉價なる護國の法なり。パーク、

Show me your company and I'll tell thee what that thou art.—Don Quixote.

其友を見て其人を知る。ドン、キホーテ

Age makes many a man white, but not better.

歳は人を白くすれども善くせず

A great city is a great solitude.

大都會は甚だ寂寥の地なり

Every man has his weak side.

人は皆弱點あり

Faith will move mountains.

至誠は山をも動かすべし

Health without money is half malady.

たとひ健康なりとも金錢なきは半病人なり

He hath no leisure who useth is not.

閑暇を利用せざる人には閑暇なし

He that knows when speak, knows too when to be silent.—Archimedes.

語るべき時を知る人は亦黙すべき時を知る。

Speech is silver, silence is gold.

語るは銀なり沈黙は黄金なり。

國文は女性的 國文學に盛られた想は、千種萬様で一概に之を女性的と謂ふ事は出来ない。天皇の宣旨も、神前に告白する祝詞も、四季、賀、哀傷、離別、神祇釋教雜歌に至る各種の短歌も戰場爭奪の災禍も等しくその内容となつてゐるが、これ等の何れもは女性的の一語を以て片付けられるものでない。國文が女性的だと云はれるのは主として其音調の上にあらうと思ふ。

さすがにうち泣きてひれ伏し給へれば、いとよぶかぬ御ありさまかなと見わづらひぬ。いかゞ聞えんなどせめられて、心ちのかき亂るやうにし侍るほど、ためらひて、今聞えん。昔のこと思ひ出つれど、更に聞ゆることなく、あやしういかなりける夢にかとのみ心得ずなん、少ししづまりてやこの御文なども見知らるゝこともあらん今日は尙もてまるり給ひね、所違にもあらんに、いとかたはらいたかるべしとてひろけながら尼君にさ

しやり給へれば云々(源氏、夢浮橋)

紫式部と云ふ女性の作で、浮舟と云ふ女性の動作を寫したこの文はその音調の上に於てふさはしい優美を感じしめるけれども之を漢文直譯體で書いたとすればどうであらう。

浮舟床ニ伏シテ嗚咽ス、尼見テ以テ處女嬌羞ノ過ギタルモノトナシ。返翰ヲ促スコト再三ス。浮舟曰ハク「今ヤ妾ガ心緒亂レテ千萬ナリ、庶幾クハ待ツコト暫ラクセヨ。雁信追憶無キニアラズト雖モ、今判別スルニ暇ナシ。或ハ恐ル他家ニ致スベキノ書信小童過テ齋ラセル無カラシ敷」ト長箋半バ開イテ之ヲ尼ニ致ス云々、
としては十二一重の上臈がパンを丸かぶりにしてゐる様な不調和を覺えるであらう。

かの萬葉の注さくも、千蔭が思ひ得たる事とは侍らねど、縣居のうしの、あまたの年月を重ねしいたづき、むなしからん事を思ふにえたへで、筆をおこしつれど、鈴屋の翁の力そはり、春海などとあけつろひてこそ、やゝ事成り侍りつれ。(加藤千蔭の、橋掛大平の文おこせたるに答へたる文の一節)

なども、國文とはこんなものだ云ふ豫想なくして讀んだとしたならばマア女らしい口調だ。大和は男性的、山城は女性的と賀茂真淵が言つたが多くの國文はその女性的な山城の國の平安朝の文體を模範にして時勢に伴ふ變更を加へなかつたので、遂にかうした文調になつたのである。で今日でも女性ならば寧ろふさはしい文體だが吾々が一つの文章を作るには今少し硬質文體を採らぬと自分の好みにしつくりはまらない。(他の諸君も恐らく同感であらう)

雄大の想と國文學

雄大の想は主觀的には豊富なる想像、徹底せる宗教觀、宇宙觀、乃至人生觀照から得、客觀的には日月星辰、河海湖沼など自然の壯美から得られる。我國は風光の美しさと想像の豊かさには恵まれて居るけれ

ども觀照の徹底と自然四圍の環境とについては他に比べて遜色なしとは云ひ得なからう。確かアストン氏の文であつたと思ふが、「一日某貴族の宴に招かれて行つた處、主人盆栽の松を指して云ふ。是れが日本人の姿ですと。枝を矯め葉を摘み支へ木をかひ白砂を盛つてその織巧の美を樂しむところ島國たる小日本の小日本人の心の具象化であらう云々」との意が記されあつた。この盆栽の趣味も強ち排すべきではないが、少くとも大陸的とは云へなからう。(同様のことは夏目漱石氏の歸朝雜感にも記されてあつた)

自然美の中「海と日本文學」の考察は、嘗て幸田博士が有益有趣の文字で發表されたものがあるが、あれにも云はれた通り、我國は地理的に觀ては、海の文學の發達上恰好の位置に在りながら、歴史的の事情が代々之を沮害して爲めに海洋文學は極めて稚拙で此方の傑作秀詠は至つて少い。前掲赤人の和歌の浦の歌や萬葉卷一天智天皇の

わたつみの豊旗雲に入日さし 今宵の月夜あきらけくこそ

などは海を詠じて優れたものでなあらうが、海そのものゝ壯美を表したものではない。法性寺入道前關白太政大臣の

和田の原漕ぎ出で、見れば久かたの 雲井にまがふ沖つしらなみ

伏見修理大夫俊綱の家來の

水や空空や水とも見えわかず 通ひてすめる秋の夜の月

加納諸平の

五百重波立てりと見ゆるむら山の はての縁や海路なるらん

などが先は壯美を調べ得たものと謂つてよろしからうが同じ海の秀詠でも橘千蔭の

二見潟こち吹く風にあげそめて 神代ながらの春は來にけり

などは寧ろ神祕の美を歌つたものである。

これ等を外にして海の文學と云へば悲哀恐怖の感懷を寓したものが多し。阿部仲麿がふりさけ見た月の海邊、紀貫之が海賊に追はれた歸任の紀行、在原行平が藻しほたれつゝわびた須磨、參議篁が「人には告げよ蟹のつり船」と訴へた配所の航路、源氏の君が「……浪たゞこゝもとに寄せ来る心地して涙おつとも覺えざるに枕浮くばかりに」歎いた須磨、平康頼が「薩摩瀉沖の小島」の咏、鬼界が島の鬼燈の傳説、など多くは海を以て罪人の渡る處、海坊主船幽靈の跋扈する處、恐るべく悲しむべき處と看做した表現ばかりである。最近或組に上田秋成の「鴛鴦行」と云ふのを説いたことがあつたが、これは萬葉歌人高市連黒人とその妻との咏に叙情的敷衍を加へた作話で、睦まじき夫婦の睦まじき旅物語を書いたものだが、その中に近江から美濃を経て尾張に出た一節

此國の守に言ひ合はする事などはたして、尾張の國へ越ゆ。汐なき渡りをさへいと覺束なかりしを、此海邊に來て見渡せば、茫々と雲と波のけぢめなく、限り知られぬにぞ、神代より傳へしわたつ海のしめ給ふ御國にやとかつ恐しくかつはめづらかなり。澳へ遠く行く舟の波にさゝけられて雲に入るを見れば、かくても乗る人のありけるよと長き息つぎあへる。

それを今日吾々は東海道線の列車で、寢惚けた眼をこすりこすり「アア來たな」位に見ると對照すると古人の海に對する感じは甚しく臆病であつたことがわかる。(明治に入つて文部當局なども此邊に省みて「我は海の子」などの韻文を國定教科書中に入れて愛海心、親洋心の鼓舞獎勵につとめた)

山の方で云へば富士山などは確かに壯美だが之を表し得て優れたものは萬葉の赤人と作者未詳(或は高橋蟲麿かとも

云ふ)の長歌二首と漢詩の「白扇倒懸東海天」と外二三の短歌位なものであらう。あとは大抵穩やかな富士、綺麗な富士、すがすがしき富士、めでたい富士を歌つてゐる。

其他古今を通じて雄大な想を發揮し得た佳作と云へば、

すみの江の松を秋風ふくからに	こゑうちそふるおきつしら波	躬 恒
大海の磯もとどろに寄する波	われて碎けてさけて散るかも	源 實朝
信濃なるすがの荒野を飛ぶ鷲の	つばさもたわに吹く嵐かな	賀茂眞淵
旅人の朝行く駒のひづめより	雲たちのほる足柄の山	橘 千蔭
伊勢の海や霞を染めて出る日の	潮瀬に匂ふ春の曙	清水濱臣
わけのほる道だに見えぬ朝霧の	中にとゞろく木曾の山河	木下幸文
松浦瀉通ふ鯨のあと見れば	天路にけふる八重のしほ風	上田秋成
波の音は下にさわぎて明くる夜の	霧靜かなる木曾の山河	中島廣足
みづち住む淵を千尋の底に見て	太刀の緒かため行く山路かな	加納諸平
雲かゝるわたのみなかにあら潮を	雨とふらせて鯨うかべり	
高機をいはほにたて、天つ日の	影さへおれるからにしき哉(那智瀑)	

現代文學では幸田露伴氏作、五重の塔に風神のあらびを寫した一段がよく引かれる。一昨大正十二年の關東地方の震災が産んだ文學には

正宗白鳥氏の 他人の災難

雄大の想と國文學

長與善郎氏の 或社會主義者
藤森成吉氏の 逃れたる人々
戸川貞雄氏の 冬近く
里見弴氏の 卑怯
長田幹彦氏の 大地は震ふ
などがあるが、果して能くボンペイ市の慘を寫した彼の傑作に相伯仲し得るであらう歟。

戀愛文學

戀愛觀

鎌倉時代、比叡山、天臺座主の慈圓大僧正が、嘗て宮中歌合の兼題に

わが戀は松をしぐれの染めかねて 眞葛が原に風さはぐなり

と云ふ戀歌を出して勝利の月桂冠を得たところ、相手に負けになつたお公卿様は悔しまぎれに「成程これは秀逸だが、戀の體驗なくしては歌へない秀逸だ。天臺座主は生涯不犯でなくてはならぬ筈なのに、この歌の實際の作者が慈圓ならば彼は座主たる資格がない」と云つて、廟議は彼の太僧正に對して「經驗なくとも歌はよめるものか否か」の試験として「鷹の羽の雪」と課題したところ、苦もなく

雪ふれば身にひきそふるはし鷹の たゞさきの羽やしろうなるらむ

と咏んだので事無きを得たと云ふ。これは實經驗なくして、創作の取材が可能か否かと云ふ問題に好適の例になると思ふ。くはしく言はば實經驗があるにこしたことはないが、さりとて實經驗のみが許されたる取材範圍であるとすれば、

殺人は人を殺してから、泥坊は盗みしてから、姦通は有夫有婦と關係を結んでからでなくては寫されない道理で河竹默阿彌の白浪物や、紫式部の藤壺は意味を爲さないことになる。で、今余は體驗なき戀愛について慈圓僧正の戀歌程度の卑見を述べることを許されたい。

始めに一男一女あり、相見て相思の戀に落ちる。そこで結婚して男は夫となり、女は妻となり、同棲幾年、夫は父となり妻は母となり、やがて舅となり又姑となる、と云ふのだつたら戀は決して無常でもなく、悲劇でもなく、神秘不可思議でも、神聖不可侵でもなく、人生としては極めて尋常茶番事である。處が世は生憎なもので、折角相思の仲をさいたり、お茶を入れたり、呪うたり、誘惑したりする事情が續々出てくる。一女に對して二男の争あり、一男に對して二女の争あり、三角關係こゝに於てか成る、一男にして三女を愛し、一女にして三男を愛す四角關係又こゝに成り立つ。一男數女を愛し、一女數男を愛す、多角關係も又こゝに起る。男は思はぬ女を妻とし、女も思はぬ男を夫とする例はザラに多く純眞熱烈の戀でなければ「浮世はとかくかうしたもの」とあきらめて暮らす、どうしてもあきらめられぬとなるとサア事だ。夫婦喧嘩や、有夫姦や、離縁や、出奔や、葛藤の種々相が演ぜられる。或は双方の地位階級が甚しく隔つてゐる時には「戀に貴賤はなきものを」と歎くし、相手は何も知らぬ戀をしては「雲に梯霞に千鳥」と及ばぬ思ひに一人歎きの幾夜を重ね、此が爲めにはホスホラスの海峡を夜毎にも通へば、斷頭臺上一片の露とも消えれば、雨の日風の日九十九夜通ひもすれば、見るから淺ましい色情狂エロチックニヤにもなる。西人の諺に曰はく

戀愛は盲目なり “Love is blind”

と、我邦の俚諺に曰はく

色は思案の外

と、支那孔聖の教訓に曰はく

若き時は血氣未だ定まらず之を戒むること色にあり

と、又西洋の某大家の名言に

着想より創作に至る距離の遠きは猶戀愛より分娩に至るその如し

と、併し余を以て之を観るに戀愛から分娩までの迂餘曲折は、到底着想から創作までの比ではない。古來このプロセスを描く爲めに費された紙をつけば恐らくは地球を十周することが出来よう。

さて謂ふところの戀愛とは何か？

一、**最人間的なるもの**、戀愛とは一男一女間の性的愛を云ふ。こは極めて自明であり端的である。さてその愛は之を本能の二種とも見られ、情緒の一種とも見られ、直覺の一種とも見られる。性教育のやかましい今日はいざ知らず鶴鴿が「みとのまぐはひ」のヒントを御見せ申した原始の時代にあつて、誰に教へらるゝともなく自然に相愛する事を能くせられた戀は正しく本能の一種と謂つてよろしからう。愛人の爲めには水火をも辭しない。如何なる犠牲をも敢て忍ぶ事、主君に對する臣僕の如きを見れば戀は一種の情緒だとも云ひたい。何が故に彼人を戀するか、如何なる點に於て彼女を慕ふかそは絶對であり無理由であり何故と云ふを許さず、何々と分解することを許さない所を観れば、戀は一種の直覺的な作用だとも謂ひ得よう。要するに三種の觀方は三種とも正しく、之を意志的に見れば本能、之を感情的に觀れば情緒之を知識的に見れば直覺の一種と謂つてよろしからう。而かもこのことたる人間のみに與へられた權利であり、義務ですらもある。牛を見よ、馬を見よ、乃至、其他鳥獸魚介を見よ、相手の誰彼を論ぜず性の相異さへあれば互に相牽いて産卵し、孵化し、繁殖する。性の相異のみを観るは單なる生殖本能と謂ふべきだ。然らば神を見よ、上帝を見よ、神話

にはヴィーナスあり、キューピットあり、三輪の明神あれども、現實にはうき名を流すやうな神々はどこにもない。實に吾々は有史以來、未だ嘗て失戀に煩悶する牛も見なければ、離縁の訴訟を提起した神様をも見たことがないのである。つまり戀愛は人間的な——極めて人間的な一賦性と解することが出来よう。

二、**戀愛は一種の享樂**、愛人をベター・ハーフと云ふ。愛人との契りや借老同穴と云ふ。洋の東西を通じて戀は當人にとつて望ましいものになつてゐる。戀人を見初めて始めて世に生れた幸を思ひ、男なり女なりに生まれたかひがあつたと思ふ。相逢ふては千夜を一夜とかこち相わかれては一夜を千夜と歎くのは戀の兒の常である。戀の旨酒、戀の蜜、戀を苦いもの、厭はしいものにとへたものは先づ少い。

三、**戀は一種の悲劇**、併しながら單なる享樂と觀るのは「戀愛遊戯觀」とも謂ふべく、極めて淺いものか、極めて順境に萌む戀か、まだ一度もくづ折れたことのない初戀かのことで、世間多くの戀は、戀の兒自身からもその周圍からも様々の障礙が起る。相手の一方が心變りすれば、金色夜叉の貫一が出来、親が思ひがけないつまさだめをすれば朝顔日記の深雪が出来、言ひ寄る相手がその後續出すれば勝鹿の眞間の手兒奈となり、二人同等の愛人が並立すれば蘆屋の菟會少女となり、双方の身分が違ひ、父兄の意志がちがへば業平の「月やあらぬ」の歎となるなど失望、自棄、出奔、身投げさすらひとあらゆる悲劇を見るに至る。

四、**戀は眞劍**、戀愛遊戯觀に生きる人々はともかく本當の戀をする兒はいつも命懸けである。其顔は蒼ざめその息はせはしく、その身は恐怖に戦慄き、其眼は天日を睨めても尙瞬かぬ底のものである。花咲けば、花散れば、風吹けば雨降れば、直ぐに愛人の姿を幻想に描く、その幻想は世界のあらゆる大藝術家が心血をそ、いで作つた繪よりも、彫刻よりも、塑像よりも至上至美の傑作となるのも亦戀の兒に見られる。命かけての戀だから、之を得ずして死に就くのも無理

はない。よく文學で戀に病んで死に瀕した大病人が、一度びその願ひ成るに及んで、見違へるやうに快復すると云ふ筋のものがあるが、これ等も戀の眞剣味の具體化と觀れば眞實である。

五、戀と永生、嘗て相愛し結婚して幻滅の悲哀を見るもの（例へば幸田露伴氏の新羽衣物語）は、文藝作品にも往々ある。實社會にはもつと餘計ある。所謂「どれあひ夫婦」は自由戀愛者のクラシックなものだが、子供の三人も出來るとモウく、毎日、犬も喰はぬと云ふ喧嘩勝で、細君が米櫃を叩いて怒鳴ると、亭主が爛徳利を投げて罵ると云ふ矛盾が随分多い。それを見ると、戀の永生など云ふことは考へられない。孔子も若い時こそ「之を戒むる色にあり」と説かれたが、年を老つてはむしろ物質慾が盛んになつて「之を戒むること得にあり」とも説かれた。世間の鄙語にも「惚れた腫れたは二十歳前後の沙汰」と云ふ。清少納言も二十歳過ぎた自分を「さだすぎ」と謙遜してゐるし、事實七十、八十にもなつて、戀にうき身をやつすやうな人も少いやうにもある。けれども眞正であり神聖である戀となれば、彼我一體で、「よりよき半分」であり「他の自我」であり、自我の永久である如く愛も永久であらねばならぬ。目元が涼しいとか、鼻筋が通つて居るとか、色が白いとか、男振りがよいとかを自當の戀ならばそれは衣裳が美しいからと云つて戀着するのと五十歩百歩の相違に止まる。その人の眞の自我に沈潜し、眞の魂に透入し、眞の熱愛の殿堂に巢ごもつた戀の兒は、たとひその人の目が盲ひても、齒がぬけても、皺が寄つてもそれで戀心のさめるものではない。我邦では高砂の尉と姥があるし、西洋では、ダンテのペアトリーチエがある。戀の王國に於ては、戀は絶對であり最高であり、完全であり、唯一であり、そして永久である。それは猶國家の統治主權の如きものであるべきだ。

六、情交と性交、「肉體關係なしに戀愛は成立するか」と云ふ問題は、此迄多くの文藝家文藝批評家によつて論議せられたが、余は靈肉一致的の見解から性交なくして情交は成立しないと云ふ説に賛成しようと思ふ。接吻と云ひ握手と云ひ二元的に見過ぎて居る。

抱擁と云ひ或は手を取つて踊ると云ふそのこと已に愛の膨脹の飽和度に達したあらはれではないか、さればこれ等の表現でもまだ充たされない愛の高揚は何によつて充たされるか、こゝに於ては性交と云ふ最大級の飽和表現形式となる譯であるが、かう云つたからとて決して戀愛即性慾と云ふのではない。想ふに此迄或一部の人は物質と精神とをあまりに二元的に見過ぎて居る。

今日も朝から今回卒業の榮を得たS君とA君とが來た。そこで祝ひの挨拶をして段々話し込む中「時分でもあるからとて近所の師團通りの睦食堂から、井を取り寄せて出す。井は單なる物質だと解するならば、主客共に甚だ不本意である。たとひ一杯の井でも主人側なる余の誠意がこもつてゐればこそ兩君も快く喰はれたのである。でなければ高が井の一杯位は、五拾錢出せばまだおつりをくれる位なもので、市内には睦食堂より、もつとうまくはせるレストランめいた處がある筈だ。けれども余の誠意が加はつた井と云へば、たとひますくとも今日の晝の睦食堂から余の宅へ運んだそれに限るのである。この意味に於て、井即誠意、物質即精神と謂つて差支なからう。

人はすべて獸慾を解す。されど眞の戀を解するものは果して幾人ぞや。酒は口より入るものなれど、その一酔洵然たる趣味は精神的なり。肉體的にあらず。戀は色情にもとづくものなれど慾をはなれ、世上の關係を離れたる戀は神聖なり、神聖ならずとも精神的なり。（桂月全集第八卷、二八二―二八三）

と云ふ、上戸黨の大町氏のこの論文は強ち附會ではなからう。そこで性交を單なる獸慾の表れと解することの誤であることが判然するであらう。相愛する男女のこの種の行動をば、職業的に他人に許す娼婦や、變態性慾者の爲めに已むなく犠牲となるお稚兒さんと同一視するのは、大なる謬である。性交の伴はない戀愛は、瞳を點ぜない美人畫と一般で、多くの場合に於て空虚であらう。唯一たびそこまでの深い交渉が成立した以上、いつくまでもそれが必要條件である

か否かは人による問題で、一概に定めることは出来ない。すると非難者は「それでは文學には性交の伴はない戀愛が澤山あるがあれは戀ではないのか」と云はう。余は思ふ戀のフルマークとも謂ふべき性交に至らない爲めに、起る種々相こそは、戀愛文學の主内容をなすもので、その點に達して以後の描寫は、音樂會果て、樂人の控室で獨唱するやうな氣拔けのしたものにならうと。(勿論それ以後の描寫だつて、文學として成り立たないと謂ふ意味ではない——が、それ等はむしろ家庭小説としてふさはしからう) 又相愛する男女が、或事情の爲めに離れなければならぬ時、「たとひ此肉體は〇〇の家に嫁ぎましても精神だけは永久にあなたのもの」と云つた風の告白もよく見るし、「夫とよび妻とよばれることが出来ませねば、せめては兄さんとよび妹とよばれて末永く清い御交際を願ひます」と云ふのも現代文學には可なり多い。けれどもこれなどは畢竟空虚で、そんなことを云つて媾曳をつけて居れば、矢張戀の勝利者であると同時に、道德の犯罪者に墮する。それはよく歌舞伎で見ると、粹老爺にたしなめられて「爺これ程間をあけて歩けばよいかや」と申譯だけに一間程あけて出て、花道にさしかゝると「さあ行かう」「アイ」で一緒に手をつないで行くのと似た趣があらう。もしさうでなければかうした戀はいつかは冷却して、二人相對して凝視するに堪へられない苦しいもの厭なものにならう。

七、國文學を通じて觀たる我邦人の戀愛觀 神ながらの道から出發した我等の先祖は極めて素朴な純真な戀をした。やがて漢學の將來に因て、男女別席を教へられ、穴隙を鑽つて相見る自由戀愛の不徳なるを教へられた。又佛教に因つて三世輪廻の道理は男女關係にも及び「此世の縁はうすくとも、永い未來は一蓮托生」とか「二世も三世も戀らぬ契り」の可能を信するやうにもなつた。更に歐米の思想に影響せられて戀愛神聖論や戀愛至上論をも唱へるやうになつたが、之を國文學に表れた上から觀て、概括的に言ふなら

上代は 素朴の戀

中古は 遊戲的の戀と一部眞劍の戀、

近古は 變態的の戀(所謂衆道)

近世は 肉體的の戀と一部戀愛至上主義的の戀

現代は 戀愛神聖論を根調とする戀(所謂プラトニック、ラヴ)を主として描いてゐると思ふ。

尙この項目を論ずるに就いて、豫め考慮の中に入れおくべきは、我邦に於ける婦人の地位の今昔である。貞操問題も、男女關係も、家族制度も、この婦人の地位と關聯して解釋を要するものが鮮くない、その中でも戀愛文學の考察には、是非一通り觀ておく必要がある。

男女同權が強調さるゝ今日に於てすら、女尊男卑の國もあり、男尊女卑の國もある。我邦は現今に於てもさうであるが古代にあつてはもつと甚しい男尊女卑の國であつたと思はれる。

已に神代に於て諸冊二尊が御結婚の時殿堂を一周して出合頭に女神の方から先に「あなにやしゑをとこを(親愛なる我郎君よ)」と詞をおかけになつたが其結果産れた國土は甚だ不完全であつた。その時先祖の神の御意を得させられたところが、「女から先へ詞をかけたからだ」とあつて、更に次には男神から前に「あなにやし、ゑをとめを(親愛なる我少女よ)」と仰せられた。が、こんどは上結果で立派な國土が産れたとある。この神話からして夫唱婦隨の思想の萌芽が見える。加ふるに後來儒教が影響して三從七去の教が唱へられ、佛教が廣布して女人五障の説が信ぜられ、四部の弟子の最下位として優婆夷(善女)がおかれ、同じ出家をするにも僧は二百五十戒を保てばよろしいが、尼は五百戒を保たね

ばならぬと説かれた。その結果として貴人の一夫多妻や貞操蹂躪は今日のやうに非難されなかつた。

周禮には男子の三公九卿廿七大夫八十一元士に比して、三夫人、九嬪、廿七世婦、八十一女御を置くにあつて、而かもその「女御は燕寝に侍御することを掌る」とあるから随分夥しいことである。我邦では唐制は模倣されたであらうがかうまで多く配せられたことはなからう。醍醐天皇の時には皇后一人中宮二人女御五人、更衣十九人皆で廿七人お出でになつたと云ふし、源氏物語の桐壺の帝には太后（弘徽殿）女院（藤壺）女御三人（承香殿、麗景殿、八宮の母君）更衣二人（桐壺、後涼殿）都合七人本文に所見がある。つまり子孫を絶やすと云ふことは父祖に對する最大不孝と考へられてゐたからで、家族制度——わけても家系尊重の風と相俟つてかうした俗があつたものと思ふ。

雄略天皇かつていでの途中、三輪河のほとりに衣洗ふ少女の美貌をめでて「お前は何と云ふ名か」とお尋ねになると「引田部の赤猪子と申します」と答へた。「では何處へも嫁がないで待つて居なさい。やがて妃として宮中へ迎へたらうから」と仰せられた。少女は大みことのりを畏んで操正しく幾年かを暮らしたが宮中からはそよとの便りもない。待つてくしてゐる中にも月日はすん／＼たつて、今は八十歳の老婆になつた。女はつく／＼思ふやう、「もう此では到底御奉公は出来ないが、せめては、自分の操だけをお告げ申したいものだ」と、そこで色々の献上品を用意して宮中へ上つてその旨を取次いで申上げて貰つたら、天皇も始めてその當時のことを御思ひ出しになつて「すつかり忘れてを つた、つひうつかりして……だのに其方は一旦の約束を堅く守つたことはいとほしいものだ」とあつて御製二首

みもろのいづかしがもとかしがもと ゆゑしきかもかしはらをとめ

ひけたのわかくるすばらわかへに いねてましものおいにけるかも

女も流石に感泣して

みもろにつくや玉垣つきあまし たにかもよらむかみのみやびと

くさか江の入江の蓮花はちす みのさかり人ともしきろかも

と歌ひ大に面目を施して下つたと云ふ。

結婚形式も原始の奪略結婚や歌垣にその遺風の認められる雑婚の時代以後となつては男子の方もだが女子は殊に父母長上の意志のまゝに従ふことになつてゐた。即ち強制結婚の一種だけで、その強制にポリシーを含んだ政略結婚は武家時代以後に多くなつたやうだ。明治以後歐米の風が輸入せられて自由結婚も一部行はれたやうだが、今日の處父母も承知なら本人も承知と云つた。双方合意のものが最も合理的な結婚形式であらう。

處が天智天皇は妃の御妊娠中なのを鎌足に賜つて「若し男子を産まば卿の嗣とせよ、若し女子ならば朕之を養はん」と仰せられたが、出來たのは男子であつたから鎌足の後をつぐことになつたが、名も不平等とつけて暗に、畏き御胤なることを示したと云ふ。

平家や盛衰記を見ると源三位頼政が紫宸殿の物の怪を退治した時褒美として「蒲菖の前」を賜はつたとある。太平記には新田左中將義貞が勾當内待を見初めて

我袖の涙に宿るかけとだに しらで雲井の月やすむらん

と述懐したが、天皇が之を聞き召され、多年の軍功にめでて御下しになつたとある。

古代婦人の地位は大體こんなもので男子からはまるで奴隷視され、時によると人間以下の景品扱ひにすらされたのである。之を今日、婦人解放思想が段々具現して、民法その他に於て女子の人格を尊重する法條が明定され、貞操保護の制がしかれ、夫婦財産制度が定められ、娼妓廢止論が唱へられ、女子の學校長の前で頭をペコ／＼下げる男子の教員がザ

ラにあり、昨今婦人參政權が喋々されるやうになつたのと比べて見ると天淵も管ならぬ差異で、この意味に於て今日の婦人は大に時勢に感謝すべきであらう。

萬葉集の戀歌

額田王、記紀神代の卷に見えた須世理媛の歌などは素朴で眞摯で名歌と謂つてよろしからうが、之を現代語に譯すると随分感覺的なものになる。

萬葉集五千首近い内約三分の一は相聞である。相聞とは親子夫婦兄弟知人等つまり「親しきどら」の消息歌と云ふことだが、就中相思の男女がよみかはした愛の歌が多數を占めて居る。そして此集の相聞が後世の戀歌よりも優れて居る點は、矢張りその想の眞摯素朴な點にある。中には形式のめでたいものもあるが、それも後世の戀歌のやうに形式そのものがさきに出て、内容は後から盛られたと云ふ風のものでなく、内容が充實して盛り上つて出來た形式とも謂ふべき趣がある。

萬葉歌人として、殊に戀歌の作者として、又戀愛生活の體驗者として、余は茲に額田王（又額田女王）をあける。鏡王を、母とし鏡女王を姉として大和國平群郡額田の郷に生ひ立つた此君は、容姿絶美にして、才藻亦優艶宛ら一族の精を集めたやうな方であつた。早く大海人皇子に誦はれて十市皇女をあけ、ついで天智天皇に召されたが皇子との戀は尙縷の如く一線を曳いてまつはつてゐた。それと感づかれてか、天皇には三山の御歌がある。革命の裡には女性ありと云ふが、彼の壬申の亂の不祥事も疾くこの御情戦に萌して居たものでなからうかとも察せられる。ついで天皇崩御、兵變突發、大海人皇子は吉野から出て皇儲を嗣がれた、之が即、天武天皇である。額田王は再び召されて御伉儷頗る美しかつたが、その天皇が崩御あらせられてからは更に弓削皇子（天武天皇の御子）に戀せられて第四回目的夫の君としてか

しづかれた。今日から觀るとその節操は如何はしいが、當時の婦人貞操觀は而かく嚴肅なものでなく彼の海榴市で女を争はれた歌などを見ると社會學者の所謂奪略結婚の面影すらも認められる時なのだから、吾々は此君に對しても今日の道德眼を押しつけて批評する氣にはなれない。寧ろ中年を過ぎるまでも戀に生き、戀に咏歎せられ、長へに若き常處女のやうな媛の面影を想ひ、更にその才華の美を悦ぶものである。

あかねさす紫野ゆきしめ野ゆき 野守は見ずや君が袖ふる

天智天皇の第七年、近江國蒲生郡に御遊獵の時、狩裝束り、しき大海人皇子を見て姫が「野守は見ずや」と婉曲に戀情をほめかされたもので、その時大海人皇子が媛に告げられた戀歌は

むらさきの匂へる妹をにくゝあらば 人妻ゆるゑにわれ戀ひめやも

壬申亂後、媛は召されて大海人皇子（天武天皇）の宮に入り、多年求めて充たされない初戀の樂を享け得ることになつた。而かも一度先帝の寵を受けた身の流石折に觸れての懷慕のえ堪へぬものがあつた。

君待つとわが戀ひ居れば我宿の すだれ動かし秋の風吹く

と一首、嘻々逝きし君は長へに逝いてかへりまさず「待人來る」と云ふさがこの秋風の簾のそよぎは何のかひぢも戀しの我君よ、なつかしの我が先つみかどよと哀しまれた。

山科の御陵功を竣へ先帝の御遺骸事なくこゝに葬られて、芳魂永く此の一疆に鎖されることとなつた。御葬儀終つて群臣退散の折から、媛は哀思の綿々を長歌して

八隅し、

わが大君

かしこきや

御陵つかふる

山科の

鏡の山に

夜はも

夜のあくる迄

戀愛文學 萬葉集の戀歌

晝はも 日の暮るゝ迄 ねのみを 泣きつゝありてや

百しきの 大宮人は 行き別れなん

才子多情、才媛も亦多情で、その御陵の土も乾き、ついで天武天皇も崩御、ついで持統天皇御即位となつて一日吉野へ御遊幸の途次弓削皇子は豫て下戀の心をこの機にこそとて

古に戀ふる鳥かもゆづる葉の 三井の山よりなき渡り行く
と言ひ寄られた、媛は此に和へて

古に戀ふる鳥はほととぎす けだしやなきしわが戀ふるごと

と返される。「そりや多分杜鵑でせう。わたしが父帝をしのぶやうに、昔をしのぶ所の……」と云つたこの返しは、巧く申込を横へそらされてあるが、その次の一首

みよし野の玉松が枝ははしきかも 君がみことをもちてかよはく

によると、いなにはあらぬ御心持はそれと肯かれる。かくして媛が第四期の戀愛生活の序幕が切つて落されたものと見える。

菟會處女

昔、津の國芦屋の里に菟會處女と云ふ美女があつて、言ひ寄る若人數ある中に、最も熱心なのは、同國の菟原と云ふ姓の男と、和泉の國の智努と云ふ姓の男とであつた。年頃も容貌も、才も、熱情も殆ど相似て何れを何れと定め兼ねて處女は少からず惑うたが、結局的の一矢で此悩みを解かうと思つて、或日前なる生田の川の上つ瀬に浮んでゐる水鳥を指して「お二人の中で、あの水鳥をうまく射とめた方に嫁ぎませう」と云つたので、「應」とばかりに二人がよつびいて放つた處、一人はその首を射一人はその尾を射て、これにも事は決しかねたので處女はいとど心惑して

住佗ぬ吾身投てむ津の國の 生田の川は名のみなりけり

と述懐してこの川の淵に身を投けると、二人の男もつゞいて突込み一人はその手を捉へ、一人はその足を捉へ、流れ滔滔としてこの美しい三個の春を流し去らうとする。それを引揚げて三つの新墓を築いたが、菟原の父、智努の父を難じて、「此國の塊は一かけでも他國人の自由にはさせることでない」と云ふもんだから智努の父は慙々和泉の土を運んで塚を築いたと云ふ。

これは大和物語や歌林良材に傳へた戀物語だが、萬葉にはその墓(處女塚)を過ぎつた時の懷舊歌が出てゐる。

菟原處女が墓を見て作める歌一首並びに短歌(卷九)よみ人しらす

(註に 高橋蟲麿歌集にありと云ふ)

葦屋の 菟名負處女の 八年兒の 片生の時よ

をはなりに 髪たくまでに 並び居る 家にも見えず

うつゆふの こもりてませば 見てしかと いぶせむ時の

垣ほなす 人のとふ時 智奴壯士の うなひ壯士の

ふせやたき すしきほひ 相よばひ しける時に

焼太刀の たかみおしねり 白檀弓 ゆきとり負ひて

水に入り 火にも入らむと たち向ひ きほへる時に

吾妹子が 母に語らく しづたまき 賤しきあが故

ますらをの あらそふ見れば 生けりとも あふべくあらめや

しぐくしろ　よみに待たむと　こもりぬの　下はへおきて
 打嘆き　妹がゆければ　血沼壯士　其夜夢に見
 取つゞき　追ひゆきければ　おくれたる　うなひ男い
 あめ仰ぎ　叫びおらび　つちにふし　きかみたけびて
 もころ男に　負けてはあらじと　かきはきの　小太刀取り佩き
 ところつら　尋ねゆければ　やからどち　いゆきつどひ
 永き代に　しるしにせむと　返き世に　かたりつがむと
 處女墓　中につくりおき　壯士墓　こなたかなたに
 造りおける　故よし聞きて　知らねども　にひものごとも
 音哭きつるかも

反歌

葦の屋のうなひ處女の奥つきを　ゆきくと見れば音のみし哭かゆ
 墓の上の木の枝躰けりきしごと　ちぬをとこにし寄りにけらしも

葦屋處女が墓を過ぐる時作める歌一首並に短歌

(卷九、注に田邊福麿歌集に出づとある)よみ人しらす

古の　ますらをこの　あひ競ひ　妻問しけむ　葦の屋の
 菟名日處女の　奥城を　あが立ち見れば　永き世の　語りにしつゝ、

後人の　しぬびにせむと　玉梓の　道の邊近く　磬かまへ
 作れる墓を　天雲の　退方のかぎり　此道を　ゆく人毎に
 行きよりに　いたちなけかひ　惑人は　ねにもなきつゝ、
 語りつぎ　しぬびつぎこし　處女等が　おくつきどころ
 あれさへに　見れば悲しも　古思へば

反歌

古のしぬだ男の妻問ひし　菟會處女のおくつきぞこれ
 語りつぐからにもこゝだ戀ほしきを　たゞ目に見けむ古へをとこ

(處女塚は今武庫郡東明驛にある。)

この話は衆男一女を争ふと云ふ點、後の竹取物語に影響してゐると謂はれてゐる。謡曲求塚は大和物語から脱化したもので、其他戯曲に取材したのも少くはなからう。

眞間之手兒名

下總國葛飾の郡眞間の里に手兒奈と云ふ美し女は、生れついで的美貌にどんな粗末な服装なつをしても美しかったので、界限の騒ぎとなり、あまり多くの人々から懸想せられて、遂に身を井に投じたと云ふ。萬葉三の卷には山部赤人の歌がある。

勝鹿の眞間の娘子が墓を通れる時山部宿彌赤人が作める歌一首並に短歌

古に　ありけむ人の　倭文幡の　帯解き替へて

戀愛文學　眞間之手兒名

ふせ屋たて	妻問しけむ	勝牡鹿の	眞間之手兒名が
おくつきを	こゝとは聞けど	眞木の葉や	茂みたるらし
松が根や	遠く久しき	言のみも	名のみもわれは
忘らえなくに			

反歌

吾も見つ人にも告げむ勝牡鹿の まゝの手兒名がおくつき處
 勝しかのまゝの入江に打靡く 玉藻苅りけむ手兒名志念ほゆ

卷九の長歌には少女の美を稱へた句がある。(よみ人しらず、註に高橋蟲磨歌集にありと云ふ)
 勝鹿の眞間の娘子を詠める歌一首並短歌

とりがなく	あづまの國に	古に	ありけることゝ
今までに	絶えず言ひくる	勝鹿の	まゝの手兒名が
麻衣に	青衿つけ	ひたさをを	裳にはおりきて
髪だにも	かきは梳らず	くつをだに	はかず歩けど
錦綾の	中にくゝめる	齊兒 <small>いはじこ</small> も	妹にしかめや
望月の	たれる面輪に	花のごと	えみて立てれば
夏蟲の	火に入るがごと	みなと入に	船こぐごとく
ゆきかゞひ	人の言ふ時	いくばくも	生けらじものを

何すとか

身をたなしりて

浪の音の

さわぐ湊の

おくつきに

妹がこやせる

遠き世に

有りける事を

昨日しも

見けむがごと

おもほゆるかも

反歌

勝牡鹿のまゝの井見れば立ちならし 水くましけむ手兒名し念ほゆ

卷十四 下總歌には

かつしかのまゝの手兒奈をまことかも われによすとふまゝの手兒奈を

かつしかのまゝの手兒奈がありしかば まゝのおすひになみもとゞろに

の二首がある。以て、彼女があゝの地方での人氣女であつたことがわかる。(上田秋成が雨月物語中、淺茅が宿の「宮木」と云ふ女性はこの手兒奈の後裔とも謂ふべき脚色振である)

櫻の兒 縵の兒

十六の卷に尙二人の哀話がある。櫻の兒も二人から思はれて「昔から二人の夫に仕へた女のためしがない」と云つて自ら經れて死んだ。(大和國高市郡大久保村の娘子塚はこの美女の塚だと云ふ)之を哀しんだ男の歌は

春去らばかざしにせむとあが思ひし 櫻の花は散りにけるかも

妹が名にかゝせる櫻花さかば 常にや戀ひむいや年のほに

縵の兒は三人の男から言ひ寄られて耳梨の池に身を投げた。三人の男はそれ／＼一首宛哀しみ歌を詠んだと云ふ。

耳梨の池し恨めし我妹子が 來つゝかづかば水は涸れなむ

あしびきの山縵の兒今日往くと われにのりせばはやくこましを
 あしびきの山縵の兒けふのごと 何れの隈を見つゝ來にけむ
 (源氏物語浮舟の卷に「昔はけさうする人のありさまのいづれとなきに、思ひわすらひてだにこそ、身を投る
 ためしも有けれ」とあるは、此等からの着想であらう)

戀歌の秀味

萬葉集中戀歌の秀味は隨分澤山あつて、今一々拮據の餘裕がないから、次にその一斑をあけておくが、
 要するに萬葉集戀歌の美點は前にも言つた通りその想の素朴、眞摯にあると思ふ。(人麿が妻戀ひの歌は餘りに有名だか
 ら今は省いておく)

戀の緒を述ぶる歌一首並に短歌(十七卷)大伴家持	妹も吾も	心はおやし	たぐへれど	いや懐かしく
相見れば	とこ初花に	心ぐし	めぐしもなしに	
はしけやし	あが置く妻	大君の	御言畏み	
足引の	山越え野ゆき	あまざかる	鄙少女にと	
別れ來し	その日のきはみ	新玉の	年ゆきがへり	
春花の	うつろふまでに	相見ねば	いたもすべなみ	
しきたへの	袖かへしつゝ	ぬる夜おちす	夢には見れど	
うつゝにし	たゝにあらねば	こひしけく	ちへに積りぬ	

近からば	かへりにだにも	打ゆきて	妹が手枕
さしかへて	ねてもこましを	玉鉾の	路橋とほく
關さへに	へなりてあれこそ	よしゑやし	よしはあらむぞ
ほとゝぎす	來鳴かん月に	いつしかも	早くなりなむ
卯の花の	匂へる山を	よそのみも	ふりさけ見つゝ
淡海路に	いゆきのわたち	青丹よし	ならの吾家に
ぬえ鳥の	うらなきしつゝ	下戀に	思ひうらぶれ
門に立ち	ゆふけとひつゝ	吾を待つと	なすらん妹を
逢て早見む			

あらたまの年かへるまであひ見ねば こゝろもしぬにおもほゆるかも
 ぬばたまのいめにはもとなこひ見れど たゞにあらねば戀ひやますけり
 あしびきの山きへなりて遠けども 心しゆけばいめに見えけり
 春花のうつろふまでにあひみねば 月日よみつゝいもまつらむぞ
 (家持前半期の詠にこの種のものが多い)
 其他思ひ出し順であけて見ると
 いひ喰へど うまくもあらず ありけども やすくもあらず

あかねさす 君が心し

忘れかねつも。

秋山の木の下がくりゆく水の われこそまさまめ御思ひよりは(鏡女王奉和作)

玉葛花のみさきてならざるは たが戀ならめわは戀ひもふを

ふたりゆけどゆき過ぎがたき秋山を いかでか君が獨り越えなむ

なか／＼にたえむといはゞかくばかり いきの緒にして吾戀ひめやも

一重のみ妹が結ばむ帯をすら 三重結ぶべく吾身はなりぬ

吾戀は千引の石を七ばかり 頸にかけむも神のもろふし

をとゝしのさきつ年より今年まで 戀ふれどなぞも妹にあひがたき

巖すらゆきとほるべきますらをも 戀てふことは後くいにけり

大土もとればつくるを世の中に つきせぬものは戀にしありけり

もつと熱烈なものとしては左の數首を推したい。

吾妹をあひ知らしめし人をこそ 戀のまされば恨めしみもつ

わがせ子は物な思ひそ事しあらば 火にも水にもわれなければ

人もなき國もあらぬか吾妹子と 携ひ行きてたくひてをらん

天地といふ名の絶てあらばこそ いましと吾と逢ふことやまめ

仁徳天皇を中心としての戀歌と戀物語 記紀の中比較的戀の種々相を表したのものとしては大鶴鴿尊即ち仁徳天皇にまつはる記事がある。天皇の御あひました御妃は

一、髮長姫

二、石之姫

三、八田若郎女

四、宇遲若郎女

五、黒日賣

である。髮長姫は日向の國の諸縣の君の女で、始め應神天皇がその美をきいて御召しになつたのを、大鶴鴿尊はその難波の津に上陸する處を見初めて、迎への役人の武内宿彌に頼んで「何とかして自分に譲つて下さるやうに父君に頼んでくれよ」と云はれたので、宿彌は斯と天皇に申上げた處、早速御許しが出て、その旨を歌で御答へになつた。尊は嬉しさの餘り

道のしり こはだ嬢子を

神の如

聞えしかども

相まくらまく

道の後 こはた嬢子は

争はず

寝しくをしども

うるはしみ思ふ。

と歌はれた。

戀愛文學 仁徳天皇を中心としての戀歌と戀物語

石之姫（太后）は葛城之曾都毘古の女で、仁徳天皇御即位第二年に入つて皇后に御冊立になつた。臣下の出の皇后が爾餘皇族出の妃たちの中にまじつて而かも正妃の地位を保つ爲めにはそれだけ一通ならぬ御苦心もあつたであらうが、而し、記紀を通じて見た石之姫はさうした事情を割引きしても「嫉妬の性深き、きさいの宮」であつたことを否むことは出来なからう。

これより前菟道稚郎が薨去の時 天皇に遺囑して同母妹八田媛の御身の上をよろしくたのむと云つておかれたから、天皇はその遺托を果たすべく皇女を宮中へ引きとらうとて太后に

うまひとのたつることたてうさゆつる たゆまつかむにならへてもかも
と御相談になつたけれども、太后は

衣こそ二重もよきさゆとこそを ならべん君はかしこきもかも
と拒まれる。天皇は更に

おして浪速のさきのならばはま ならべんとはそのこはありけめ
と勧められたけれども皇后は尙

夏蟲のひむしの衣二重きて かくみやなりはあによくもあらぬ
と、いつかな御承諾がなかつた。古事記には

其の太后石之日賣命甚多嫉妬したまひき。故天皇の使はす妾たちは、宮の中をも得臨かず言立てば、足も阿賀迦に嫉妬みたまひき。

と言つてゐる。つまり宮女たちが一寸でも天皇に對し奉つて、變つた素振りでもしよものなら直に、足摺りして、嫉

妬せられるので、皆々回避的態度を執つてゐたと言ふ。

茲に吉備の國、海部直へが娘、黒日賣其容姿の美を聞し召して、宮中へ聘せられたが、太后の嫉妬が餘りにひどいので逃げて歸つた。天皇は高殿からその船を望んで

沖邊には 小舟連らく くらざきの まさづし吾妹
國へ下らす

と詠まれた。間なく淡道島見物にかこつけて宮を出、波路遙かに吉備の邊を望みまして

おしてるや 難波の崎よ 出で立ちて わが國見れば
淡島 おのごろ島 檳榔の 小島も見ゆ

と謂つて、やがて舳を廻して媛を訪はれると黒日賣の恐悦一方ならず、處につけての御もてなしに藥を調じて參らせよ

うとて菜を摘んでゐると、天皇もそこへ御行きなされて
山縣に 蒔ける菘菜も 吉備人と 共にしつめば
樂しくも あるか

天皇が御歸りにならうとする時には、媛が

倭べに 西風吹きあけて 雲ばなれ 離き居りとも
吾忘れめや

大和べに 往くは誰が夫 隠水の 下よ延へつゝ

往くは誰が夫

と御慕ひ申した。

大后は豊樂の節會に御綱栴(葉の先が三岐に分れてゐる栴)が入ると云ふので御身づから紀州の國まで取りに御出になつた。その御留守の間に 天皇は八田皇女を御召しになつた……と、吉備の國兒島の仕丁がおしやべりして、それが傳はり傳はつて大后のお耳に入つたので大變御腹立で、難波へ御船が着いても宮へは入らずに堀江を溯つて山代へお入りになる、その時の御歌

つぎねふや

山代川を

川上り

わが上れば

川の邊に

生ひ立てる

烏草樹を

さしづの木

其が下に

生ひ立てる

葉廣

五百箇眞椿

其が花の

照り坐し

其が葉の

廣り坐すは

大君ろかも。

それから又南へ廻り、奈良の山口まで行かれて、そこでも御歌

つぎねふや

山代川を

宮上り

吾が上れば

あをによし

那良を過ぎ

小楯(たつ)

大和を過ぎ

吾が見が欲し國は

葛城高宮

吾家のあたり

それから筒木の奴理能美と云ふ韓人の家に身を寄せられた。斯と聞いて天皇は直ぐに「鳥山」と云ふ舍人を遣つて

山代に

い及び鳥山

い及びいしけ

吾が愛妻に

い及び遇はむかも

と告げさせられ、又丸邇臣口子を遣はして

御諸の

其の高城なる

おほるこが原

おほるこが原に

あるきもむかふ 心をだにか

相思はずあらむ

つぎねふ

山代女の

木歟持ち、うちし大根

根白の

白たゞむき

纏かすけばこそ

知らずとも言はめ

口子が大后の許に着いた時は、生憎どしや降りであつたが、大后は尙も怒りとけず、口子が前から行くと後へ行き、後から行くと前へ行き、せられるのであはれや口子は雨にぬれて紅の紐が庭潦の色の變るまで浸つてもまだ退かうとはしなかつたので、大后に仕へてゐる妹が歌で「あれは私の兄です、どうぞ御あひ遊ばします様私もお願ひ申します」と云つたので、「では入るだけは差支はない」とて入れられた。そこで口子と妹とあるじの奴理能美とが相談して返事の上をつくつて「大后は私の宅の養蠶を御視察に來られたので、別に御他意はあらせられませんが」と(こゝに蠶の事を「一度は旬ふ蟲になり、一度は殼になり一度は飛ぶ鳥になりて三色に變る奇しき蟲」とあるは、つまり古代の昆蟲學とも謂ふべき面白い記事だ)すると、天皇は「ぢやあ朕も其蟲を見よう」とて態々御臨幸、大后の坐します殿戸に御立たして つぎねふ 山代女の 木歟持ち 打ちし大根 さわさわに 汝が言へせこそ うちわたす やがはえなす 來 入りまる來れ

石之姫はずつと斯うした嫉妬騒ぎの中に薨去あらせられ、次いで八田皇女が皇后として御入内になつた(第三十八年正

月)前太后とは正反對で、極めて應揚で、しとやかで、上臈しい方であつた。(源氏物語中の弘徽殿にと更衣、六條御息所と夕顔は丁度この石之昆賣と八田皇女との對照と酷似してゐる。蓋し紫式部の構想上何等かの暗示となつた物であらう)このらうたき御妃にお子が無いのをいとしがらせられて、天皇はその御名代として八田部をお定めになつた。

八田の 一本菅は 子持たず 立ちか荒れなむ あたら菅原 言をこそ 菅原といはめ あたらずがし女 と贈られると、皇女のおこたへは次の通り眞に純な御心を盛られたものであつた。

八田の 一本菅は 獨居りとも おほきみし よしと聞こさば 獨居りとも。

天皇の御物語は尙、今一つ女鳥王のことがある。天皇は速總別王を媒として女鳥王を聘せられたが、女鳥王が云ふには「大后の嫉妬が深いから妾が到底御奉公をようしますまい、それよりかいつそあなたの妻になりませう」とて媒介者たる王と相婚ひした。天皇は久しく沙汰がないので直接に女を訪はれたら、丁度機を織つてゐた。そこで天皇は

女鳥の 吾が大君の 織ろす肌 誰が科ろかも

と問はれると、言下に女の歌として

高行くや 速總別の 御おすひがね

と和へ奉つたので「借は」と思つて、そのまゝ宮へお還りになつた。そこへ夫の速總別の王が來たので女は歌を以て弑逆を勧める。夫はそれに従つて事をたくらむ。而かも未然に暴露して追手に追はれ、倉椅山から宇陀之蘇邇まで逃げのびたが、とう／＼こゝで誅せられた。その行爲は憎むべきも、かの倉椅山で、速總別の咏んだ歌は哀しむべき物がある。

梯立の 倉椅山を 嶮しみと 岩搔きかねて 吾が手取らずも

はしたての 倉椅山は 嶮しけど 妹と登れば 嶮しくもあらず

王朝文學に於ける戀愛描寫

王朝文學と云へば凡てが戀愛文學と謂つてもよい位だから、これを一々述べるこ

とはやがて王朝文學研究ともなり、王朝文學史ともなる譯である。が、之を概括して言へば、王朝文學中、韻文の方では神樂歌、催馬樂、風俗に稍古めかしい戀愛表現があり、古今集に至つて戀の種々相が類聚され、後撰以後の七勅撰によつ戀歌が漸次社交化して贈歌答歌併せてあけられるやうになつたし、散文の方では伊勢物語にはじまつて源氏物語に大成せられてさごろも物語以下の諸物語に展開した物語物と云ふのが凡て戀愛文學である。

神樂歌 催馬樂 風俗の戀歌 神樂歌には

臨母古

本

吾妹子にや 一夜はだふれアイゾ あやまちせしより 鳥もとられず 鳥もとられずや

篠波

本

さゝなみや しがの唐崎や みしねつく をみなのよさゝや それもがも かれもがも いとこせに まいとこせにせん

酒殿歌

本

さかどのは ひろしまびろし 甕越に わが手なとりそ しかはせぬわざ しかつけなくに (此は男に言ひ

王朝文學に於ける戀愛描寫 神樂歌 催馬樂 風俗の戀歌

よられて女がたしなめたものらしい)

末

さかどのは けさはな掃きそ とねりめの もひき裾ひき けさは掃きてき けさ庭掃き

或説

末

にはとりは かけろとなきぬなり おきよ わがひとよづま 人もこそみれ 人もこそみれ

(此は萬葉十六卷の「わが門に千鳥しばなく起きよくわが一夜妻人にしらゆな」から脱化したもの、所謂一夜妻なるものを後の娼妓の前身とすればその起源沿革と外國にあるコーティサンなどの比較對照も面白からうと思ふが今はその餘裕がない。宮武外骨氏の著にこの種の參考に資すべきものがあつたと思ふ)

催馬樂の戀歌で、よく物語に引かれるものは

貫河三段

一段

ぬき川の 瀬々の小菅の やはら手枕 やはらかに ぬるよはなくて おや避くるつま

二段

親さくるつまは ましてうるはしも しかしあらば 矢矧の市に くつかひにせん(以上男の詞)

三段

沓かはせんがいの ほそしきをかへ さしはきて 上裳とりきて宮路かよはん(女の詞)

東屋 二段

一段

あづまの まやのあまりの、雨そそぎ われ立ちぬれぬ そのとど開かせ(男の詞)

二段

鏡も とざしも あらばこそ この殿戸とんど われさゝめ 推し開いて來ませ われや人づま(女の詞、隨分開放的な想である)

我門乎 二段

一段

わが門を とさんかうさん ねるをのこ よしこざらしや よしこざらしや

二段

よしなしに とさんかうさんねるをのこ よしこざらしや よしこざらしや

竹河 二段

一段

たけかはの 橋のつめなるや はしのつめなる 花ぞのにハレ

二段

花ぞのに われをば放てや われをば放てや めざしたぐへて

總角 一段

王朝文學に於ける戀愛文學 神樂歌 催馬樂 風俗の戀歌

あけまきや トウく ひろばかりや トウく 避りて寝たれども まろびあひにけり トウく かより
あひにけり トウく

我家 一段

我家は とばりちやうをも たれたるを おほぎみ來ませ むこにせん みさかなに 何よけん あはびさだ
えか かせよけん あはびさだえか かせよけん

風俗歌も略此等と同趣のもので和歌が戀の表立關ならこれ等は戀の勝手口とも謂ふべく露骨は忌むべきも穿ち得て妙な
長所遙に後世の歌謡の濫觴を爲してゐる。

小由流木

こよろぎの 磯立ちならし 磯ならし 菜摘む めざしぬらすな ぬらすな 沖にをれ をれ波や
ぬろくも きみがめすべき めすべき 菜をしつみ 摘みてハヤ

君乎置天

きみを置きて あだし心を 我が持たばや ナヨヤ 末の松山 波も越え 越えなむや なみも越えなむ

陸奥

アハレヤ あぶくまに 霧立ち渡り 明けぬとも せなをばやらじ 待てばすべなしや

常陸

ひたちにも 田をこそ作れ あだ心や 兼ぬとや君が やまを越え 野を越え 雨夜行きませる

戀の小町 王朝、優艶都雅の士女、一として戀愛に始終せざるは無き中に、わけて出色なものに男子としては在原業

平敦慶親王がある。而かも戀愛は男子にとつては一部分で、女子に於てこそ全體だと謂はれる。そこで王朝女性の中代
表的なるものを求めると之を始めにしては小野小町あり、之を終にしては和泉式部あり、之を中にしては伊勢あり、こ
の三女は不思議にも多くの相似點を持てる。その容姿の艶麗、一世の貴公子を惱殺したる點に於ても、戀愛生活に終
始した點に於ても、女流歌人として同期の才媛中特に群を抜いてゐた點に於ても、戀の歌に秀逸の多い點に於ても、尙
その生涯が故意か、偶然か……とにかく非常な數奇で、ドラマチカルな色彩に富んでゐる點までもよく似てゐた。

小野小町の傳記は詳かでない。古今和歌集目録には出羽郡司の女で名は比右姫とあり、小野氏系圖には參議孫小野
良眞の女、良材の従妹とあり、「小野小町論」の著者黒岩涙香氏は出羽郡司の女で、姪女として都に出てから艶名が高く
なつたものと推測してゐる。

よそにのみ峰の白雲と思ひしに 二人が中に早や立ちにけり
十三四歳頃乳母と訣れてから言ひやつたものだと云ふ。歌才早くより凡ならぬものがあつたと見える。

彼女の咏は現存するもの小町集の一〇八首、別に奥書で追加せられたもの五首計百十三首ある中、大部分を占めてゐる
ものは戀歌である。ではその戀の相手は誰であるか、謡曲には深草少將が百夜通ひと云ふのがあるが時代が逢はない
(小町が四つ五つの頃少將は没してゐる) 小町の生れ年は、はつきりしないが大體嵯峨天皇の弘仁八、九、十の三ヶ年
の間であらうと推測せられる(紀元一四七七—一四七九)そして深草の少將ならぬ深草の帝(即ち仁明天皇即ち正良
親王の御出世は弘仁元年(一四七〇)であつて小町と比べると七つちがひか九つちがひとなる。そして小町が戀の相手が
たゞならぬやんごとなき際の人であつたことをその咏の上にはのめかしてゐる上から推しても、どうも彼女の戀したのは
は深草のみかど即ち仁明天皇であつたらしい。天皇も亦深く小町に戀着せられたのを當時藤原氏が外戚政策上、水をさ

したものと推せられる。そして仁明天皇は嘉祥三年（一五一〇）三月二十一日四十一歳で崩御あらせられてゐる。それを一方小町がその頃から世にうらぶれの寂しい境涯に入つたこと、對照すると益々この説の確かなことを證據立てる。彼女が高貴の方を慕つた證據には

やんごとなき人のしのび給ふに

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ 人目つゝむと見るぞ詫びしき

みちのくの玉造り江にこぐ船の ほにこそ出でね君を戀ふれど

などの詠がある。これはまだ早い頃の歌で初戀にもえたつうら若草の障り多きを歎いたものであらう。

當時の藤原氏は如何にして外戚の權を確保しようかとそののみを旨と努めて居たので、若しも彼女が入つて中后皇后の地位にでも坐られようものなら折角の苦心も水の泡だと云ふので、殆ど無理おしつけに彼女をば比叡山の麓、小野といふところの物淋しき一山莊に退去させた。失戀と、悲憤と、慷慨の情火は鮮からず彼女のやさ胸に燃えて

空を行く月の光を雲井より 見でや闇にて世は果てぬべき

物をこそ岩根の松もおもふらめ 千代ふる末も傾きにけり

など詠んだ。翠帳紅圍の裡夢魂屢々驚いては三夢の歌となつた。

いとせめて戀しき時はうば玉の 夜の衣をかへしてぞぬる

うたゝねに戀しき人を見てしより 夢てふものはたのみそめてき

思ひつゝ寝ればや人の見えつらん 夢と知りせばさめざらましを

これその人の生活と緊密に契合して古來戀歌の絶唱と云はれるものである。

承和六年春開けて、その夏は近來稀なる早暈であつた。彼女は召されて神泉苑に雨乞の歌を詠んだ廿五歳のねび整つた彼女が晴れの場の晴れの歌、満座はその美と才とに非常な興味を以て迎へたことであらう。

千早振神も見まさば立騒ぎ 天の戸川の樋口あけ玉へ

昊天此秀咏に感應して、大雨盆を覆さんばかりであつたが、これを機として宮中に歸るを許されようとのあらましごととは、ガラリと外れて、益々藤原氏の嫉みを買ひ、夢ならで、彼の世ならでは御君の御顔は勿論、消息さへも賜ふすがを失つた。失戀のなやみは段々高潮して

我れのみや世を驚となきわびて 人の心の花と散りなば

いつとても戀しからぬはあらねども あやしかりける秋の夕ぐれ

山里はさを鹿の音に小夜ふけて 我が片戀をあかしぬるかな

露のいのちはかなきものを朝夕に いたる限り逢ひ見てしがな

嘉祥三年春も暮れ近い三月廿一日 天皇崩御、彼女は正に絶望のどん底に陥つた。乃ち佛の道に歸依して三十餘歳の有髪の尼となり、青春一瞬の戀の追憶を生涯の慰藉として、そこら言寄る多くの異性を拒み

ともすれば仇なる風にさゝなみの 靡くてふごとわれ靡けとや

海松布なき我身を浦と知らねばや かねなで蟹の足たゆく來る

結びきと言ひけるものを結び松 いかでか君にとけて見ゆべき

と言ひ、三春の行樂已に盡きて、春雨一夜中庭の花を誘へば人情推移のはかなさに想到しては
色見えうつろふものは世の中の 人の心の花にぞありける

とかこち、半世の花顔漸く紅褪せ我戀成らずして徒らに老いゆく咨嗟を寓して
花の色はうつりにけりな徒に 我身世にふる眺めせしまに
と述懐した。

世に小町の貞操を疑ふもの偏昭、康秀との贈答を以て證歌とすべしと云ふは極めて淺はかな觀方である。即ち
僧正遍昭が小町に

石の上に旅ねをすればいとさし 苔の衣を我にかさなむ

と云つたのに對して彼女は

世をそむく苔の衣は唯一重 かさねばうとしいざ二人寝ん

又文屋康秀が三河の椽になつて赴任する時一緒に往かうかと誘つて來た返しに

わびぬれば身をうきくさの根を絶えて 誘ふ水あらばいなんとぞおもふ

と云つた。若しこれ等の歌の通りを實行したとすれば大變だが、遍昭、康秀どちらも親しく、彼女の貞操を疑はぬ位、入魂な仲とて、戯れて詠んだものである事は、少しく當時の史實に照らせばわかることだ。況や遍昭は仁明天皇の時の藏人頭で、天皇崩御と共に一念發起した程の律義者であつたことから推してもさうと肯かれよう。(石上に於ける小町過昭の對面は撰集抄や二日物語(幸田露伴氏作)の長谷寺に於ける西行と妻との對面とよく似てゐるし、業平が陸奥で小町の鬮體にあつたと云ふ話も露伴氏の對鬮體の趣向に脈を曳いてゐるやうに思ふ。) 謡曲には

通小町(深草少將の百夜通ひ)

卒塔婆小町(小町がさすらうて乞焉となつてゐる處)

鸚鵡小町(小町が逢坂の關に居るとそこへ宮中から勅使が來る處)

草紙洗小町(小町と黒主と雨乞の歌で論争する處)

關寺小町(寺の小童と歌舞する處)

などがある。

(今年一月廿七日午后四時過、余は市内新品川町角の、いつも行く散髪屋に行つたが、ふとその日の「弘前大正報」の一面を見ると「武居碩三翁」の小町についての考證が載せてあつた。同氏は廿年來小町のことばかり研究してゐて、近く之についての著作を出されるさうであるが、参考までにその大要をあげておく。

「小野小町は小野良實の二女で、嵯峨天皇の弘仁六年に、千葉縣山武郡丘山村字小野と云ふ所に生れ、陽成天皇の元慶七年七月七日、六十九歳を以て没した。墓は茨城縣新治郡山の莊にあつて、同地の小野源兵衛氏がその後裔に當る云々」

伊勢

なにはがた短きあしのふしのまも 逢はでこの世を過してよとや

の一首で、早く讀者の近づきになつた伊勢は、王朝中期の宮廷に、詞の華と人の花とを咲かすべく、運命づけられて、伊勢守藤原繼蔭の女として生れたのであつた。

若くして敦慶親王に愛せられ、一女中務を産んだ。中務も亦母に肖て才媛であつた。親王は當代貴公子の典型とも謂ふべき大幣の引手あまたの方とてこの戀は早く離れてしまつた。彼女の生活の第一轉機は斯うして過ぎた。

ついで藤原仲平に情を通じて、一時は彼女も大分深く相許して居たが、親は却つて危ぶんで「若き人は頼みがたきものを」と警戒した。果せるかな、仲平は兄忠平に養はれて（忠平の女と妻はせられ）同居することになった頃から、秋の扇の風あたゝかならぬ仕打を始めた。五條のほとりの佗住居、親々との意見身にしてみても、怨めしく、恥かしく、身を用なきものにはふらかして、大和巡りに思ひを遣つた。彼女の生活の第二期はかうして過ぎた。

三ヶ月ばかりたつてから七條后温子（基經女、宇多后）御使して早く參り上り仕へよとの有がたき仰せ、父繼蔭も早くくくと促し來るので倉皇、歸京してお宮仕の朝夕を、流石に憎からぬ美貌の持主として仲平が又もや景色だつた消息をする。けれども彼女は冷然として退けた。仲平の兄忠平も言ひ寄るが、彼女は此をも退けた。その中に宇多天皇のお目にとまつて、寵幸日々に厚く、行明親王と云ふをのこみこまで御産み申した。彼女の生活の第三期はかうしてその得意の絶頂に達した。

好事魔多くして、親王は御八歳と云ふに薨去あらせられ、天皇も御讓位あつて（亭子院、寛平法皇、朱雀院など申上ける）雲深き九重の御殿にあけれ法の道を辿らせられることになつたので、彼女は宮をまかり出て、又も五條の幽棲而かもその容姿尙衰へず、玉膚とこしへの春を含んで、花の顔は潤むときなき艶姿に、言ひ寄る公達の餘りにしげくして、幽棲なか／＼にこちたき誘惑の府と化してしまつた。彼女が生活の第四期は斯して過ぎた。

又々七條后の御詞が／＼りて入つて宮中に仕へた。而もその奉仕の意味は前とは全然異なつてゐる。玉すだれあくるも知らで大君の御床に侍づくそれではなくて、こちたく誘ふ公達の手を遁れる避難場として逃げ込んだのであつた。やがて再び仕へを退いたがみやびを盡した五條の邸宅も人手に渡つてゐることとて嘗て法皇の賜はせたる桂の里の控へ家を實家として、そこで美しき戀の閉目をつけた。彼女が生活の第五期とも謂ふべきであらう。

伊勢の歌は今群書類従卷二百七十三に取り容れられ、上下二卷あつて、他の集よりも詞書の長いものが多く歌集とよりは歌物語と謂ふべく、それだけ彼の心の推し移り延いては境遇閱歷の次第をも察知するには便利である。集は仲平との情事から開展してゐる。けれども後々の歌は必ずしも年代順に拮據せられたものとは謂へないものがある。

いづれの御時にかありけん おほ宮す所（七條后）ときこえける 御つほねに やまとおや（繼蔭）有ける人
 （伊勢）さふらひけり おやいとかなしうして をとこなどもあはせざりけるを 御息所の御せうと（仲平）年頃
 いひわたり給けれど しはしはさらにきかざりけるをいかゞ有けん思ひつきにけり おやいかにいはんとなけ
 きわたりけるを 年頃へにければきゝつけてけり されどすぐせ（宿世）こそはありけめとてことにいはざりけ
 り たゞわかき人は たのみがたき物をとぞいひけるほどに 時のおほい まうち君にむこに とられにけり
 其をりにぞ おやもさればよといひければ 女はづかしと思ふほどに 此男のもとより 人をこせたり此女の
 家は五條わたりなるに來て かき（柿）の紅葉に歌をなんかきつけける。
 人すますあれたる宿をきて見れば 今ぞ紅葉の錦おりける

女心うきものから あはれに おもほえければ

なみださへ時雨にそひて故郷は 紅葉の色もこさまさりけり

「いよく棄てられた」とあきらめて大和へ立つ時には

三輪の山いかにまちみん年ふとも 尋る人もあらじと思へば

嬌怨、いとゞ男の胸を轟かして向ふからのかへしには

もろこしのよしの、山にこもるとも 思はん人に我をくれめや

世をうみの淡と消ぬる身にしあれば 恨むる事ぞ數なかりける
わたつみと頼めし事のあけぬれば 我ぞわかみのうらを恨むる
など次々にあつた。思ひあまつて寺々を巡拜し龍門の瀧に行つた時は正月の十一日、吹雪の中に鞆と落下する瀑布を
観て

たちぬはぬきぬきし人もなき物を 何山姫の布さらすらん
と一首、今日の秀逸これに止を刺されて餘の者は口を噤んだとある。「こし」の里わに泊りして、指節折れば失戀のさす
らひも早や三ヶ月

みもはてす空にきえなで限りなく 厭ふ浮世に身のかへりくる
張合のない、述懐を洩らしてゐる折柄、七條後の御消息、ついで父繼蔭からの來書。歸京、奉仕、仲平忠平の語りひそ
れはつぎの詞書と歌とに見えてゐる。

つかうまつるに此男は又をこせ あはんなどいへり あはんなどいへり あはで有けるに 此男のあに、あた
る男有けり たのみ給な あなおさな われを思へなど せちにいふ 文などかよはせて さらにあはざりけ
れば かくいふを もとの人しりたりけり女の里にて 前裁のおかしかりければ 手ずさみに おばなをむす
びたりけるを 初めの人きてみて

(仲平)花すゝき我こそしたに頼みしか ほに出て人にむすほれにけり
無下に拒むもはした、靡くは尙もはしたとて、女のかへし
ひたぶるに思なわひそふるさるゝ 人のこゝろはそれぞよのつね

やがて彼女が得意の第三期時代となつた

かういふ人々の事をもきかで宮つかひをのみしけるに 時の帝(宇多) めしつかはせ給けり よくぞけしから
ぬ人の 事をきかざりけると みづからも思ふ おやなども いふほどに はらみにけり 男君をぞうみたり
ける 我心いとうれしと思ひけり つかうまつる御息所は后に給ひぬ うみたる子は かつらといふ所にお
きて 雨のふる日うちながめてるたりければ 宮のよみて給はせたる
月のうちのかつらの人を思ふとや 雨に涙のそひて降らむ

彼女の御返し

久堅の中におひたる君なれば 光りをのみぞたのむべらなる
然るに「帝おり給て三年といふに御くしおろし給て仁和寺といふ所に住給ふ」こととなり「うみたてまつりし君八ツに
成給ふとせ給ひ」順逆境を轉じて彼女の悲痛は哀傷の色濃き味となつた。

しでの山越てきつらん時鳥 戀しき人のうへかたらなむ

は死別の哀感惻々腸を斷つての想あらしめる

亭子の帝をりる給はんとしける秋

白露のおきかはるらん百敷を うつろふ秋はものぞかなしき

別るれどあひもおもはぬも、敷を みざらんことの何かかなしき

は、院の御運命はやがて我戀の宿命と觀じた哀痛の聲であらう。

五條の幽棲は流石にしつらひをかしく、つくりなされてあつたものと見えて

庭は苔砂青みわたり、諸々の木立おかしく、くさくさの幽草を植ゑたり、春は柳櫻を眺むるに適し、秋は草花を賞するによろし、母屋の簾にそひて、高麗縁の疊を敷き、その上に唐錦の褥しきたり。板敷のみが、れたる事鏡の如く影残りなくうつりて見ゆ

などある。而かもこのしつらひは女主人公の美貌と共に公達の心を魅惑して、朝々暮々かいまみの人絶間なく、艶信堆く御厨子に措かれるやうになつた。今その一例をあける。

文をこせたる人のあるを たがもとにあるぞとはすれば おやのなくなりたるいかに侍るになん有ける
大空にとぶてふことのとほければ 雲の上にぞさして聞ゆる

返し女

濱千鳥つばさのなきをとふからに 雲ぢをいかで思かくらん

家ちかゝりければ又男

つばさなき鳥と成なば飛さらす まぢかきえにもすまんとぞ思

此返事に かみをむすびてやりたりければ

なごの海の清きなぎさの濱千鳥 ふみおくあとを浪やけつらん

返し女

なごの海のおれぞまさらん興つ浪 なごまんかたの淺さ求めよ

又男

なごの海しあれまさるべき物ならば こがる、船を打よせよ浪

返し女

あれながら船よすべくもおもほえず かた定めても浪のたゝねば

又男

なみ高みうらへによらぬわれ舟は こちてふ風や吹と社まで

女

追風は舟はなほりて吹ぬとも あまのいかりにとゞまりやせん

又男

風吹ばゆかんくとまつ舟に いかりをおろす人はあらじな

そこで再び宮中奉仕の身となり、五條の邸は人手に渡すことになつた。常にそら名たちければ

千々にたつわが名清めん 百敷の人のこゝろをまくらとも哉

恐はらく、その頃の述懐であらう。

飛鳥川淵にもあらぬ我宿も せにかはりゆくものにぞありける

歸りくる道にやけさはまどふらん これになづらふ花なきものを

は、家を賣つての感想である。

(従来これ等の咏によつて、伊勢が當時貧窮の境におちぶれてゐたと推測する人が多いが、物資豊かなものと云はれた地方官の娘であり、一たびは君寵を得、今も後宮の庇護あつき彼女が家を賣代して喰つてゐたとはちと首肯し兼ねる。それに上の二首も仔細に味はうと、何となく自分の家を賣つたことを洒落て茶化してをかしく咏んだと云ふ風の遊離的

な彼女の態度が想はれる。すればこの賣宅は窮餘の賣代ではなくして、さる親しき人の所望に任せて「自分はまだ桂に家もあることとて」譲つたものと推定される。

尙彼女の戀歌には男心の頼みならぬことを怨んだりかこつたりしたものが多いのも一つの特徴であらう。

人にしらるべきかぎりしられてつらく物の有ける頃
人しれずたえなましかばわびつゝも なき名ぞとだにいはましものを
人の心かはりたる頃 繪に松に浪こえたる所を見て

松かけてたのめし事はなけれ共 なみのこゆるはなほぞ悲しき
(或男への返し)

有はてぬ命まつまのほどばかり うき事しゆく思はずもがな
男のあだなりしに

住の江のきしにきよする興つ浪 まなくもかけておもほゆる哉
すみの江のめにちかゝらば岸にゐて 浪の數をもみるべき物を
鶯に身をなしかへば散までも 我物なりとはなは見てまし
今はとて別るゝだにもある物を しられぬ袖のまして佗しき

京極なる家にいきてそのわたりなる人に(この詞書の次に澤山の歌があるその中に)
みくまの、浦よりをちにこぐ舟の 我をばよそにへだてつる哉
風吹ば岩うつ浪のおのれのみ くだけて物をおもふ頃かな

伊勢が戀歌數多ある中、余の最も愛誦するのは上掲「人しれずたえなましかば」の一首で戀人があまりにやんごとな過ぎて、棄てらるゝ身の一人に心づらいことをよく調べてゐる。敦慶親王ともさうであつたし、藤原仲平ともさうであつた。この一首は何となく彼女の戀愛生活の根調を爲してゐるやうに想はれる。

唯今日から觀れば、敦慶親王に愛せられて中務を産みながら、その天帝の宇多院の寵をも受けて、行明親土を産み、仲平が關係してゐた彼女なのに、その兄で養父である所の忠平が挑むと云ふ、當時の性關係は随分異様な感じがする。

和泉式部 情に解放せられた生活と、歌とは、和泉式部に至てその極に達した、抑々王朝女流歌人の中、始めの小町の如きは貞操堅固、今も讀者の同情に値するものがある。伊勢に至つては道ならぬ戀に少しく打撃されるが、當時の世相を斟酌すれば尙後世の憐愍を買ひ得るが、和泉式部に至ては何だかゾラの「女優ナナ」を見るやうな氣がして、どうもすなほにその生活と詩とを肯定しかねるものがある。けれどもその情趣に生彩あり、その詞藻に一段の才氣喚發を見る點に於ては、確かに三人の中でも第一人者と謂つてよろしからう。

彼女が多情の閱歷を見るに、その主因は素より、後女自身の性格にありと謂ふべきだが、又彼女の周圍と、彼女の文才と、彼女のひなけしのやうなはでやかな美なども手傳つてゐることを看過してはならない。

越前守大江雅致の女として生まれ、身分は伊勢や、小町とうつつかつつであつたが、その生ひ立の詳細はわからない。余は便宜上彼女の閱歷に左の四期を劃して説かう。

第一期 娼婦性期 始めに嫁いだのは和泉守道貞であつた。一女小式部まで産まれたが、何故か離別した。第二に見えた

のは冷泉天皇第三の皇子爲尊親王であつた。親王が薨せられてからは、やがて第三の戀の相手として同四の皇子敦道親王にかしづいた。この時が彼女の一番樂しかつた時であつたと見えて、日記の全文にその悅樂を綴つてゐる。順序は前であつたかも知れぬが敦明親王と艶な贈答をしたのもこの頃であつた。之を第四とすれば第五は藤原信昌第六は道命阿闍梨、第七は元良親王第八は源頼信と、狂蝶花に戯れて飽く期なき春情の逸氣奔放は、當時にありてすら人の擧蹙する處であつたらしい。併し彼女を以て單なる肉の歡樂の追求者と觀るのは稍淺薄ではあるまいか。愛慾の熱情が人一倍に強くて、見るもの觸れるものを自分の戀の焰で焼き盡さではおかぬと云つた風のタイプの女性として、始めてその正鵠に近いものがあらう。彼女一日稻荷の祠に參つて途中雨に降られ一賤童に襖を借りた。その時その少年が

時雨する稻荷の山のみみぢ葉は あをかりしより思ひそめてき

と咏んだ。こりや乙だわね……今日の語に直せば、さうした氣持で、彼女は連れて歸つて物などとらせて愛したと云ふ。彼女が當期の生活は、敦明親王が

あなこひし今も見てしか山かつの 垣穂に咲ける大和撫子

と言ひ寄られたのに對して

戀しくば來ても見よかしちはやふる 神のいさむる道ならなくに

と和へたこの一首が最もよく代表してゐると思ふ。

第二期 母性愛に目覺めた時期 たつた一人の愛兒小式部は母に似て早くも「大江山」の一首に廟堂を驚かせて、彼女もこの子には眼がなかつたと見えて隨分心を盡して愛育した。而かも天無情にして小式部は花の蕾の十二歳と云ふに夭折した。彼女が失望は譬ふるに物なく集中多くの詞書と歌咏によつて察るに、本當に水漿口に絶つとも謂ふべき悲歎

に沈んだ。當時は上東門院に奉仕してゐるが、或日御下賜の衣裳に「小式部内侍」と云ふ札あるを見て愛惜いと堪へやらで

もろともに苔の下には朽ちずして 埋れぬ名を見るぞ悲しき

と歎いた。

第三期 家婦性時代 藤原保昌に嫁いだ頃からはだん／＼おちつきが出来て、「さういつまでもうか／＼として居られない」と云つた風の氣持になつたらしい。掌中の玉とめでた小式部は死ぬるし、鏡を見れば、肌地年毎に荒れて魅力の減退は瞳の曇りにもしるく美人も遂には老婆の期至るに想到しては、此迄のやうな情遊の我儘は出来なくなつたもの歎。夫保昌の機嫌が斜になつた時には、衷心胸を痛めて貴船の社に百日の日參を續けた。

物思へば澤の螢も我が身より あくがれいづるたまかとぞ見る

は、その時途上の光景を觀ての作である。至誠神に通じてか、夫の愛は幸にも恢復して伉儷舊に倍して美しくなつたと云ふ。

第四期 歸依安立期 我が落髪に見入つて白髪を見つけた時の女の驚きと寂しみとは得も云はぬものがあると云ふ。人去り春暮れて幾星霜美に活きた彼女が美の凋落はとりも直さず生命の凋落で、此迄心の底深く微動してゐた道心は年と共に伸びに展びた。已に小式部の死によつて世の無常を味はされた彼女は其後上東門院のお供をして時の大徳性空上人を播磨書寫山に訪うた。上人は豫めその事を知つてその前日弟子僧を集め「明日は多くの魔性が訪づれる日だ。吾は奥の室に隠れてゐるから、魔性がやつて來たら居ないと云つて追ひ返せ」と言ひきかせた。……と翌日果して上東門院の御一行が門を敲かれ「不在」と聞いて尠からず失望せられた。頓機の彼女早速一首

暗きより暗き道にぞ入りぬべき はるかに照らせ山の端の月
と咏んで山門に貼りつけて歸つた。これは法華經に「從冥入冥永不聞仙名」の譯歌である。後で上人之を見て大に驚歎し、急ぎ人して彼の一行を呼び返し一席の法話に快くもてなして返したと云ふ、こゝにも道心の閃きはあると思ふ。それが寄る年波と共に強くなつて終には

露を見て草葉の上とおもひしは 時まつほどの命なりけり

いかにせむいかにかすべき世の中は 背けば悲し住めばすみうし

等の咏となつた。斯くて彼女は晩年を淨い法悦に浸つて後冷泉天皇の永正六年（一七一一）に亡くなつた。（併しこの歿年についても異説がある）

彼女のことをしらべる資料としては、和泉式部集七卷これは群書類從第二百七十五卷にあつて卷一から三までは定家卿本、四から七迄は民部卿眞筆本によつたとある。次に和泉式部日記——これは上東門院奉仕中長保五年（一六六三）より同六年正月まで敦道親王との情交を主にした生活記録である。

尙資料としては嘗ては東大國文學教室に

和泉式部お伽草子

和泉式部撰 和泉式部物語（寫本）

同上 享保二十一年版

などもあつたが震災後どうなつたことであらう。

尾上八郎氏の梨壺の五歌仙

は今も古本で得られる。（因に梨壺の五歌仙とは前に言つた通り和泉式部、馬内侍、伊勢大輔、紫式部、赤染右衛門を云ふ。似たやうな名稱に「梨壺の五人」と云ふのがある。これは男子で後撰集時代の紀時文、坂上望城、大中臣能宣、源順、清原元輔であるから混同せぬやうにせられたい）

式部のは歌としても優れたものが多いが、就中優秀なものは戀歌に多い（文はあの日記や詞書から推してさほど上手ではなかつたと想はれる）

人の身も戀にはかへつ夏蟲の あらには燃ゆと見えぬばかりぞ

灼熱の戀を歌つたものであらう。

ひともみぬ宿にさくらを植ゑたれば 花もてやつす身とぞなりぬる

人と花と形影相憐れむ様歎

岩つゝじ折りもてぞみるせがきし 紅ぞめのきぬに似たれば

この歌で直ぐ聯想するのは與謝野鐵幹氏の

東海の夜あけと君が唇と 我が思ふことおほかたあかし

である。青春の痴情はやがて詩情をなすものであらう。

待たねども物おもふ人はおのづから 山ほとゝぎすまづぞ聞きつる

戀に泣く彼女の眞實であらう

夏の夜はまきのと敲き門たゝき 人だのめなるくひなゝりけり

近頃の俗歌に「豆腐屋の鈴を待人來ると聞きそこなつた」と云ふ意味のものがあるが膚淺到底比べものにならない。

二三の句の脚韻、待つ身の不安を音調化して殊に妙。

おもふこと皆つきねとて麻の葉を 切りに切りても被ひつるかな

我と我戀を持ち扱つた苦悶の聲調化したもので、彼の古今集戀の部の

戀せじとみたらし川にせしみそぎ 神は受けずぞなりにけらしも

と同じ情趣。

根こじにもほらばほらなん女郎花 人におくるゝ名をば残さじ

己の花に對する希望はやがて男の己に對する希望を諷諭したものと見える。

人もがな見せん聞かせむ萩の花 さく夕かけのひぐらしのこゑ

景につけて愛人思慕の思をよせたもの、

頼めたる人もなけれど秋の夜は 月見てぬべきこゝちこそせね

月は天心に冴えて氣は清澄、あゝこの良夜、事なくして寝るには餘りに惜しい月の夜であると、華やかなローマンズの

女主人公には眞にさもありぬべきことをさもありぬべき形に表したものの。

はれずのみ物ぞかなしき秋霧は 心のうちにたつにやあるらん

甲の戀の花が散つて乙の戀の花が咲くまでの過渡の暗渠が示す感傷か。

つれづれと空ぞみらるゝ思ふひと 天降り來むものならなくに

思ひあまつては「あゝ」とためいきして空を見る。愛人憧憬の高潮はこれであらう。

見えもせん見もせん人を朝ごとに 起きてはむかふ鏡ともがな

漢詩に「願はくは輕羅となつて細腰につかん、願はくは明鏡となつて嬌面を分たん」とあるその心持である。

かくこひば堪へず死ぬべしよそに見し 人こそおのがいのちなりけれ

物狂ほしいまでに戀を感じた叫びであらう。

ともかくも言はゞなべてになりぬべし 音になきてこそ見せまほしけれ

これは「なげく事ありと聞きて人のいかなる事ぞと、ひたるに」と詞書してある、その前數首は小式部を哀しんだ歌が

ある處から察して、これは哀傷歌だと想はれるが、感慨無量を道破して實に妙なる秀歌だと思ふから序にあけておく。

夕ぐれになど物思ひのまさるらん まつ人のまたある身ともなし、

暮鐘殷々、夕靄ほのにこめて鳥は時に見えぬは家……愛を有つものは人も鳥も幸福に見える。この夕暮の情調に若き美し

女の不安はさこそと察せられる。

はかもなき世をたのむかな宵の間の うたゝねにだに夢はみずやと

戀の兒は必ず夢を見、夢をたのむ、而もこの詠の如きは哀怨惻々として相手の胸に迫る趣がある。

ことわりやかつわすられぬわれだにも あるかなきかに思ふ身なれば

情に脆い王朝の公達がこの女にしてこの歌を以て泣きつかれては、動かされないものはなからう。

こえもせむこさずもあらむ逢坂の 關守ならぬ人などがめそ

これは彼女が扇に「うかれ女の扇」とされがきした道長に對して一矢報いたもので「妾だつて女ですもの此と思ふ殿方
になら靡きませうが、嫌と思へば斷りませうさ。關白太政大臣は天下の政事をこそ領じ給へ、戀のみ國の艶事
を裁かれる權能はありますまい、うかれめだなんて人聞きのわるいことを書いて貰ひますまい」と戯れ半分ではあるが

嬌瞋鋒鋭當るべからざるものがある。

花見つゝくらし、時は春の日の いたかく長き心地やはせし

詞書に「十月ばかり、そちのみやよりいかにつれづれにとのたまへれば」とあつて、やゝ間遠になつた時の「呼出し」の句であらう。

はかなくて煙となりし人により 雲居の空のむつまじきかな
爲尊親王などを忍んだものと思ふ。

みな人を同じ心になしはて、 思ふ思はぬなからましかば

戀に朽ちたる彼女が、煩悶の極その戀を咒ふ心持にまで進んだ時かうした歌となつたものか。詞書には「あらまほしき事とある。

しらなみの寄るにはなびくなびき藻の なびかじと思ふ我ならなくに

或やむごとなき人に言ひ寄られて應諾の返しをしたもの。

羨ましさも我が胸のさわぐかな 如何なる人の見かはうごかぬ

「いみじうふみこまかにかく人のさしもおもはぬに」と詞書がある。「全くお羨しいことです、あなたの文筆のお達者なことは……誰だつてこのふみを見て動かされない女はないでせう」と皮肉なそして藝術的な肘鐵砲の一發である。

わが魂の通ふばかりのみちもがな 惑はん程に君をだに見ん

戀に活きた彼女には一日一瞬も戀なくては生きてはゐられない。さりとしてひたぶるに一人の君に處女の操を捧けて純な戀に陶醉すべく彼女はあまりに多くの戀を経て來て居る。愛し得ざる惱みと愛せられ得ざる惱みとは終に之心境に達し

たものか。

君がすむわたりとおもへばはつせ河 おりたちぬべき心地こそすれ

戀に足らへる彼女のすなほな述懐と見られる。

めにちかき袖にもらずば人の世の 月ともよそに見るべきものを

詞書は「かたらふ人ありときくところに、おとこのとまりにければ、つぎのあかつきいひやる」とあつて相手が他し女而かもつひ目と鼻の先の女に心を移してふみつけられた悔しさを婉曲に怨んだもの。

憂しとても人を忘るゝものならば おのが心にあらぬと思はん

「つらけれどわすれじとおもふ人に」と詞書して、彼女のしほらしさが想はれる歌だ。

いたづらにあかす月かなうらやまし せこが衣を人はうつなり

八月九月正に長き夜千聲萬聲やむときもなき砧の音に人妻の幸を羨んだもの。

あらざらんこの世の外のおもひでに いまひとたびの逢ふこともがな

「こゝちあしきころ人に」とある。英譯百人一首の譯者ウヰリアム・ポーター氏は之をその詞通りに

吾が生涯は今とちめなり

余は最早永く止まる能はず

余は汝が余の唯一の樂しきおもひ出として

今その記念を持ちて逝かんことを希望す

この故に汝は余を訪へ、願くは訪へかし

とし、更に註して「この歌は丁度彼女が死ぬる前に彼女の夫若くは愛人に宛てたるものであつた云々」と入れ、挿畫には病床の彼女と二人の看護女（まもりめ）とが書いてあつたが、これは何も本當の臨終ではなく、單なる誇張——而かも彼女の戀心としては詩的眞實性ある誇張に過ぎない。

頼むべきかたも無けれど同じ世に あるはあるぞと思ひてぞふる

「はかなうてたえにしひとのもとより、あはれなることいひたるかへりごと」とあり、今日の情から觀れば一旦離縁した男女はめつたと詞をかけぬものだ。たまさか行きずりに遇つても、戀と目をそらす常だが遊戲氣分澤山な王朝人は合うては離れ、離れては逢ひと云ふ有様で斯うした贈答は得て有勝であつたものと見える。而しこの種の消息に對しての返しは餘程むつかしい。初戀の申込ならば前の「しらなみの寄るにはなびくなびき藻」のやうな返事をする處であらうが、第二回目からはさうは簡單にはゆかぬ。物品の贈答でも拾圓の品を買へばうつりには六七圓と相場は略きまつてゐる。この返しはさうした見計らひまで、うまくつけて「別に頼もしいとは思つてゐませんが、さりとして不俱戴天の仇とも呪つてはゐません。同じこの世の何處かではあなたも生きていらつしやるとまあその程度には思つてゐます」と云つたもの。

涙さへ出でにし方をながめつゝ 心にもあらぬ月をみしかな

「たちながら人のものなどいひてかへりぬるつとめて」とあつて、人懐しい感じの深く滲透した歌である。

夕ぐれは人の上さへなげかれぬ 待たれし頃に思ひあはせて

「いまはほかにときく人のもとにゆふぐれにいひやる」「かつて御身が妾の許へ御通ひになつたあの頃の私の心持から推して、日が暮れるとは、彼の人(今男の愛する女)の身をおもひやつて歎かれます、待つ身のつらさは誰しも同じなり女

は相見互ですから、どうぞ早く行つてあけて下さい」と云ふ。何だか餘計のおせつかいのやうだが今一つ奥を探ると何とかして男の愛を惹きつけようとする美的な手管があつて、さすがは戀の體驗者の歌だと肯かれる。

世には何氣なき日常の事をすら色艶をつける女性がある。何もわざとさうせないのに自然と艶つほい表情になると云つた風の女性で戀愛の天才とも謂ふべきタイプの人だ。和泉式部の歌集を讀むとき吾々の感ずる感じは丁度之と同じことだ。男がきて扇を忘れて歸つた「これがのこつてゐました」と使に持たせてやるのに何の愛想もにべもないが、彼女が扱ふと非常ななまめいた口上になる

八月ばかりに人のきてあふぎをおとしてけるを見て竹の葉に 露いとおほくおきたるかたかきてある、ほどへ

てやるとて

しのゝめに起きてわかれし人よりは 久しくとまる竹の葉の露

つまり生活の全體が戀の空氣にひたつてゐたものと觀られる。その行を咎めてもその人は咎められないし、その人は咎めてもその歌は咎められない。

短歌を通じて觀た王朝の戀愛觀 併し大まかに當期の戀歌を概括して云ふなら以上三女性の戀の如きは、まだずつと高い熱いもので、その他は一體に外面的、本能的、遊戲的、享樂的で少しも内面的な深刻な眞劍味の勝つた戀愛觀は見られない。試に古今集戀の部を見るに、その種々相は如何にも纖細に調べられてゐる(このことは綜合日本文學全史に述べておいた)にも拘らず、その多くは言掛や縁語によつてをかしく調べ得たゞけのもので現代人の心から見れば餘りに飽氣ない。

郭公なくやさ月のあやめ草 あやめもしらぬ戀もする哉
 よしの川いはなみたかく行水の はやくぞ人を思ひそめてし
 音羽山をとにきつゝ相坂の 關のこなたに年をふるかな
 思ひ出るときはの山の岩つゝじ いはねばこそあれ戀しき物を
 人しれぬ思ひを常にするがなる ふじの山こそわが身なりけれ
 陸奥にありといふなる名とり川 なき名とりてはくるしかりけり
 君が名もわが名も立てじなにはなる みつともいふなあひきともいはじ
 我を君なにはの浦にありしかば うきめをみつのおまとなりにき
 あひ知れりける人の住吉にまうでけるに、よみてつかはしける
 住吉とあまはつぐとも長居すな ひとわすれ草おふといふなり

よみ人しらす
 紀貫之
 在原元方
 たゞみね
 讀人しらす
 同
 みぶのたゞみね

これ等は「如何にも巧に言ひまはされてある」とは云ひ得ようが、唯それだけである。歌つてゐる本人からケロリとして平然たる面影を想はせる。

尤も古今集とてもかうした戀歌ばかりだと謂ふのは誣むることにならう。左の諸詠の如きは矢張り、此集のみならず此期の絶唱と謂ふべきだ。

瀧津瀬の中にもよどはありてふを など我戀のふちせともなき
 戀せじと御手洗川にせし御禊 神はうけずも成にけらしも
 おもふには忍ぶることぞまけにける 色には出じと思ひし物を

よみ人しらす

涙川なに水上を尋ねけん 物思ふ時の我身なりけり
 よひくゝに枕さだめんかたもなし いかになし夜か夢に見えけん
 こむよにも早や成なゝんめの前に つれなき人を昔と思はん
 行水にかすかくよりもはかなきは 思はぬ人を思ふなりけり
 住の江の岸による浪よるさへや 夢の通ひ路人めよくらむ
 夕さればほたるよりけにもゆれども 光みねばや人のつれなき
 はかなくて夢にも人を見つる夜は あしたの床ぞおきうかりける
 ねになきてひじにしかども春雨に ぬれにし袖とゞはゞ答ん
 夏蟲をなにかいひけん心から 我も思ひにもえぬべら也
 戀しなばたが名はたゞじ世の中の 常なきものといひはなすとも
 命やはなにそは露のあだ物を あふにしかへば惜からなくに
 有明のつれなく見えし別より 曉ばかりうき物はなし
 あやなくてまだなき名の立田川 わたらでやまん物ならなくに
 こりすまに又もなき名は立ぬべし 人にくからぬよにしすまへば
 人しれぬ我かよひ路の關守は よひくゝ毎にうちもねなゝん
 ぬば玉のやみのうつゝはさだかなる 夢にいくらもまさらざりけり
 今こんといひしばかりに長月の 有明の月を待出づるかな

短歌を通じて觀た王朝の戀愛觀

藤原としゆきの朝臣
 紀とものり
 索性法師
 大江千里
 みつね
 ふかやぶ
 とものり
 みぶのたゞみね
 みはるのありすけ
 よみ人しらす
 なりひら朝臣
 よみ人しらす
 そせいほうし

戀しとは誰が名づけ、むことならん 死ぬとぞたゞにいふべかりける
天の原ふみとじろかしなるかみも 思ふ中をばさくる物かは

ふ か や ぶ
よ み 人 し ら す

偽のなき世なりせばいかばかり 人のことのはうれしからまし

そこひなき淵やはさはぐ山川の 淺き瀬にこそあだ浪はたて

素 性 法 師
かはらの左大臣

陸奥の忍ぶもちすり誰ゆへに 亂れんと思ふ我ならなくに

かたみこそ今はあだなれこれなくば 忘るゝ時もあらまし物を

讀 人 し ら す

月やあらぬ春や昔の春ならぬ 我身ひとつはもとの身にして

在 原 業 平 朝 臣

王朝散文に表れたる戀愛の特相

王朝の戀愛文學を讀んで誰しも感ずることはその道具立の多くなつたことである。

垣間見 と云へば上品だが、村の若い衆が、娘のある家の障子に甜り孔をあけて覗くのと、あまり大差はなかつたらう。唯當期にあつては、男女席別が嚴重であつただけに、女の打解けた姿に對する男の好奇心は一層強かつた。垣間見は戀の相手の採集とも見られ、戀の斥候とも見られ又戀の偵察とも見られ、尙又戀の申込の前提とも見られる。源氏が垣間見の話聞いたのは、雨夜の品定めの時、自分が始めて經驗したのは北山の出養生の時、紫上の幼姿を小柴垣から見 た時であつた。その北山の垣間見の後に「こんなことがあるから彼の好色者どもは、よくとほく」と出かけて常ならば到底見られないやうな場面を見ることが出来るのだらう」と云ふ源氏の心持が書いてある。竹取物語にはかぐや姫の軒近く多くの若公達が笛を吹いたり歌を口ずさんだり、何とかして姫の注意を惹かうと競ひ合つたとある。戀の補助者 取持は何種の場合にも人事を圓滿に回轉する油となるが、王朝の戀にはいつも色巧者か、氣轉きの補助

者がある。藤壺の王命婦、空蟬の小君、夕顔の右近、柏木の命婦等、中には親が其任に當ること葵上の父左大臣、明石の父播磨入道の如きもある。又中には取持の片手間に、自分も一株入つて先方に相應の戀人を作ること惟光の如きもある。惟光は實に戀の補助者としては理想的であつた。その世才のたけてゐることに於て、その君に忠義な點に於て、その粹な察しのよい點に於て、その君にも劣らない好色者たる點に於て……

歌の贈答 和歌は實に當期に於ける戀愛の會話用語であつた。何の場合にも、消息をするには和歌を入れ、對談するにも和歌を入れる。極端に云へば當時娘を持つた親は早くから和歌を仕込んで男の心をチャームすることを旨と躰けたもので、この事が聽て本人一身の幸福の鍵ともなり、一家繁榮の基ともなるのであるから、名譽と慾が手傳つて和歌中心の文學教育が盛んに行はれたものと見える。

一家二嬖嬖三物資 通常は一程二金三器量と云ふのだが當時の女を品階するには第一にその家柄で、宮腹とか一の家とか上卿、殿上人、地下、受領などその出身が直に當人のよしあしを定める標準となつてゐた。次は容姿で、貌のめやすく、らうたいことは何と云つても女の主生命となつて居た。源氏の紫上、うつほの貴宮、などは殊に當時の貴族の好みにはまる美人であつた。第三には物けの豊かなことをも加味した。宮家筋でも貧乏な末摘花と、受領筋でも物澤山な明石とを對照すればよくわかる。併し雨夜の品定めでは成金必ずしも貴からず、成貧時に昔おほえてゆかしいものがあるとされてゐる。そしてこの目安はひとり女子のみならず、男子にまで適用された。清女が崇拜した齊信は、地位は近衛中將兼藏人頭で、容貌は美人系で、妹の祇子（弘徽殿）は花山院の寵を受けて、その天折がやがて院御出家の因となつた位、今一人の妹も容姿を好まれて伊周の北の方になつた程で、齊信自身も頗るの好男子（枕草子にめでてである）であつた。お負けに家の富は豊かで榮華物語の作者が「昔より花やかなるあたり云々」と評する程であつた。尙事務的機智

があり、學藝にかけては歌上手、詩文上手、朗詠上手、管絃もくはしくお経もうまく讀んだと云ふから、正に當時の貴公子の典型であつたらう。

後朝の使、男女相逢うて別れることを「後朝の別れ」と云ふ。如何にも優美な名稱である。直ぐその次の夜又逢ふとしても別れての朝に一度特使を立て、消息をする、その歌の詞、紙、墨、筆、文字は十分に心けはひされたもので、女は一仔細に之を見て男の情趣を汲みとる。一度接吻してあと反古籠へまろめ込むやうな現代式とは比較にならない。この文の來ると來ないと、早いと遅いと、墨の濃いと薄いとまでが、女一日の氣分を支配する。斯て物語は益々趣を添へる。對屋への引取、男女語らひつきて幾夜なくの契り深くなれば遂に女を自邸に迎へて對の屋に住まはせ、主人は寢殿に住んで戀愛生活は結婚生活となる。許婚と云ふ制度はまだ社會公認の約束とはなつてゐなかつたらしい。源氏が紫の上を早くから引取つて妻にし女三宮を先帝の遺囑によつて後の正妻のやうにしたのは當時にあつては例外とも謂ふべきであらう。

妹脊の契り、異性の友と云ふには餘りに親しく、さりとして性の交渉は何もないと云つた仲は「せうと妹」とよび「妹脊の契り」と呼んで義兄妹の交際をした。此は男女互に相愛しながら、さる事情によつて結婚することの出來ない場合の安全弁として可なり行はれたものらしい。けれども冒頭にも云ふやうに男女の愛はどうしても性交と相伴ふものであるから、この關係が末とけした例は少なかつたやうだ。きつと双方の愛が飽滿して逢坂の關をこえるか、正反對に纒かの事の行違ひから感情が疎隔して離れるか何れかに落ちついたやうだ。和泉式部集には

同じ頃せうとにせむといひたる人の久しう音せぬに

いつのまにいくへ霞のへだつれば 妹兄の山のかたは見えぬぞ

枕草子には則光と清少納言とが妹脊の仲らひで随分親密であつたものが、或日則光の大嫌な歌で消息をしたので（それより前に布の一件もあるが）爾來絶交したとある。

同性の愛、室町文學のやうに中心にはなつてゐないが、人によつては源氏と小君との關係を男色と解してゐる。

萩原廣道の源氏物語評釋には

さてこの小君のさまを思ふに男色をほめかして書たるものと、おほえて前になまめきたるさまして云々とかき出しをはじめてこゝにかくいひ末にいたりて御かたはらにふせ給へり云々、つれなき人よりは中々あはれにおほさるといひ空蟬ノ巻にいたりて手さぐりのほそくちひさきほどなどいへるまさしくそのありさまをあらはされたる筆つき也心をつけてよむべし、然るを諸註にいさゝかも其さだなきは事がらのをこがましき故にもあらめどいとなほざりなることいふべし

とある。そこで本文を見ると、さう云へばさうも解せられさうなのははき木卷末の

よし、あこだになすてそとの給ひて御かたはらにふせ給へり、わかくなつかしき御ありさまをうれしくめでたしとおもひたればつれなき人よりはなか／＼あはれにおほさるとぞ。

次に空蟬の卷頭

いと、らうたしとおほす。てさぐりのほそくちさひきほど、かみのいとなが／＼らざりしけはひのさま似かよひたるも、思ひなしにやははれなり。

と云ふあたりであるが、此説の正否についてはまだ考究の餘地があると思ふ。

人間愛、併し尙深く味つて見ると、王朝戀愛物の根調をなすものは、人なつかしさの人間愛ではあるまいか。小人閑居

して不善を爲す。小人ならずとも閑居の單調は何等かの慰安を要求する。廟堂事なく淡々として今日も一日、明日又一日と暮らすのでは無聊に堪へられぬ。そこで月花折につけての行事が催される歌合、繪合で男女同席の機會が多くなる。政治に缺掌せず、學問に専心せず、宗教に悟道せず、遠遊羈旅の機にも乏しい彼等が、室内生活を主にすれば、室には男子もあれば女子もある。御簾や几帳の愁ひの隔てが、一層異性の好奇心をそゝつて、互になまめいた接觸をする。是は正しく人情の自然であらう。他に心機轉換の途のない以上、血肉ある人間の集團で、此だけの情火が燃えるのは當然と見るべきである。吾々は之を雪の弘前の生活感に移して想像して見る。西風荒ぶ大寒二月、外は寢雪が連日連夜ふぶいてゐる。郵便物や、新聞や、御用聞きを外にしては、誰おとづれるものもない。そこで吾々のやうな變屈人でも、誰かに遇ひたいと思つて近所の〇中尉の宅を訪うて、拙い碁の一面も打つて見る。〇中尉は獨身であつたのがその後郷里のF女學校長の令嬢と結婚された。久し振に又訪うて見る。裏に紅白の干し物があり部屋に鏡臺がおかれてある。人の事だが何となく艶な趣が加はつたやうに思はれる。又この吹雪の晴間にたま／＼同僚の夫人が來訪せられるとその聲とその色彩とで、物とはなしに活氣づくやうに思はれる。この感じを根にして、自乗し、三乗し、聯立方程式を組み立てると王朝物語の戀にまで繋がつてゐるのではないかとも思ふ。だから王朝の物語を直ちにゾラやモウアパッサンの作品と比較して、同じやうな獸性描寫をしたものと觀るのは、大早計である。無論本能的な分子もあらうが、それ以上この人懐かしの感、人間愛、人間趣味の情調が底深く一貫して流れてゐると想ふ。

伊勢物語

此書の作者、題名、年代等については嘗て文學全史に述べておいた。在五中將が實地に踐んだ戀物語と、歌に即して空想した戀物語と虚實相交つて、昔男の艶話一顆々々に別趣を帯び、後の物語物の戀のデッサンとして、遙

か後の西鶴物の構想のプロトプラズマとして（余は思ふ西鶴の好色一代男は源氏物語の源氏より以上伊勢物語の昔男に近いものがある）歴史的の價値もあり、讀んでそれ自身の價値もある。

むかしおとこ有けり。女をぬすみてゐてゆく。道にて、水のまんとふに、うなづきければ、つきなんどもくせねば、手にむすびてのます。さてるてのほりにけり。女はかなくなりければ、もとの所へゆく道に、かのし水飲し所にて

大原やせかるの水を掬ひあて あゝやといひし人は孰らぞ

といひて、きえかゑり、あはれ／＼といへとかひなし。

女を連れて逐電すると云ふ、此時代にしては「戀の放れわざ」とも謂ふべきもの。

むかしおとこ、いろごのみなりける人をかたらひて、うしろめたなしとやおもひけん。

我ならで下紐とくな朝がほの 夕かけまたぬ花にし有とも

女かへし

ふたりして結びし物を獨して 逢みんまではとかじとぞ思ふ

ルーズル博物館に「貞操帯」と云ふものがあつて、夫が不在中妻の操を氣づかつて、不品行のないやうに封鎖した時代の遺物だと云ふ。それは彼にあつては甚しい婦人の侮辱だと云はれてゐるが、我が夫婦互に又逢ふまでの契りをこめて下紐を結び交すのは自發的に出た情契である。

むかしおとこ、ねんごろに、いかでと思ふ女ありけり。されどこの男あだなりとき、つれなさのまさり

て

大幣のひくてあまたに聞ゆれば 思へどえこそ頼まざりけれ
返し

大幣と名に社たてれ流れても つるによるせはあるてふ物を
愛の集配人、戀のはやりつ兒とも謂ふべき有様。

昔男有けり。宮づかへもいそがしくて、心もまめならざりければ、家とうじとまめに思はんといひける人につきて人の國へいにけり。この男うさの使にていきけるに、ある國のしその官人のめになんあると聞て、女あるじにかはらけとらせよ、さらばのまるといひければ、かはらけとらせて、いだしたりけるに、さかななりけるたち花をとりて

さ月まつ花橘の香をかけば 昔の人の袖のかぞする

といへりけるにぞ、思ひ出て、あまになりて、山には入にける。

これは「さ月まつ」の古歌に肉つけした情話である。

むかし世ごゝろある女、いかでこのなさけある男をかたらひてしがなと思へども、いひいでんにもたよりなれば、まことならぬ夢がたりを、むすこみたりをよびあつめてかたりけり。ふたりの子はなさけなくいらへてやみぬ。さぶらふなりけるなん。よき御おとこぞいてこむとあはするに、この女けしきいとよし。こと人はいとなさけなし。いかでこの在五中將にあはせてしがなとおもふ心ありけり。かりしありきける道にゆきあひにけり。馬のくちをとりて、やうくなんおもふといひければ、あはれがりてひとよねにけり。さてのちをさくこねば、女おとこの家にいきてかいまみけるを、男ほのかにまみて

百とせにいとせたらぬつくも髪 我をこふらし佛にたつ

といひて、馬にくらおかせて、いでたつけしきを見て、むばらからたちともしらす、はしりまどひて家にきてふせり、男この女のせしやうに、しのびてたてりて見れば女うちなきてぬとて

さむしろに衣片しきこよひもや 戀しき人にあはでわがねん

とよみけるを、あはれとみて、その夜はねにけり。世中のれいとして思ひおもはぬ人有を、この人は、そのけぢめ見せぬこゝろなんありける。

「我子に戀を打あける親」は今日では見られない好色の沙汰だ。

昔男ありけり。その男伊勢の國にかりのつかひにいけるを、かの伊勢の齋宮なりける人のおや、つねの使よりは此人よくいたはれといひやりける。おやのいふことなりければ、いとねんごろにいたはりけり。あしたにはかりにいだしたて、やり、ゆふさはこゝにかへりこさせけり。かくてねんごろに、いたはりけるほどに、いひつぎにけり。二日といふ夜わかれてあはむといふ。女はたいとあはじともおもへらず、されど人めしゆればえあはず。つかひさねとある人なれば、とくもやどさず、ねやちかくなん有ける。女人をしづめて、ねひとつばかりに男のもとにきにけり。男はたねられざりければ、とのかたを見いだしてふせるに、月のおほるなるに人のかけるを見ればちいさき、わらはをさきにたて、人たてり。おとこいとうれしくて、わがぬる所にゐていりて、ねひとつよりうしみつまで、物かたらひけり。いまだなにごともかたらひあへぬほどに、女かへりにければ、男いとかなくして、ねす成にけり。つとめてゆかしけれど、我人をやるべきにしあらねば、心もとなくてまらみれば、あけはなれて、しばしあるほどに、女の許より詞はなくて、

君やこし我やゆきけんおもほえず 夢か現かねてかさめてか
男いたううちなきて

かきくらす心のやみに惑ひにき 夢うつゝとは今宵さだめよ

(一本並に古今集には五の句よひとさだめよ)

とてかりにいでぬ。野にありきけれど、心はそらにて、いつしか日もくれなんとおもふほどに、國のかみのい
つきのみやの、かみかけたりければ、かりの使ありとききて、夜ひとよさけのみしければ、もはらあひごとも
せで、あけばおはりの國へたちぬべければ、男をもんもなみだをながせどもあふよしもなし。夜やうくあ
けなんとするほどに、女のかたよりいだすさかづきのうらに

かち人のわたればぬれぬえにしあれば

とかきてすゑはなし。そのさかづきのうらについまつのすみしてかきつく

またあふさかのせきはこえなん

あくれば、おはりへこえにけり。

と、是は歌を骨子とした作話の中、出色なるものである。處女の誇りを持たぬ齋宮はない筈だから、こんなひどいこと
が、まさかあらうとは思はれないが、「君やこし、我やゆきけん」を始めこの段に採られた歌を活かす作話としては、實
に巧妙なものだ。

大和物語 「伊勢」と同じく歌物語で中には、貞信公の「小倉山峰のみみぢ葉」や、檜桓の姫や躬恒の「照る月を弓張

としも」などの歌話もあるが、大部分は戀物語で、伊勢と同一の「振分髪云々」の話もあり、萬葉に出た芦屋の菟會處
女の話、それを引うてそれ／＼男女の心になつて咏みかはされた御歌などもある。概して云へば伊勢よりは繊細な書き
方で、女性心理の描寫の方が深味があつて、戀愛描寫の上から見ても伊勢よりも一步を進めた複雑なものが多い。

男女あひしりて年へにけるを、聊なることによりて、はなれにけれど、あくとしもなくてやみにしかばにや有
けん。男も哀と思ひけり。かくなんいひたりける。

逢ことは今はかぎりとおもへども 涙はたえぬ物にぞ有ける

女いとあはれとおもひけり。

此等は伊勢と略々近いものだ。

監の命婦の許に、中務宮おはしまし通ひけるを、方のふたがれば、今宵はえなむまうでぬとのたまへりければ、
その御返しごとに

逢ことの方はさのみぞふたがらん 一夜めぐりの君となれ、ば

とありければ、方ふたがりたりけれど、おはしましてなんおほとのごもりにける。かくて又久しくをともし給
はざりけるに、さがのゐんにかりすとてなん、久しくせうそなどもものせざりける。いかに覺束なく思つら
んなどのたまへりける御返し

大澤の池の水くき絶ぬとも 何かうらみむさかのつらさは

御返しはこれにやおとりけん、人わすれにけり。

などは短くても稍複雑してゐる。

亭子院に、みやすむどころたちあまたみそうじしてすみ給ふ事年比ありて、河原院のいと面白くつくられたりけるに、京極のみやすむところひと所のみそうしをのみしてわたらせ給にけり。春のこと成けり。とまり給へるに、曹司ども、いと思の外にさうくしき事をおもほしけり。殿上人など通ひまいりて、藤の花のいと面白きを、これかれ、さかりをだに御らんせてなどいひて見ありくに、ふみなん結びついたりけり。あけてみれば世中の浅き瀬にのみ成ゆけば、昨日のふちの花とこそみれ

とありければ、人々見て、限なくめであはれがりけれどたが御曹司のし給へるとも、えしらざりけり。男どものいひける。

藤花色のあさくも見ゆる哉 うつろひにけるなごり成べし

源氏、夕顔河原の某院の引合によく出される京極御息所の記事である。平中（平貞文）のことは始めにも夫婦喧嘩で物別れをした一段があるが、次の一段は戀の生憎を寫してやゝ委曲に入つてゐる。

平中が、いろいろのみなりける盛りに、市にいきけり。中頃はよき人々市にいきてなん、色好むわざはしける。それに故きさいの宮のごだち、いちに出たる日になん有ける。平中色好みかゝりて、になうけさうしけり。後に文をなんをこせたりける。をんなども車なりし人は多かりしを、たれにあるふみにかとなんいひやりける。さりければ男の許より

（續後戀一） 百敷の袂の敷はみしかども わきて思ひの色ぞ戀しき

といへりけるは、武藏守のむすめになん有ける。それなんいとこきかいねりきたりける。それをと思ふなりけり。さればそのむさしなん、のちに返事はしていひつぎにける。かたちきよけにかみながくなどして、よきわ

かうどになんありける。いといたう、人びとけさうしけれど、思ひあがりて男などもせでなん有ける。されどせちによばひければ、あひにけり。そのあしたにふみもをこせず、よるまでをとせす、心うしと思あかして、又の日待てど文もをこせず、そのよしたまちけれど、あしたにつかう人など、いとあだにものし給ふとき、し人を、ありくかくあひ奉り給て、みづからそのいとまもさはり給ことありとも、御文をだに奉りたまはぬ心うきことなど、これかれいふ。心ちにも思ひたることを、人もいひければ、心うくくやしと思ひてなきけり。その夜もしやと思ひてまで又こせず、又の日も文もをこせず。すべて音もせで五六日になりぬ。この女ねをのみなきて、物もくはず、つかふ人など大かたなおほしそ、かくてのみやみ給べき御身にもあらず。人にはしらせでやみ給て、ことわざをもし給ひてんといひけり。物もいはすこもりて、つかふ人にも見えで、いと長かりける髪をかいきりて、手づからあまになりけり。つかふ人集りてなきけれどいふかひもなし。いと心うき身なれば、しなんと思ふにもしなれず、かくだに成て、おこなひをだにせん、かしがましく、かくな人びといひさはぎそとなんいひける。かゝりけるやうは、平中その逢けるつとめて、人をこせんと思ひけるに、つかさのかみにはかにものへいますとて、よりいましてよりふしたりけるを、おひおこして、いま、でねたりけるとて、せうえうしにとをき所へるていまして、酒のみのしりて更にかへし給はず。からうじて歸るまゝに亭子の帝の御供に、大井にいでおはしましぬ。そこに又ふた夜さぶらふに、いみじうゑひにけり。夜更て歸り給ふに、此女のがりいかなとするに、かたふたがりければ、おほかたみなたがふかたへ、るんの人々るるしていにけり。此女いかにおほつかなくあやしと思ふらんと戀しきに、けふだに日もとく暮なん。いきてありさまもみづからいはん。かつふみをやらんと、ゑびざめて思ひけるに、人なんきてうちたく。たぞと問へば、なを

ぞうのきみにもものきこえんといふ。さしのぞきてみれば、この家の女なり。むねつぶれて、こちこといひて、文をとりて見れば、いとかうばしき紙に、きれたる紙をすこしかいわがねてつゝみたり。いとあやしう覺えて、かいたることをみれば、

あまの川空なる物と聞しかど わがめの前の涙成けり

とかきたり。尼になりたるなるべしと、みるに目もくれぬ。心きもをまどはして、この使にとへば、はやう御くしおろし給ひき。かゝればごだちも、昨日けふいみじうなきまどひ給ふ。けすの心ちにもいとむねいたくなん。さばかりに侍りし御くしをといひてなく時に男のこころいといみじ。なでうかゝるすきありきをしてかくわびしきめを見るらんと思へどかひなし。なくく返事かく。

よをわぶる涙ながれて早くとも 天の川にはさやはなるべき

いとあさましきに、えものもきこえず。みづから唯今まいりてとなんいひたりける。かくてすなはちきにけり。事のありやうさはりをつかふ人々にいひて、なくこと限りなし。物をだにきこえん、御聲をだにし給へといひけれど更にいらへをだにせず、かゝるさはりをしらでなをたゞいとをしさにいふとや思ひけんとなん、男はよにいみじきことにしける。

又、後妻前妻の關係を採つたものに「大和様よしいへ」の記事がある。

よしいへといひける宰相のはらから、やまとのぞうといひて有けり。それ、もとのめのもとに、つくしより女をゐてきてすへたりけり。本のめも心とよくかたらひるたりけり。かくて此男は、こゝかしこ、ひとの國がちにのみありきければ、二人のみなんのたりける。此つくしのめ、しのびておとこしたりけり。それを人のと

かくいひければ、よみたりける。

夜半に出で月だに見ずば逢ふことを しらす顔にもいはまし物を

となん。かゝるわざをすれど、もとのめいと心よき人なれば、男にもいはでのみなんありわたりけれどもほかのたよりく、かくく男すなりとききて、この男思ひたりけれど、心にもいれで、たえざるものにてをきたりけり。さて此男、女こと人に物いふとききて、その人と我といづれをか思ふととひければ、

花すゝき君がかたにぞなびくめる 思はぬ山のかぜはふけども

となんいひける。よばふ男もありけり。世中こゝろうし。なほ男せしなどいひける物なん。この男をやうく思ひやつきけん。この男の返事などしてやりて、このもとのめのもとに、文をなんひきむすびてをこせたりける。見ればかくかけり。

身をうしと思ふ心のこりねばや 人をあはれと思そむらん

となん、こりすまによみたりける。かくて心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれと思ふほどに、男は心かはりにければ、ありしごとあらねば、かのつくしにおやはらかなど有ければいきけるを、男も心かはりにければ、とどめでなむやりける。もとの女なむもろともありならひにければ、かくていくことをいとかなしと思ひけり。山ざきにもろともにいきてなん、ふねにのせなどしける。男もきたりけり。このうはなみ、こなみ、ひとひとよ、よろづのことをいひかたらひて、つとめて船にのりぬ。今はおとこもとのめは、かへりなむとて車にのりぬ。これもかれもいとかなしとおもふほどに、舟にのり給ぬる人の文をなんもてきたる。かくのみなん有ける。

ふたりこし道ともみえぬ浪の上を 思ひかけでも歸すめる哉
 といへりければ、男ももとのめも、いといたうあはれがりなきけり。こぎいでいぬれど、え返事をもせず、車は舟のゆくを見てえいかず、舟にのりたる人は、車を見るとき、おもてをさし出で、漕ぎゆけば、とをくなるまゝに顔はいとちいさく成までみをこせければいとかなしかりけり。

最後に謡曲「蘆刈」の素材となつた戀物語を現代語に意譯してあげよう。

昔々、津の國難波のほとりに住んでゐる男女、どちらも氏素性は卑しからぬ方だつたが、近頃暮らし向が左前になつて、出入のものも外の甘がりのある家について、眞の二人つ切りになつたが、マサカ日傭かせぎもならず、わびしい中にも二人の愛は尙暖かで「夫をおいて妻は去らじ、妻を見捨て、夫は去らじ」と相憐れんで、か細い煙を立てゝゐた。百計盡きて男は女に向つて「自分は男子のことだからこゝでどうかして食つて行かう、お前は女のことなり若い身空でこんな處に苦勞をするより何とか、つてを求めて都へ上り然るべき御屋敷へお宮づかへをせよ。さて相當仕上げたならばその時たよをしてくれよ。こちら人も人並のくらしが出来るやうになつたらばきつと尋ねて引きとらうぞ」と泣く／＼勸めるまゝに女も悲しいながらもその氣になつて、丁度その頃京人の京に歸るをよいつてに、伴はれて都入り……どこと目當もないのでその夜はその伴ひ人の宅に泊めて貰つたが、どうしても夫のことが氣にかゝつてならぬ、宿の前にはをぎすゝきが風に吹かれて淋しくそよいでゐる。これを見るにつけてもなにはの夫なつかしく

獨していかにせましとわびつれば そよとも前の荻ぞ答ふる

と述懐した。その内さるお公卿様のうちに奉公して、衣裳も一つふえ二つふえ、容姿も段々垢ぬけがしてきて

それにつけても夫戀しく、難波の幸便さいびんに文ことつて、それと探せど便の者は「一向そんな方は見つかりません」とばかり、女は益々氣が／＼になつてきた。……その内當家の北の方が亡くなられて御主人の思召しめでたく後ぞひととして奥方になつた。萬事足らへる生活だが唯一つ難波の里のものと夫のことを思ふと暗愁はいつも胸底深くこだはつてゐた。とう／＼工夫して主人に「難波の里に行つて禊をいたしたうございます」と申出ると「そりやあよからう、まろも一緒に……」「イエこんどは唯妾一人行かせ下さい」「ぢやあさうおし」と快諾を得て供人賑しくやつて來て禊事了へて、もとのすみかに來て見ると、家もなければ人もない。尙もその邊をさまよつてゐると、供人「は早く歸らなきやあ、日が暮れますに」と促す、折から蘆を擔つて通りすぎる賤の男身はやつれ面輪も痛く變つてゐるが、まがふかたなき我が夫、あゝ誰か、あの蘆刈をとめておくれ、蘆を買はうに」「マア御臺様の御物數奇な……」で車の簾の透間から件の男をしげ／＼と見た。「お、この男に澤山おあしをやつて下さい、マア可愛さうに……」と云ふ。お供は唯一般的な同情の詞として聞いたが蘆刈は一目見るや「あゝ我妻か——」とひどく驚くと共に、今の我身のなり振恥しく、逃げてとある家の竈の陰にかくれたのを供人をやつて、慇懃に慰めたが、男は何も云はないで、唯「これを」と云つて歌一首

(拾遺雜下)

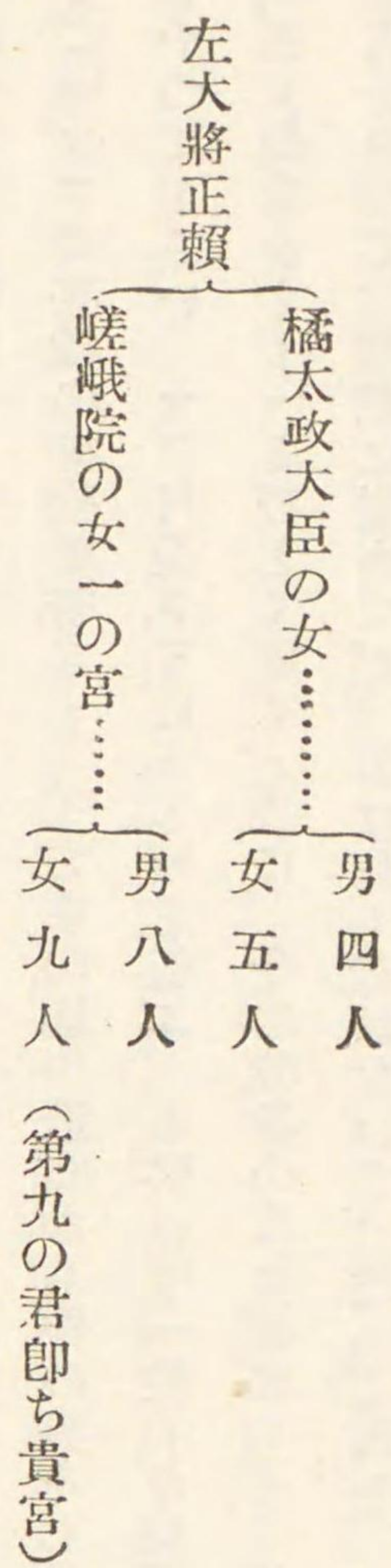
君なくてあしかりけりと思にも いと難波の浦ぞすみうき。

宇都保物語 貴宮はかぐや姫を天上から地上に拉致した美人である。紫上はその貴宮を更に生ひ立ちの頃まで還元した美人である。貴宮を中心にして公達の騒ぐ有様は、かぐや姫の周圍に多くの懸想人が集つたのとよく似てゐるし、かぐや姫が八月三五、十五夜の月明に昇天したのは、貴宮が東宮に入内したのと似、その昇天後、入内後、懸想人の失望

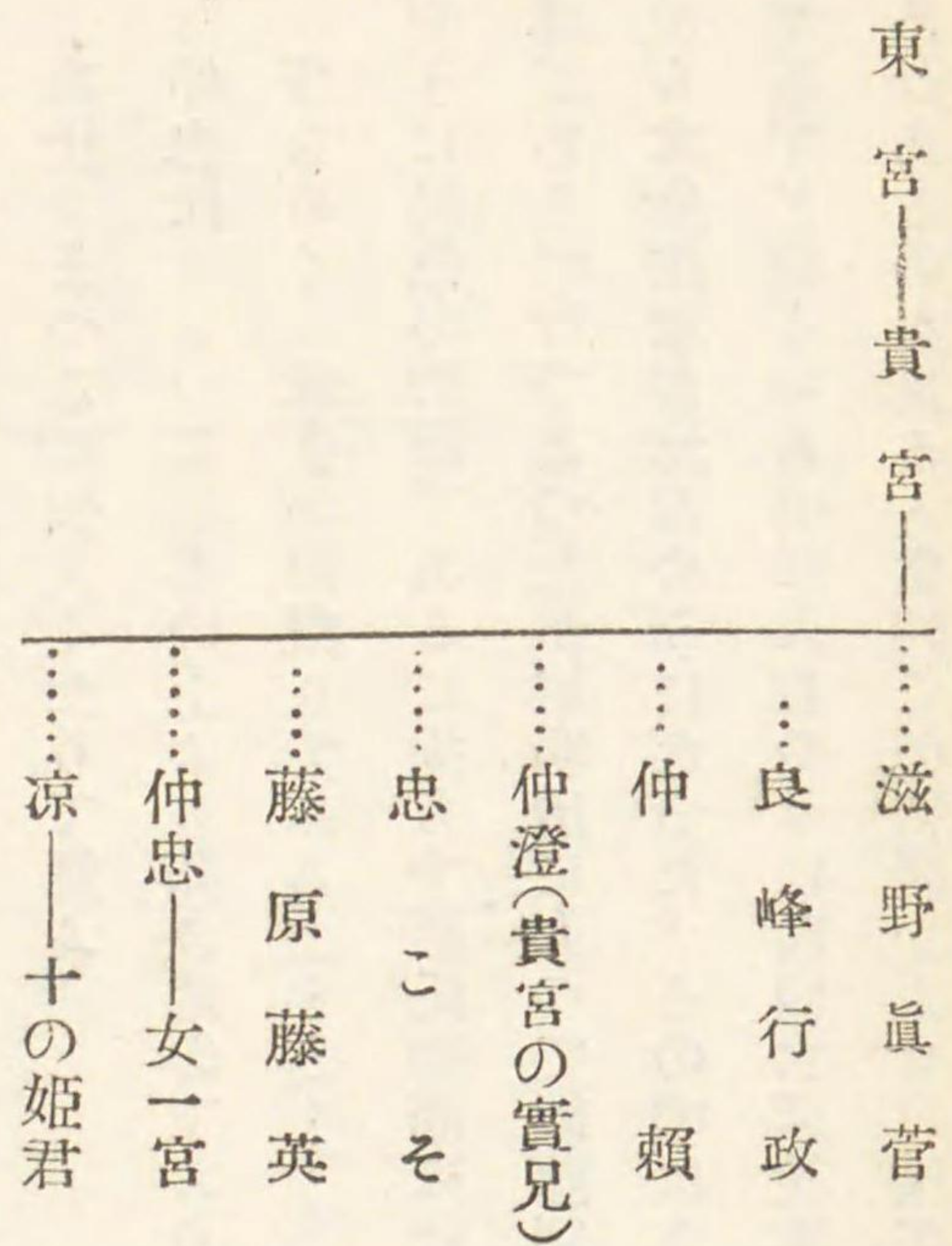
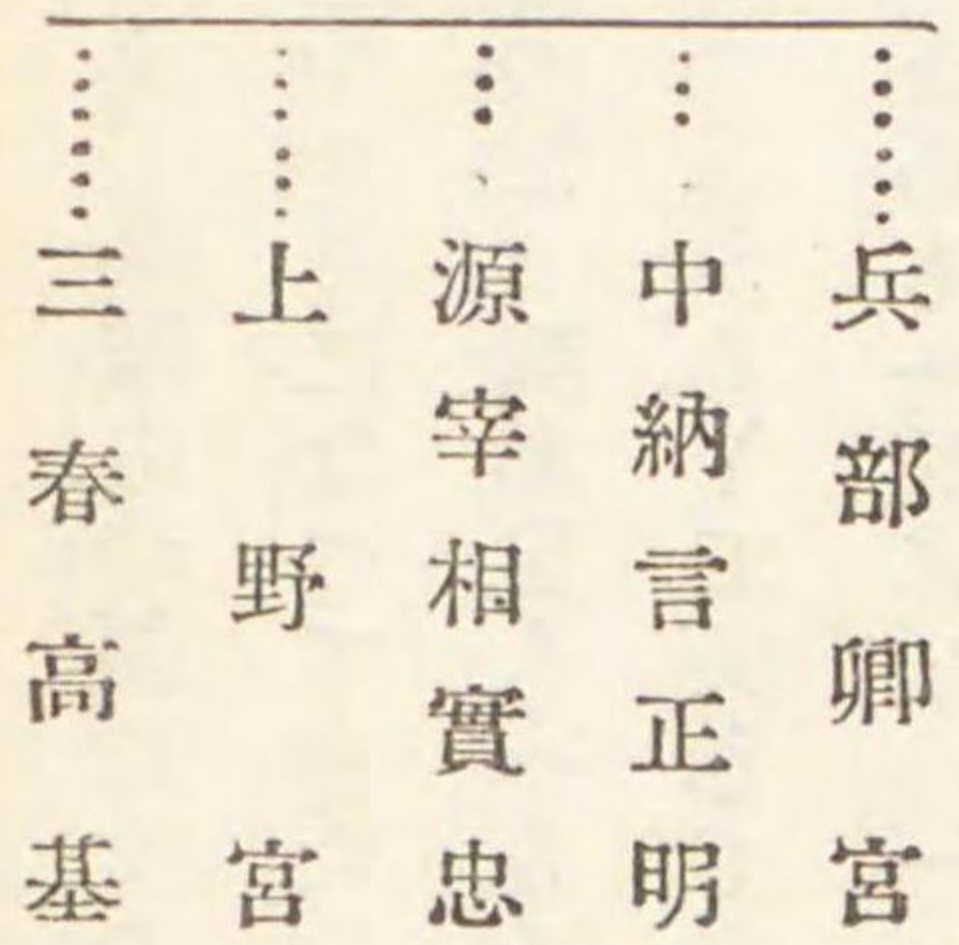
振もよく似てゐる。四代相傳の琴の秘曲に神秘的な着想を以て取扱つた處はまだロマンスの臭味があるが、東宮のお世嗣に思ひきつて貴宮の御子を宛てられるところなど大分寫實的な點もある。

此物語によつて吾人は特に何を受けとるか、

第一は一夫多妻の風俗と相俟つての家門の榮えである。左大將正頼は二人の北の方の腹に男兒十二人女兒十四人計二十六人と云ふ子福者であつた。



これを見るとときやがて當時の藤原氏の系圖表を思ひ出されるところから觀て、この物語はどうしても王朝の産物らしい。第二には戀の力の偉大さである。今その主なる貴宮を中心とするものゝのみを表示すると(實線は關係が實際に成立つたことを示し、點線は單に懸想しただけの關係を示す)



貴宮一人の爲めに吝嗇で通り者の高基が財産を蕩盡したり、臆病な藤英が口角泡を飛ばして議論する。忠こそは世を僂んで出家行脚する。實忠は妻子を捨て、出家する。肉親の兄でありながら仲澄は焦がれ死にした。眞菅は控訴文を上つて伊豆へ流された。女の力否戀の力は巧みに寫されてある。

第三には背景の轉化である。

海上の暴風、波斯の漂着、梅檀の林に神仙味を充分盛つて次は華やかな都の宮廷や、京極の閑居、又一轉して北山のうつほの暮し、場面稍たるまうとする時、春日と吹上の濱とを點綴して雅致一段の光彩をそへてゐる。

第四には琴を中心とする音樂小説であり神祕小説であるとも謂ひ得る。

俊蔭が十六歳で渡唐し難船して波斯の國に漂着、そこで三人の仙人に琴を習つてゐると、琴の音のとだえ／＼に遙かかなたの谷底から伐木丁々の音が響いて來る。音をしるべに辿つて行くと異形の阿修羅が大木の中に居てそこへ天人天女

の群が舞ひ下り、件の大木を伐つて三十面の琴を造つて俊蔭に與へたことや、更に梅檀の林に分け入つて七人の仙人から琴の秘曲を授かつた話、それから歸朝して、帝の御懇望によつて少しかき鳴らすと大殿の上の瓦碎けて花の如く散る。今一つ仕うまつるに六月の十日の程の雪襖の如く凝りて降るとある。

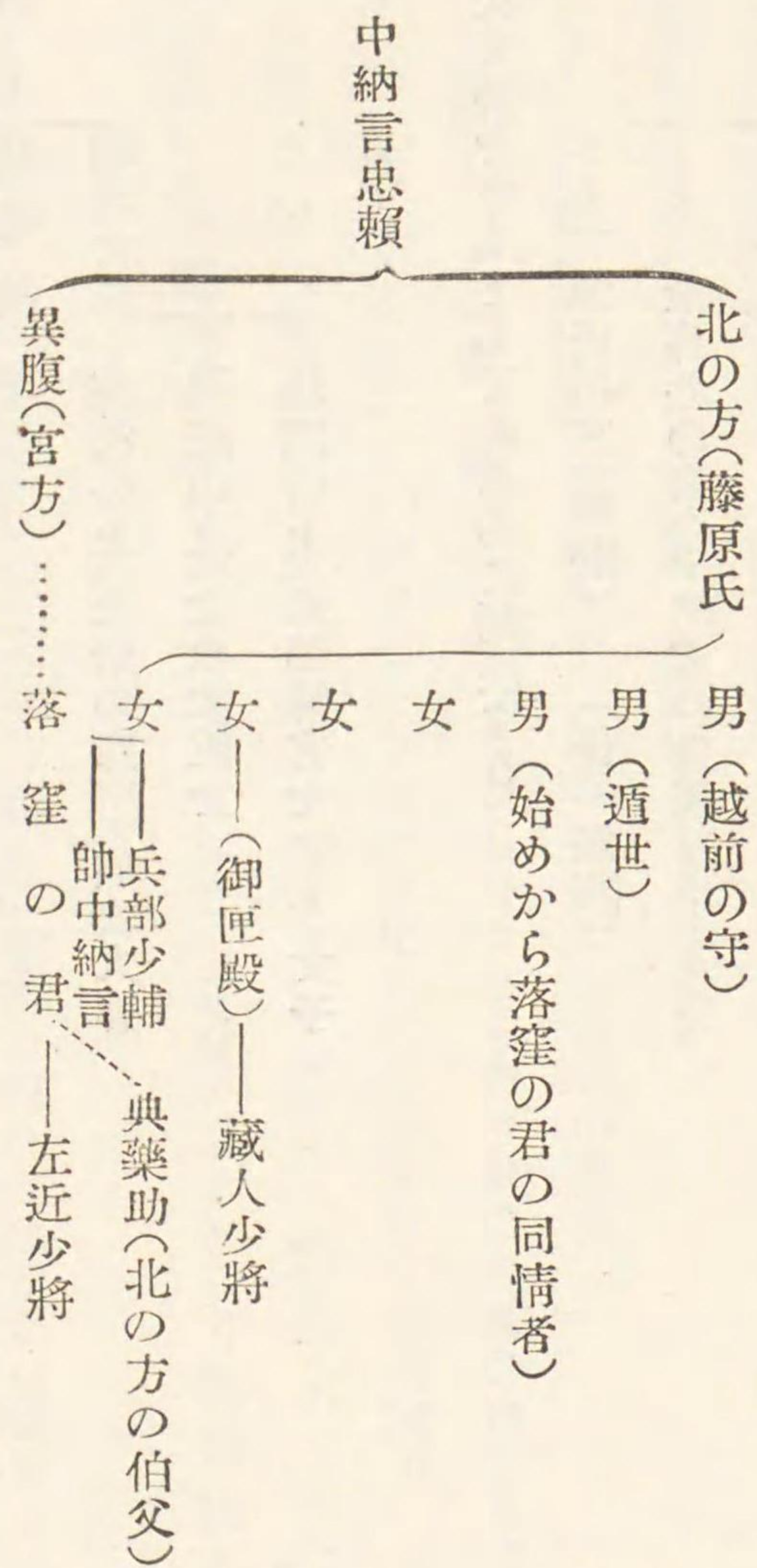
それから三條京に閑居し一人の娘に遺言して「地中に二挺の琴が埋めてあるから之を寶として子孫に傳へよ、幸福の極み、禍の極みには必らず彼の琴を鳴らせ、子孫琴の器量あるものを見極めて傳へよ」と言ひさせた。此女と藤原兼正と一夜の契りて生まれたのが仲忠で、幼時母とうらぶれて北山の奥のうっほに住んで毎日母から琴を教はつた處、猛きけだものも涙を垂れて謹聽したと云ふ。件の琴は俊蔭、女、仲忠、犬の宮と父子四代相傳して代々奇特を示した。その中でも涼と仲忠が神泉苑の紅葉の賀に競ひ弾いたときは滿堂を驚異せしめた。涼仕うまつるに仙人くだりて舞ふ。

仲忠仕うまつるに雲の上より開き地の下よりとよみ風雲動きて月星騒ぐ、屏風のやうなる火ふり、雷鳴りてひらめく、雪衾の如凝りてふる……

このやうに出色の物語であるに拘らず源氏物語にけおされて後世さまで注目する物なく、細井大人の玉琴など一二の注釋の書があるだけであつたが、明治に入つて故藤岡博士が國文學全史にその文學史的價値を推獎して解説批評を加へられてから大分注意されるやうになつた。その頃はまだ原本の可いものがなかつたが今日では、王朝文學叢書、校註日本文學大系などいくらかも手に入るやうになつた。(枕草子に宇都保物語の人物について仲忠方涼方と方人を別けて評論するところがあるのを見ると當時この物語が人口に膾炙してゐるた有様を想像することが出来る)

落窪物語 繼子いちめの小説だが、阿漕と帶刀との戀、それから點火した落窪の君と左近少將との戀は、愛と義俠を

縋ひ交せて鮮明に描き出されてある。



北の方は落窪の君を極度に憎んで、その手の機用なので、娘や娘婿の晴着を縫はせ「阿呆の一藝だせつせと身を入れてしておき」なんか云つて……唯一人の同情者阿漕と云ふ母君在世當時からの侍女で、これの情人を帶刀と云ひ帶刀の母は左近少將の乳母であつたから、落窪の君のことがつひ左近少將の耳に入つた「容姿も美し、手技も機用にありながら、繼君にさいなまれて眞にお氣の毒だ」と様に、之をきいた左近少將はその境遇に同情しその才色に憧れ、阿漕の手引で彼の君の許へ通ひそめた。之を見た北の方は心外に堪えず彼の君を酔や酒や魚などを積んだ納屋に押し込めて伯父の典藥助に番をさせた。典藥助は齡六旬を越えながら人一倍の好色漢であるから、つまり典藥助に姫を許したも

同様だ。危害の手は刻一刻に迫つてあはやの間際、左近少將がうまく引取つて大切にかしづく。以下はこの少將が北の方に對する報復で、自分が妹の關係上榮達するにつれて手かへ品かへて北の方をいぢめ、結局は中納言の一族をかばつてやつてそれ／＼立身の途をはかつてやつたと云ふ。

主想が明瞭で、筋の運びもたるみなく落窪の君のしほらしさもよく作者の同情を反照してゐる。

狭衣物語

先帝——嵯峨院

堀河大臣——堀河の上(先帝の妹)……狭衣大將

——洞院の上(太政大臣女)

——坊門の上(式部卿宮女)……女子

戀は狭衣大將を中心として直系的に開展する。

……一 源氏の宮(齋院)……(後一條院)

——二 飛鳥井の君(中納言の遺孤)——女兒

——三 女二宮——男兒

狭衣大將——四 女三宮

——五 一品宮(今上の妹)

——六 式部卿宮の女(源氏の宮の姪、藤壺と云ふ)——男兒

……七 致仕大納言女

源氏の宮とは従兄妹の仲とて、振分髪早くから互に憎からぬものに思つて居るのに、浮世は餘りにこの戀に残酷であつた。帝は大將をめでて「二の宮」を賜はらうとしたが、

いろ／＼に重ねては着じ人知れず 思ひ初めてし夜半の狭衣

と咏んで辭退した。(本書の題名はこれによつてつけたもの)世の生憎のはかなさに、いつそ出家でもしようと思ひ惑つてゐる矢先に飛鳥井の君が人にかどはかされかけてゐるのを援けて連れ歸り、その初々しいやさ姿がいぢらしく、いぢらしさが嵩じて戀となつたが、それも末とけはせず、女は乳母の勧めであらぬ人に嫁ぎ、九州下りの中途、韓泊で入水、而かも宿縁いまだ盡きず叔母なる人に扶けられて「常盤の尼」として又都住みをし、その中大將の胤の一女兒を産んだ。

一旦は許されながらも辭退した女二宮とはその後物の紛れにはかなき契り……罪は乳房に色しるく、やがて安産男兒の出生、併しあまりに我々母子を侮辱した仕打とて二宮の母妃は憤死、二宮は世に面なくて尼とられた。帝は位を譲ると共に女三宮と若宮とを大將に托される、三宮は容貌も二の町、才もあまりすぐれてゐないのであまり大將の興味を惹かぬ。若宮實は自分の落し胤なので(世間體をつくらつて二の宮の産まれた御子を母妃の御子といふことにしてあつた)それを引とつて子とは云はれぬ我子の哀れさが一入深くなつた。

今上の御妹一品の宮が彼の飛鳥井の君に産ませた姫君を養ひとつて居られるので、その姫君が氣がかりで宮の處へしけ／＼通はれると、兼て宮に懸想した權大納言はつきりこれを戀敵と感ちがひして、あらぬうきなを言ひそやした。

この誤聞が天朝に達すると早速大將を召して宮を公然ゆるされる。宮は三十歳大將は二十一歳九つ上の北の方とて目移るべくもあらぬ。宮は宮で「何もわたしを愛しての結婚ではなくて、養女が可愛いばかりに引きつけておかうと云ふのだらう」と云ふ反感さへもあつて鴛鴦の食は冷え勝ちであつた。

龜山の麓式部卿宮の邸の垣間見にその姫君が日頃戀うてゐる源氏の宮そつくりなので、大將いと胸とゞろき、その母君の死後忌明匂々堀河の自邸へ迎へとつて情交いやましに濃やかとなつたので、始め危んだ乳母たちも悦んだ。

此と相前後して致仕大納言女みよしと聞いて垣間見たが、さほどにもなかつたので、そして一方式部卿宮の姫君へ熱中しかけてゐる時だつたのでそのまゝにした。

さる程に祥瑞頻りに起つて大將は遂に天皇の位を譲られた。式部卿宮の姫君が入内して中宮となられ藤壺と稱して、うるはしき男御見さへ出來てめでたしく終る。

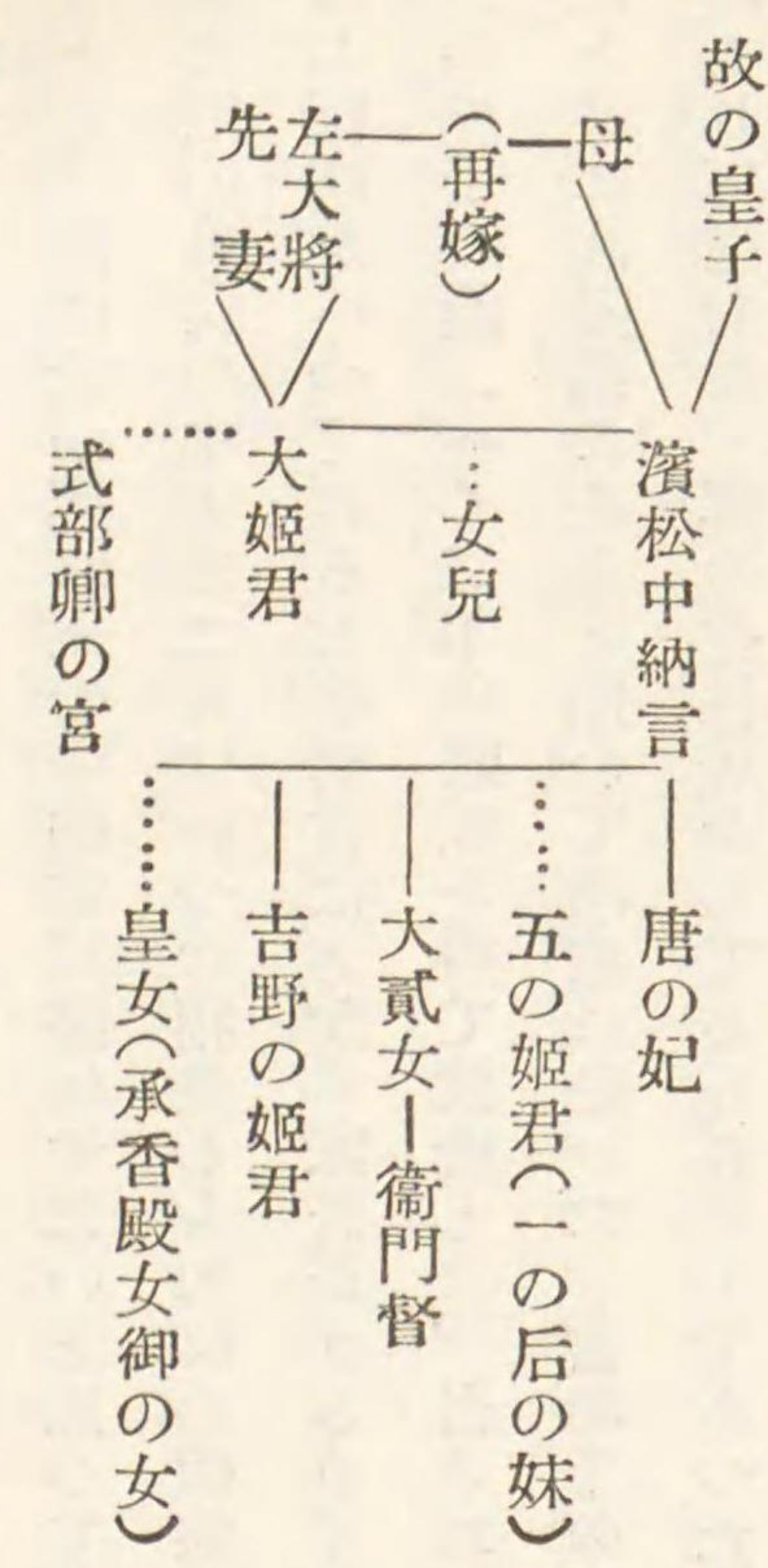
以上の梗概によつて見ても此物語は源氏の踏襲であることが明瞭だ。

- 狭衣大將——源氏の君
- 飛鳥井の君——浮舟
- 致仕大納言女——末摘花
- 源氏の宮——藤壺
- 今姫君——近江の君
- 藤壺——紫上

と直ぐ聯想される、一品宮の關係だけは稍新しい。天人が舞ひ居りたり、神殿が三たび鳴つたりするやうな神秘的脚色は源氏よりは寧ろ宇都保に近い、唯大將を主人公にして生一本な戀の發展を四卷の短小な形に纏めた點が優れてゐると云はれる。その他にはあまりとりたてゝ云ふ程のことはない。源氏の宮の性格はもつと印象的にはつきり寫す必要がある。いつも大將が積極的で宮は受身である。受身であつてもよろしいが、それなら大將がそこまで熱中する所以の宮の

めでたさがもつと強く寫されねばならぬ。仲忠——源氏——狭衣大將とは系列がついてゐるが、源氏の宮は貴宮や藤壺や紫の上の後に直繼するには稍劣つた女主人公だ。口に高尚な道德を喋々する下劣な人格者があり、理論として高級な嵩高美を高潮しながらその作品は淺はかな藝術家の作品もある。此物語の神秘莊嚴は言葉だけのそれぢつとも深みがない。陰影を持つてゐない。余は思ふ源氏の後に狭衣が出たのは老近松の後に竹田出雲や小近松が出たのと關係がよく似てゐると。器用に筋を運ぶことに於ては一步の長があるが醇乎として醇なる趣は戯曲ならば老近松、物語ならば源氏に限ると思ふ。

濱松中納言物語 (御津の濱松)



題名は 日本本の御津の濱松今宵こそ 我を戀ふらし夢に見えけれど云ふ卷一の歌からとる。

濱松中納言物語 (御津の濱松)

卷数は四卷、著者は菅原孝標女、出来たのは狭衣物語と略々相前後して作られたものと云ふことになつてゐる。

亡き皇子の遺孤濱松中納言は才學世に優れた公達であつた。母君は彼を連れ子として左大將に再縁したが、その左大將には先妻との間に多くの姫君があつたが、就中大姫君の婉容世になくめでたかつた。父は之を式部卿の宮に嫁がせようとし、母は我が連れ兒の中納言に娶はせたいと思つてゐる。遠くてさへ近いものに云ふ男女の中、ましてやこれは近くて近い男女の中とて二人はいつか相愛し人知れぬ假寐の夢の度重つて竟に因果の胤を宿した。父は腹を立てるし大姫はしほれかへつてゐるし中納言はとかく家居がうるさくなつたので、夢の御告げを幸に、亡き父君の生れ變りの唐帝第三の皇子に逢ふべく三年の賜暇を得て渡唐した。召されて唐帝の謁を賜ひ才學直に滿廷を驚かせたが、尋ねる皇子は母后と共に高陽縣に在りと聞いて同地に赴いた。當時この妃は帝の寵幸並ぶものなき有様であつたが、一の後の外戚にけおされて已むなく鄙の佗住居をしてゐられるのであつた……中納言は皇子に逢ひたさに懇々高陽縣に行つたのだが、行つて見れば後の容顏玉の如く、一目見て戀に落ちた。この后と云ふのはもと遣日の使が筑紫の旅寢の假枕にその頃流人として謫居せるさる皇族の姫方と契つて産んだ子であつた……唐帝は第五の姫を中納言に賜はらうとするが、中納言は一向それには氣も乗らず、専ら後の宮と熱い危い戀の旨酒を汲みかはす中、一夜の肌觸れに若君一人を儲け、三年の期限あけに己むなくその兒を連れて泣く泣く歸朝、后は一封の書狀を認め「妾の産の母上は、今吉野の山の奥深く住まはせられてゐる筈です。もし御歸りになりましたらこれを御ことづて下さい。中には「あなたをば妾同様我子と思つて親しんで下さい」と書いてありますから……と、多くの唐人に送られて、千波萬波の海上も無事に筑紫に船泊ると、そこの大貳に娘があつてこれを機にお進めしたいと云ふが唐人の手前、若君の手前、そんな氣にもなれなかつたのでそこへ断つて急ぎ上京。かへつて見れば大姫君は尼姿、養父の左大將はすっかり氣が折れて、中納言をやさしくも

てなす。之に心もやはらいで尼の大姫を訪ねて清く親しく交情をつづけた。大貳の娘は親の後見で押かけ女房のやうに都へやつて来てあらぬ人に嫁いだが、斯と聞いた中納言は之を訪ねて喃喃蜜々いつしかたゞならぬ中となつた。妃のたのみもあることゝて吉野を訪ねて行つた處、後の母君はその後又もやさる人に言ひよられて美しい姫君を産まれたが、今は尊き佛の行ひのみして道心堅く暮らして居られる。中納言に逢ひ後の文を見てひどく悦んで「これからは度々いらしつて下さい」なども云はれる。中納言も流石にゆかり憎からぬ仲とて暇ある毎に訪れた。八月十五夜心ゆくばかり吉野のたけに月澄む宵に姫君の妙なる爪琴を聴いて、そゝろに神遊き魂馳する思をし、これより中納言は段々その姫君(唐の妃の義妹)に心をよせた。

帝は承香殿腹の姫を中納言にやらうと云はれるが、吉野の姫君を思ふ彼は利害得失の打算の餘裕もなく之を断つた。天皇御機嫌頗る斜となり官位は之が爲めに停滯したが、彼は少しも苦にせない。その中吉野の君の臨終となり、姫を托されて「今この姫は十七歳だが、廿歳になるまで萬端の躰けをして、それから御身の妻とせられよ」とのことに中納言は悦んでその通りを守つた。

一年の春、三月十六日の夜の月を睦まじく二人で見ると、み空のかなた聲もさやかに「高陽縣後の、今ぞ此世の縁つきて、天に生れ給ひぬる」と三度まで響いたので二人は始めて唐の妃の死を知つたと云ふ。

源氏物語中殊に宇治拾帖の焼直しらしい處が多いが、主人公を渡唐させたのが稍新しい。尤も支那の地方色はちつとも發揮されてゐないが、渡唐そのものにまつはる描寫はこれまでの物語には見られない新し味である。官位の停滯をも意に介しないでひたぶるに戀に精進する主人公の熱情も面白いし、宇治を吉野に引込めた工夫もうまいと思ふ。けれど竹取、うつほ、源氏と經過して段々ノーヴェルの方向に發展した折角の物語に中納言に對する夢の告げや、居ながら

にして母の所在を知る后や、その他多くの不可思議な脚色をしたので物語は又竹取の舊態に逆轉してローマンスに近いものとなつたのが何より惜しい氣がする。

其他の物語、日記 男はあらぬ妻を迎へ、女も思はぬ夫に嫁いで世をはかなんで居たものが、幸か不幸か相手の妻、夫は早く世を去つたので、相愛の一對本意の如くにそひとけたと云ふ「夜半の寢覺」男は女の如く、女は男の如く、双方服装を反對にして育てられたので男の女は宣耀殿の女御となり、女の男は權中納言となつたと云ふ「とりかへばや物語」短篇十帖を有機的に联接して我邦短篇小説の備をなした堤中納言物語、題目だけ傳はつて内容の不明な「殿うつり、月まつ女、交野の少將、梅壺の少將、人め、國ゆづり、埋木、道心す、むる松が枝、こまの、朝倉、ねざめ、井手少將、蘆火たくや、伏籠少將、みづから悔ゆる物語」など當期の戀愛文學は中々豊富である。

それに日記と銘打ちながら實は戀愛生活記録とも謂ふべきものに和泉式部日記や蜻蛉日記がある。

蜻蛉日記 著者右大將道綱の母はかの

なけきつゝひとりぬる夜のおくるまは いかにか久しきものとは知る

の一首で誰しも知つてゐるが、彼女が王朝稀に見る苦い戀の體驗者であることはこの日記を見たものでなくては解らない。件の歌は大鏡にもあつて夫の兼家をきめつけもので諷詆婉曲、怨んで亂れず、と云つた趣がある。

正四位下藤原倫寧のいつき娘として深窓の下に芙蓉の美を含めて靜かに女のすなる諸業にいそしんでゐたものを、逸早く手折つたのは右兵衛佐兼家(後の東三條攝政)でそれは天曆八年のことだつたが翌年八月には一子道綱が産まれたの

で迎へられて正妻となつた。日記はその頃から天正二年まで廿一年間を書き綴つて、中に天徳三年から應和元年まで三年間は闕文があるが、可なり永い生活を書いたもので、量も王朝の日記文中一番多いものなり、他の類書とは趣を異にして自から一體を爲した觀がある。

兼家は快活で諸諱を好み細節に拘らぬと云つた風の人でさるがう言は始終に口を衝いて出るが、彼女は陰鬱で、嚴肅で、眞面目で文才があつて、道心が深くて氣位も高かつた。この相容れぬ性格が悪く衝突しては色々の悲劇を産み、互に相牽引しては熱烈な愛慾を産む、かけろふ日記の根調は畢竟かうしたものである。

快活な上に多情好色の夫は彼女以外に

藤原仲正の女(時姫)

藤原國章の女

源兼忠の女

と三人の妻を愛したが、三人ながら自分が正妻のつもりで、相譲らず、見苦しい愛慾の鬭争に世の人は「三妻雖」とあざして笑つた。彼女を合せれば正に五角關係であつた。

夫の不しだらを怨み、我身の輕卒に許したことを悔いる心がそろ／＼彼女に萌しかけた。幼兒の道綱は廻らぬ舌で父が辯解のまねをして「今來ん／＼」と言ふ。それも彼女には痛ましい一つであつた。

心を決して鳴瀧に走りそこで尼になつてしまはうとさへ決心するに至つた。その時の心境は

それより後、しひてつれなくて、例のことはり、これとしてかくしてなどあるもいとにく／＼て、いひかへしな
どして、こと絶え二十日になりぬ。あらたまれどもといふなる日のけしき、鶯の聲など聞かまゝに、涙のうか

ぬときなし。二月も十日になりぬ、聞くところ十よなん通へると、ちぐさに人はいふ。つれづれとあるほどに、彼岸に入りぬれば、猶あるよには、しやうじせんとて、うはむしろ、たゞのむしろの清きぞ敷きかへをすれば、塵拂ひなどするを見るにも、かやうのことは思ひかけざりしものをなど思へばいみじうて

うちはらふ塵のみ積るさむしろを なげく數にはしかじとぞおもふ

これよりやがて長さうじして、山寺に籠りなんに、さてもありぬべくば、いかで猶世の人の絶えやすく、そむく方にもやなりなましと思ひ立つを、人人「しやうじは秋程よりするこそいとかしこかなれ」といへばえさらず思ふべき、さいふやうの事もあるを、これすこすべしと思ひて、立たむ月をぞ待つ。

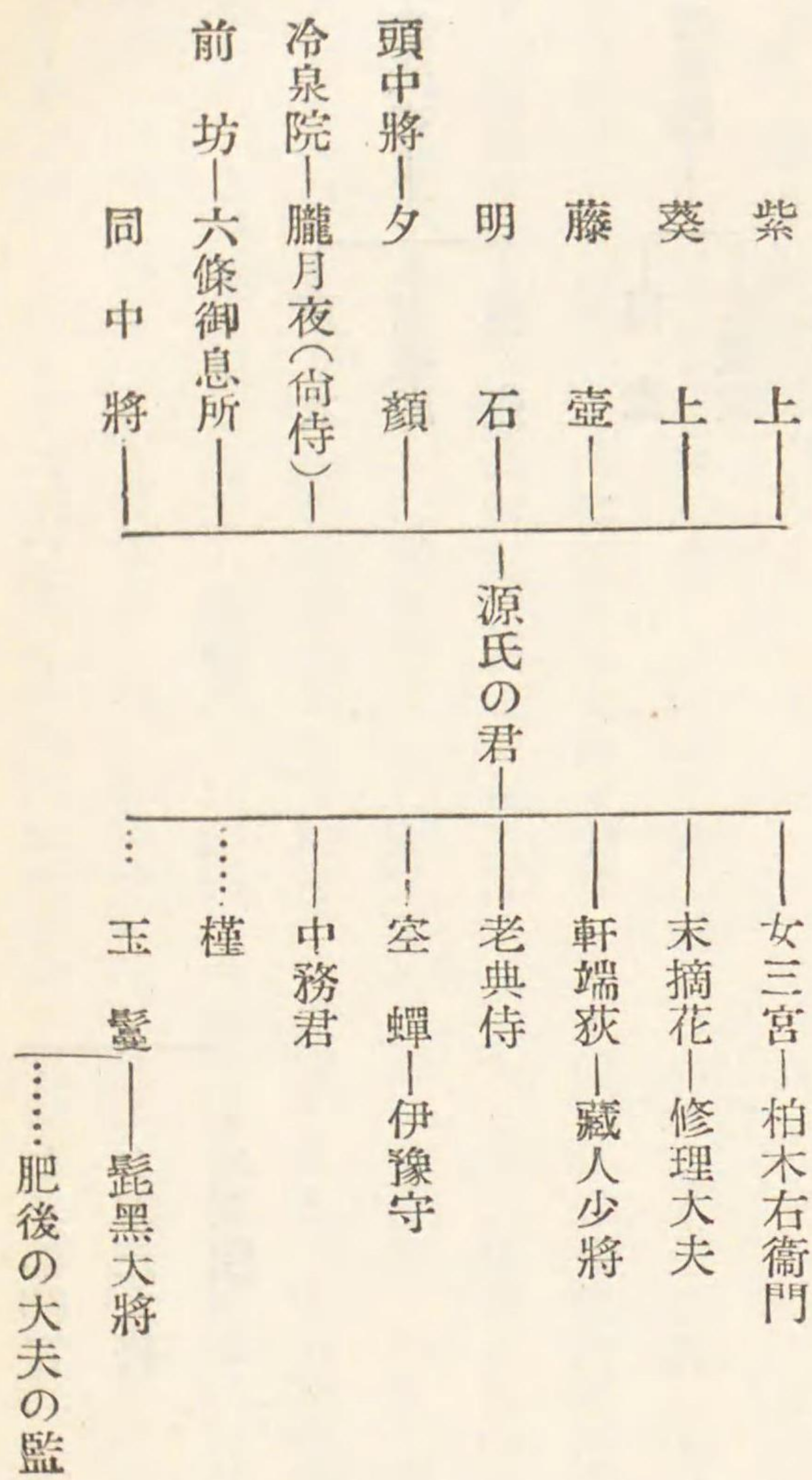
けれども兼家と道綱が度々やつて来て熱心に止めたので遂に山を出て歸つた。すると氣輕な夫は彼女を雨蛙(尼歸る)と渾名した。かくてその後夫に馬鹿にされるのが度々あつたが彼女は決して夫を馬鹿には扱はなかつた。夫が兼忠の女に産ませた女の兒を滋賀の里から呼び取つて愛育したのも、夫に愛せられたさの苦心から出た衷情であつた。藤原高光が妻や源高明が妻の悲境に沈んでゐるのを見ても之を人事ならぬまでに同情して、長歌短歌の心づくしの慰めを云ひ遣つた。「女は弱しされど母は強し」を字面通りにとるとすれば王朝の女性はその反對で「女は強しされど母は弱し」であつた。深窓の處女として多くの男子の愛のたよりに受け取つて澄んだ瞳で見て、小さな胸にとつおいつする間は諾否の權を織手に握つて男はその足下に跪かんばかりの態度に出るが、一度その操を許すが境で主客の位置は顛倒して納戸の風のそよぎにも枕の塵の高きをかこち、水鶏の名の櫛の戸をも夫や來ると胸ときめかす。そしてこの道綱の母の如きはその最も適切な代表者でありこの蜻蛉日記はその最もよき代表記録である。

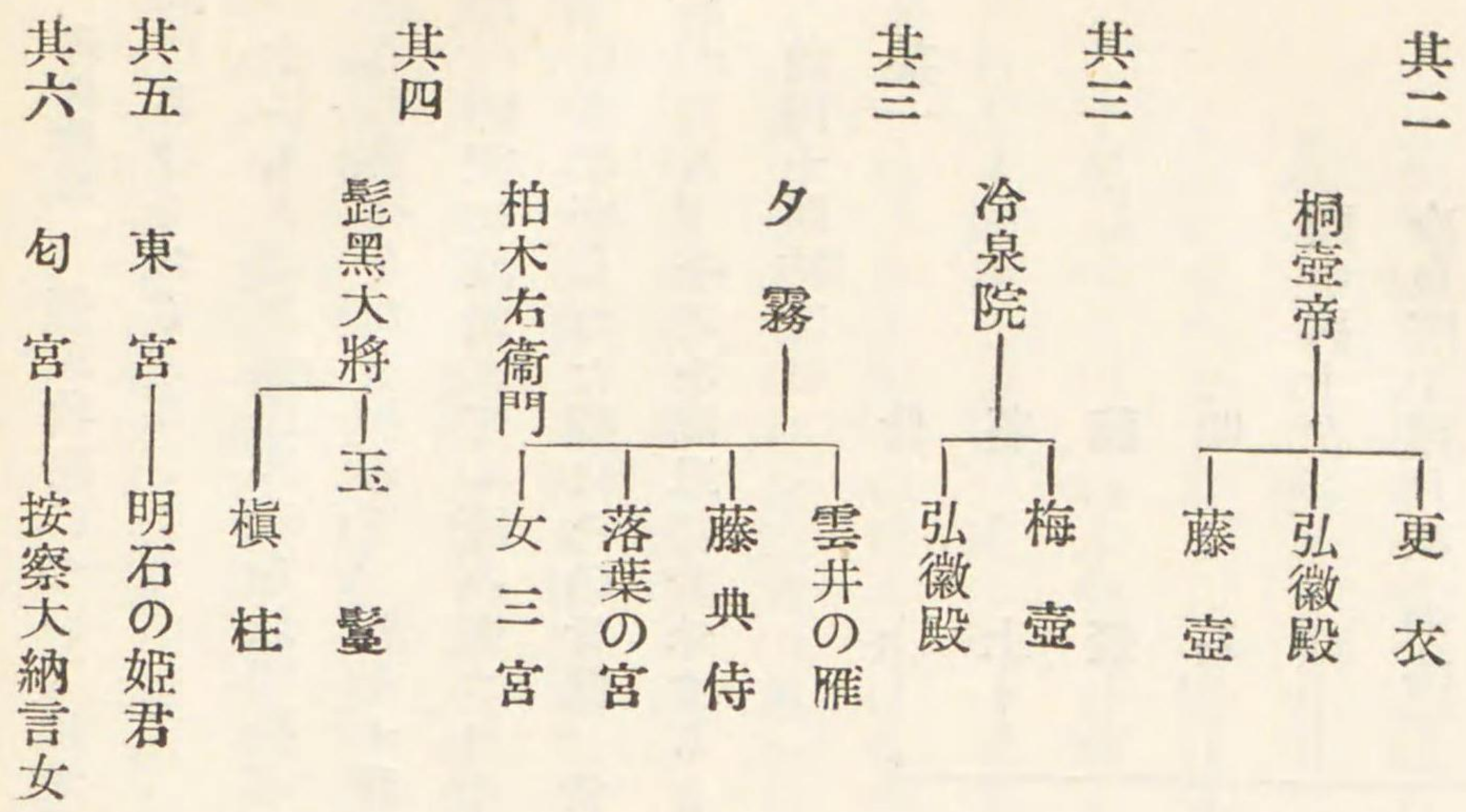
源氏物語 源氏物語については最早や從來幾らも評論されてあるので「今更何を」との感じもするが、尙こゝに補遺的にあけておく。

余はもとより源氏學者を以て任じてゐるものではないが、單に國文學の一部分としての本書に對してすら、此迄目を通した書物をかぞへると、約七十種五百冊近くにもなる。而かも年々新しい人の、新しい編著を見る。或は生涯この物語の研究に没頭しても讀み盡されなかつたかも知れぬ。

此書に盛られた戀はその貴賤、貧富、賢愚、美醜、冷熱極めて多趣多様であつて宛ら王朝戀愛生活の勸工場のやうな觀がある。今之を簡單に表示すると、

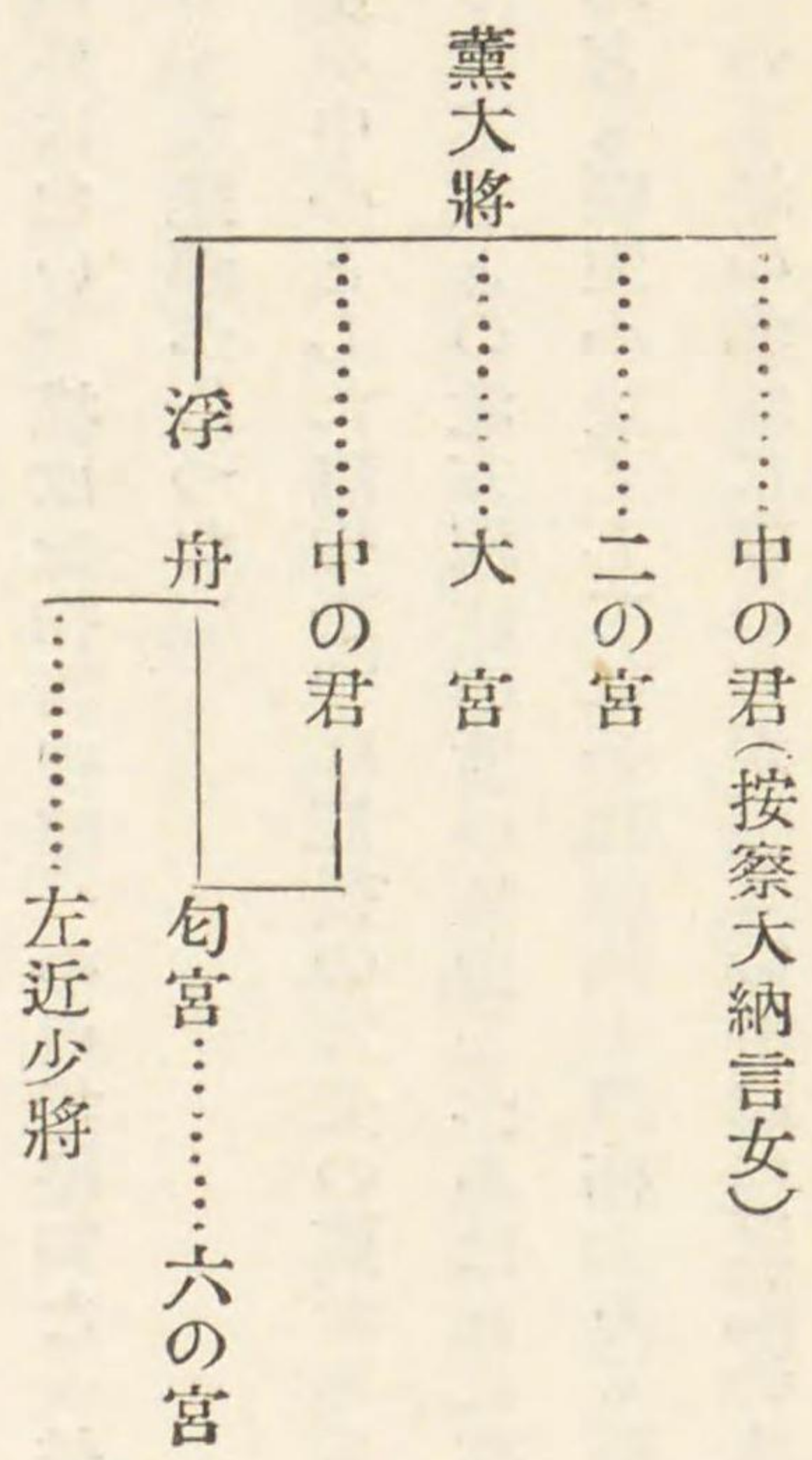
前四十四帖では





……匂兵部卿宮
 ……夕霧左大將
 ……冷泉院

後の宇治拾帖では其七



其八 夕霧 — 按察の君

北山の小柴垣のかいまみから見初めて、幼い時に迎へ取り、心ゆくまでに女らしく躰けた紫上は生まれ素性も容姿も心ばへも、申分のない女性で、年も源氏とは七歳下で廿一と十四の年の新枕以來情交年と共に濃やかであつたが、戀としてはあまりに圓滿すぎるので此の須磨の謫居や女三宮の土俵入でその單調を救はれる様に工夫されてある。葵の上との戀も親がおしつけた、白粥のやうな無味なものだが當時の風俗の一反照である。藤壺の人となりは紫上の前驅として深みもあればやさしみもあり、一味の哀愁も加つて此卷の一佳篇である。右大將道綱の母から何かをさ、やかれたのではないかと思ふやうな明石は飽くまでも標置高く、源氏の君の實意の底を見届けてから始めて處女の誇を捧げた、生まれたる姫君の館迎へから入内につれての悲喜と共に此亦のでたい脚色だ。夕顔は男好きのする女「愛らしくて、おほこで、あだつほくてすなほ」な性として河原の某院の夭折は此卷中の戀の最大級の悲劇を演じて最も讀者の同情あつた描寫とな

源氏物語

六七七

つてゐる。花は爛漫風は駉蕩、處は九重の御殿の細殿、朧月夜の戀は正しく春の氣が産んだ愛の示現であらう。見る人も息詰るまでに思ひつめのほせつめる六條御息所は悪女ならぬ美女の深なさけと謂ふ物で、此物語中稀に見る濃性の女の典型である。それに召使はれてゐる中將の方がめやすく此にも情のうつつた源氏は牡丹のはたにコスモスを並べた様な感じもしたらう。女三宮が柏木と密通する場面は深刻で緻密で坂田藤十郎式に出来てゐる。眞劍の戀としては此篇中の傑作であらう。未摘花は素性はよいが容貌が悪くて二の町に思はれた人、寧ろ源氏の人となり——一度手をつけた女は飽くまで見捨てない——事を反照した物だ。軒端の萩は美人でそゝつかしやで、淺はかな女だ、空蟬とまちがつて源氏が接近したことをも氣づかず、寧ろ日頃の性の好奇心を満すは此時と容易く許した程の女——これと今一つ老典侍との二つは附録的な戀である。若くて美しく思ひあがつてゐながら一受領の後妻になつた空蟬は贅澤の料進落と云つた風の境遇で、そこへ源氏に言寄られて嬉しくも悲しくも悔しくも怨めしくも様々思ひ悩む處衰れにも尤である。中務君との情事は中將と同一程度のもので、玉鬘を養女にしておきながら親らしからぬ懸想は當人の玉鬘と共に讀者もあきれるの外はない。槿は此物語中唯一の貞操堅固な女性としてゆかしい點がある。(空蟬も貞節の女であるが、始めの一夜夢のやうな逢瀬があつた)

玉鬘を中心とした戀物語では肥後の大夫の監があらはなる強談判と乳母親子の苦忠といよく、髭黒大將の北の方となるにつれてもとの北方楨柱の君の煩悶とがあらはれに描かれてゐる。

けれども戀愛小説としては余は前四十四帖よりも後の宇治十帖の方が優れてゐると思ふ。昔てこのことを「源氏物語解説」の下巻の巻頭に書いたが、この解説は原稿のまゝ、今も手許に保存して居るので、今その舊稿を左に引用しておく。

世の源氏物語を読むもの多くは始めの數卷を繕いて、後の滋味を知らず、空蟬夕顔のはかなさを説いて大君、浮舟の煩悶を知らず、源氏が華やかなる戀の情悦を知つて、薫が暗鬱なる悲戀悲歌を知らずと云ふ様は、余の殊に遺憾とするところである。……更に此の宇治拾帖について仔細にしらべて見ると、多くの點に於て前篇よりも優れたものがある。従來國文學者の説によれば源氏中の佳帖は桐壺、帚木、須磨、明石などに衆評が一致してゐるが、この拾帖中浮舟を描いた各帖などはそれにも増した傑作と謂ふべきだ。背景の多奇、場面の緊縮、筋の直展、戀愛と道心との葛藤、現代的な匂宮と敬虔な薫大將との對照わけでも

人情の委曲描寫

と云ふ一點はこの方が遙に優れてゐる。中の君や浮舟の心事は今日から見ても確に女性心理の好資料である。匂の宮が浮舟に契つた翌日歸京してその妻の中の君に「人の思ひは、一度は必ず遂げるものだから、それ程薫大將が御身を慕つてゐるんなら、御身も一度はきつと大將と逢ふ夜があらう」と云ふと中の君は氣早やで「だしぬけにあんなことを言はれるのは屹度自身にそんな經驗をせられたのだらう」と却つて疑ぐる處など、なか／＼機微に觸れてゐる。

戀無常の觀を寫すこと

に於ても此方がすつとまされてゐる。薫が戀する大君は亡くなられるし、せめて其妹の中の君をと思へば、それは早や人妻なり、更にその義妹の浮舟に契ると匂宮が邪魔を入れる……女は煩悶の極宇治の川瀬に身投げする……などいかに戀の生憎を寫して周到なるものがある。之を前篇の源氏の君が思ふ女は必ず靡かせ、一二の例外を除けば、女と云ふ女は一遍の贈答歌や一夜の紛れでたやすく肌身を許す底の淺薄な戀に比べると、すつと複雑な高級な表し方である。

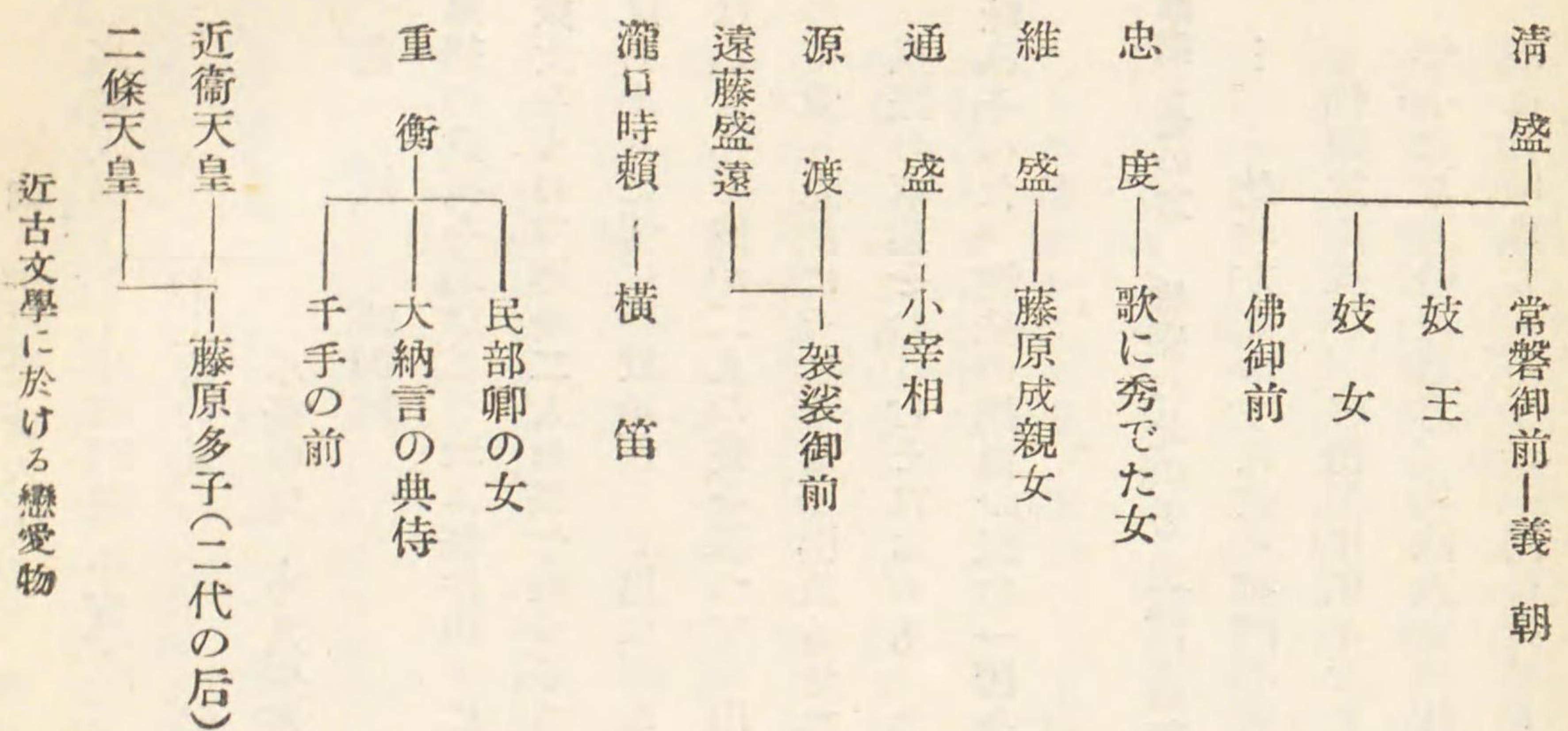
文章の自然なこと

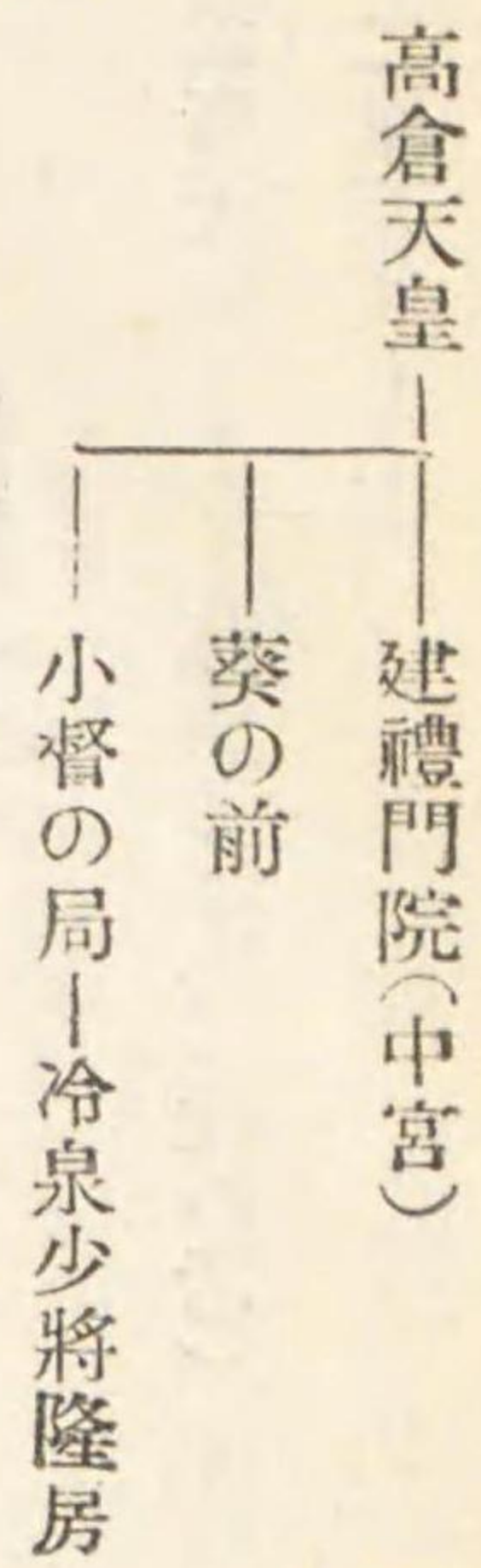
に於ても優れてゐる。なる程前篇にも佳句佳章はいくらもあるはある。けれども、それは多く白樂天の詩や古詩古歌古事を頗々と備つてやつと整へた美文といふまで、其等がまだ充分に膩ひきれないところには稍生硬な點もないではないが此十帖に入つては、式部の筆もいよく、圓熟したものと見えて詩でも歌でも古事古典でも、引用自在を極めて聊か滯のあとがない……。

近古文學に於ける戀愛物

近古文學では戀物語は多いが、戀愛文學は少い。和歌の戀歌はその後も續々出て代々の勅撰私撰乃至家集の大部分を占めてゐるが、一部秀詠を除けば陳々相依るといつた風の干涸びたものばかりであるから叙述を省く。俗謡中には新味はあつてもまだ發達の初期のこととして此ととりたて、言ふ程のことはない。散文中鎌倉時代の軍記物と室町時代の謠曲中の鬻物と兒物語とに可なり多くの戀物語があつて、そのことを記した文章もよし後の戀愛文學に素材を提供した點にも一顧の價値があらうと思ふからそれに就いて少しく述べる。

源平時代には、夫の後を追うて身を投げた源爲義の妻、十四歳で父義朝の意を諒して従容死についた頼朝の姉、その又義妹として十歳計りの身を杭瀬河に投じた夜叉御前、父の反り忠を咒ひつゝ、夫の屍の傍で自刃した鎌田政家の妻、夫が斬られたので怛々悶死した木曾義高の妻、美にして勇力ある巴御前、聰明にして内助の功ある土肥實平の妻、夫と共に義經公を守つて花々しくも高館城頭の露と消えた和泉三郎忠衡の妻、慈悲忍辱の性に頼朝の死刑を視るに忍びずして命請した池の禪尼、短い半生に長い人生の榮枯盛衰の凡てを體驗した二位尼や建禮門院など多くの特色ある女性を見るが、戀の主人公や女主人公としては左の數對が殊に際だつた。





義 經——靜御前

夫義朝の遺孤を助けると云ふ條件の下に西八條にかしついた常磐が操は清盛にとつては高價な買物であつた。妓王をめで妓女をもめで姉妹二人を併せ愛するさへあるに新に北國から來た佛の色香にうつゝをぬかし姉妹去れと追ひ出すあたりはあまりに情に奔放過ぎると思はれる。されば「もえいづるも枯るゝも同じ」と書きとめた水莖の痕につくゝ未來をはかなんで佛が二人の後を慕つて家出して尼になるのもけに尤と思はれていちらしい。「野もせにすだく蟲の音よ」と云つて愛人忠度にそれとなく引取らせた女は、その都落の時には小袖一重をかたみとして贈り

東路の草葉をわけむそれよりも たゝぬ袂の露ぞこほるゝ

と咏みそへた。趣味の近似が戀の一因を爲したものが。

維盛と北の方 維盛の北の方(藤原成親の女)については平家に左の一節がある。維盛の都落の事(卷七)

……此北方と申すは故中御門の新大納言成親の卿の女、父にも母にもおくれたまひて、孤にておはせしかども挑顔露に綻び、紅粉眼に媚をなし柳髮風に亂るゝよほひ、又人あるべしとも見え給はず。六代御前とて生年十になり給ふ若君、其妹八歳の妹君おはしけり。此人々も面々に後れじと慕ひ給へば三位の中將宣ひけるは我は日頃申し、やうに一門に具せられて西國の方へ落ち行くなり。何處までも具足し奉るべけれども道にも敵

待つなれば、心安く通らん事ありがたし。假令我討たれたりと聞き給ふとも、様など替へ給ふ事は夢々あるべからず。其故は如何ならん人にも見もし見えて、あの幼き者共をはぐゝみ給へ、情をかくべき人もたどかなく候ふべきと、やうゝに慰め宣へども、北の方とかくの返辭をもし給はず、引き被いてぞ伏し給ふ。中將既に打ち立たんとし給へば、北の方袂にすがり、都には父もなし母もなし捨てられ奉りて後、又誰にかは見ゆべきにいかならん人にも見えよなど承るこそうらめしけれ、前世の契ありければ、人こそ憐み給ふとも、又人ごとにしもや情をかくべき、何處までも伴ひ奉り、同じ野原の露とも消え、一つ底の水屑ともならんとこそ契りしに、されば小夜の寢覺のむつことは、皆偽になりにけり。せめては身一つならば如何せん、捨てられ奉る身のうさを思ひ知りても止まりなん。幼き者共をば誰に見ゆづり、いかにせよとかおほしめすうらめしうも止め給うもかなとて且は怨み且は慕ひ給へば、三位の中將、誠に人は十三、吾は十五より見初め奉りたれば火の中水の底へも、共に入り共に沈み、限ある別路までも後れ先たゝじとこそ思ひしか、今日は斯く物憂き有様どもにて軍の陣へ趣けば、具足し奉りて行末も知らぬ旅の空にて憂き目を見せ參らせんも我身ながらうたてかるべし。其上今度は用意も候はず、何處の浦にも心安う落つきたらば、それより迎に人をこそ參らせめとて思ひ切りてぞ立たれる。

固より維盛は梅櫻少將とて風流都雅の一貴公子で、戰場爭奪の掛引は其長所でないとは云へ、一つにはかうした美しい妻との愛着にほだされた物であらう、壽永三年三月十五日屋島の陣屋を忍び出て都に上らうとして果さず、高野山の奥に瀧口入道と會つて大に道心を催し僧形となつて熊野の權現に參り那智の沖邊に入水してはかなき死を遂げた。一方北の方は六代君と姫君とを連れて北山ふかく身をかくし、六代の命ごひに文覺上人をたよつての云々は嘗て述べた通りである

通盛と小宰相局 局は刑部卿藤原範方の女、上西門院に奉仕して夙に禁中第一の美人ともてはやされた。十六歳の春の一日女院のお供をして法勝寺の花見に行つた時門脇中納言の令息越前守通盛に見そめられ、おきまりの艶文を頻繁に賜つたが、女はそよとの返しもなかつた。はかなく明け暮れて三年の月日が流れた。愈々最後の戀文と誠心の限りを盡して使に持たせてやつた處が生憎不在で張合無けに歸つて來る中途バツタリその車に出くはして是幸と投げ込んでおいて歸つた。女は、あるまじきことと思つたが、自分に宛てた艶書を路傍に捨ててもならず、そのまゝそつと持ち歸つたが、どうした拍子にか、それを宮中で取落して折悪しく女院の御手に入つた。「サア皆こゝへお出で、今わたしは珍らしいものを手に入れた。一體このふみの主は誰だらう」と云はれる。列座の女房は何れも「神かけて身に覚えはござりませぬ」と誓ふ。宰相一人は顔紅めてさしうつむいてゐたので女院は早くもそれと察して、中を開いて見られると「あまりに心つよきも今はなか／＼嬉しくて」など細々と書いて

我戀は細谷川の丸木橋 ふみかへされてぬる、袖かなとある。女院もその心根を慰まれ、小宰相に代つて

たゞたのめ細谷川の丸木橋 ふみかへしては落ちざらめやは

と返しし、自ら取持つて通盛の妻とせられた。それから後の夫婦仲は至極圓滿であつたが、その矢先が一門の都落、つづいて通盛が一の谷の討死となり女院はその時妊娠中であつたが、一夜海中に身を跳らせて夫に殉じた。

北の方、やはら船ばたへ起き出で給ひて、漫々たる海上なれば、何地を西とは知らねども、月の入さの山の端をそなたの空とやおほしけん、靜に念佛し給へば沖の白洲に鳴く千鳥、天の戸わたる楫の音、折から哀れやま

さりけん。忍音に念佛百遍ばかり唱へさせ給ひつゝ、南無西方極樂世界の教主彌陀如來、本願過たず飽かて別れし、妹春の仲らひ、必ず一つ蓮にと泣く／＼遙に搔口説き南無と唱ふる聲と共に、海にぞ沈み給ひける。一の谷より八島へ押し渡らんとて、夜半ばかりの事なりければ、船の中しづまりて人は是を知らざりけり、其中に楫取の一人寝ざりけるが、此由を見奉りて、あれはいかに、あの御船より、女房の海へ入らせ給ひぬるはと、呼はりたりければ、乳母女房うち驚き、側を探れどもおはせざりければ唯あれよあれとぞあきれける。人數多下りて取り上げ奉らんとしけれどもさらぬだに春の夜は、習ひに霞むものなれば、四方の村雲うかれ來て潜けども／＼月朧にて見え給はず。遙に程經て後取り上げ奉りたりけれどもはや此世になき人となり給ひぬ(卷九)

袈裟御前の哀話 「去ぬだにも女は罪深しと承り侍るに憂身の故に、あまたの人を失ぬべければ我身一つを失ひ候ひぬ、獨り殘留まり御座て歎き思し召ん事こそ痛はしく侍れ何事も然るべき事と申しながら先立進らせぬる悲しさよ、相構へて後の世よく弔らひて給らん。佛になり侍りなば母御前をも渡をも必らず迎へ奉るべしよろづ細かに申し度侍れども落る涙に水盞の跡見え分ず……」

露深き淺茅が原に迷ふ身の いとゞ暗路に入ぞ悲しき (源平盛衰記卷十九)

夫の身代りに白閃一過の下、芳魂を玉碎した彼の袈裟御前は、幼名を「あとも」と云ひ母「衣川」の縁語で「袈裟」と呼びなした。

青黛の眉の渡し、丹華の口付愛々敷、桃李の粧ひ、芙蓉の眸最氣高くして緑の簪雪の膚、楊貴妃李夫人は見ねば知ず、愛嬌百の媚一つも闕けずさしも嚴しき女房の心さへ、情深うして物を憐れみ、咎を恐るゝ事斜ならず、

毛嬙西施が再誕歟、觀音勢至が垂跡歟、深窓の内に扶けられて既に成人、軒端の梅の匂ひいと香しく庭上の花實に細かにして十四の春を迎へたり。

名門の公達我もくと所望する中にも源左工門尉渡は並びの里でもあり殊に熱心なり遂にそこへ嫁いだ。三年の間伉儷美しくして事無く過ぎたが十七歳の春、三月の中頃に橋の渡初の日はその時の奉行遠藤武者所盛遠が見初めてからむらむらと横戀慕どうした物かと春の暮から秋まで思ひ煩らつたが、衣川は姨のこととして押付談判に行つて起つて「袈裟を取り戻して自分にくれ」と云ふ。うっかり「否」と云つたら斬りつけさうな劍幕に一時逃れに承知をしたが、そのまゝに濟まされる問題ではないので袈裟を呼んで事情を話し「どうぞこの母を殺してくれよ」と如何にも切なげである。袈裟は心中深く決心して「御心配下さいますな妾がうまく切り抜けますから」と云つて、或夜渡の留守に來た盛遠とにせの手筈をきめて「いついっつか夫に髪を洗はせ高殿に寝かせませうそれをあなたが忍び込んでお斬り下さい。すれば妾は御身に從ひませう」と云ふ。それを眞に受けて盛遠はマンマと頸をかき切つたが、携へ歸つてよく見れば渡と思つたその頸は戀する女の袈裟の頸であつたので、三年の戀もここにさめてそゝる善心に立返り翌朝渡が家を訪うた處「少々仔細あつて今後は世間へは出ないつもりだ」と面會を謝絶する。「イヤそのことごとく、それについてその袈裟御前の首を斬つた兇漢を連れて來たから通してくれられい」とたつての希望に、外ならぬ要件と入れて面會する。盛遠刀をガラリと投げて「その罪人はこの我だ、サア如何様にも御成敗を——」と有りし次第を告白する。目をつぶつて聽いてゐた渡は話し終ると「イヤそれ程誠心ある人を殺す法はない。所詮これは運命の呪ひだ。それよりかこれを機會に御身も發心し我も出家して袈裟が後世を弔つたらば、嗚や佛も悦ばう」とて若い盛りの今道心二人——後に文覺上人と云ふのはこの盛遠の方である。之を傳へ聞いた男女三十人ばかり我もくと出家した。袈裟は畢竟この世の人に道心を誘ふべく佛の

御旨を帶して出現した女人であつたらうとまで噂された。

瀧口と横笛 この悲劇は早く故高山樗牛氏の歴史小説「瀧口入道」で讀んで其後平家物語第十卷の維盛が屋島から高野へ行つた時そこで入道に逢つたことを記し、倒叙の體をとつて小説の骨子とも謂ふべきものが出て居るのを見た。華やかに短き戀らしき戀、平家らしき戀物語として此書の隨一であらうと思ふ。

三條の齋藤左衛門もちよりが子に齋藤瀧口時頼生年十九歳「布衣に立烏帽子衣紋つくりひ、鬢をなで花やかなりし」若侍、建禮門院の曹司横笛と云ふ美女に戀ひそめ女も憎からぬものと思つてゐたが、瀧口の親は榮達のためきある權門の息女をと思つて容易にうけひかぬ。それについて彼の言つた答へは如何にも唯美的である。

老少不定の界は、只いしの火の光に異ならず、假令人長命といへども、七十八をば過ぎず、その中に身の盛なる事は僅に二十餘年なり。夢幻の世の中に見にくきものを片時も見て何かせん
と、鬢を切つてうきよの嵯峨の往生院に行ひます身となつた。横笛が之を聞いて餘りのことに「親御の異見で妾を見捨てられるならまだしも、此世までも捨てようとは餘りの胴窓、一度尋ねて心ゆくばかり怨みも止めもしようもの」と花にたそがれの夕靄かゝる頃、そつと都をぬけて出て、嵯峨を指して蓮歩を運んだ。

頃は二月十日餘のことなれば、梅津の里の春風に、よその匂もなづかしく、大井の川の月影も、霞にこめて朧なり。一方ならぬあはれさも、誰故とこそ思ひけめ、わうしやう院とは聞きつれども、さだかにいづれの坊とも知らざれば、こゝにやすらひかしこにイミ、尋ねかぬるぞむざんなる。住み荒したる僧坊に、念珠しけるを瀧口入道が聲と聞きすまして、御様の變りておはすらんをも見もし見え參らせんが爲めに妾こそ是まで参りて

候へ

と供の女して言はせる。ハツとして障子の隙から覗くと「裾は露、袖は涙にうちしほれつ、少し面瘦せたる顔ばせ、誠に尋ねかねたる有様、如何なる大道心者も心弱くなりぬべし」イヤ／＼今逢つては出離の障碍、不愍でもこゝは逢はずにかへすこと」と観念の眼をつぶつて、「全くこゝにはさる人なし、若し門違にてもや候ふらん」といはせる。女はなまけなく本意なく怨めしくは思つたがどうにもつきはがない。(余はこゝの處が非常に佳いと思つた。嘗て達磨の坐禪の床を後から美人が取紐つて居る繪を見た。賛は枯木憑寒巖三冬無暖氣とあつた。こゝの場面も丁度それで、尙譬へて云ふならば、枯れた松の大木に胡蝶が飛んでゐるやうな趣である) 瀧口とても發心日淺いことであるから此上又も來られては道心の搖ぎが我ながら案ぜられてならぬ。そこでこの美しい今道心は更に高野の奥に入山した。

高野山は、ていせいを去りて二百里、郷里を離れてむにんしやう、清風梢をならしては、せき日の影靜なり。八よりの峰八つの谷、誠に心もすみぬべし。花の色はりんふの底に綻び、れいの首はおのへの雲にひびけりかはらに松生ひ垣に苔むしてせいざう久しく覺えたり

とあるこの聖域に身も心も澄み／＼てやがて一山の聖と仰がれるやうになつた。女も何でうおくるべき黒漆の髪惜しげもなく斬つて南都法華寺に入つたが、積る思ひのせいかして、間もなしに身まかつたと云ふ。出家間なしの頃の贈答歌瀧口より

剃るまではうらみしかどもあづさ弓 まことの道に入るぞうれしき

横笛返し

剃るとても何かうらみん梓弓 引きとむべきこゝろならねば

(前掲高山樗牛の瀧口入道は讀賣新聞の懸賞に應募して當選した歴史小説だが、この哀話に平家の哀史を背景つけて美しく綾なされてある。文章も平家張りでこの頃の出鱈目なえせ自由詩以上に詩趣がある)

重衡に纏はる三個の戀物語 重衡の戀は王朝タイプに屬する。その軍事に臆病で文雅に秀でてゐたこと、その幾つにも愛を分けたことなど、どうしても武家タイプではない。

其の一には民部卿の女がある。一の谷の合戦に彼は捕虜となつて都へ引き返したが、女戀しさの餘り、友時を使として別れて以後の消息をこまかに言ひやり末に

涙川浮き名を流す身なりとも 今一度のあふせともがな

と咏んだ。女は文を顔に押しあて、容易に身動きもしない。友時が促したて、やつと返事を書いた。これもこの二年の動靜をいともこまかに書き込んで

君ゆるにわれも浮き名は流すとも 底のもくづと共になりなむ

と一首をそへた。重衡は尙も戀々の思ひに堪へかね、特に許しを得て興して女を迎へさせたが、警護の手前さすがに興からおろしも得せず、輿の内外手に手をとりに顔に顔をおしあて、泣くより外のこともなかつた。(彼の歐洲大戦の騒ぎに新郎新婦が住宅から焼け出されて寢臺車を買ひはぐれて驛のプラットに唯手を握りあつて夢まどかでなかつたと云ふ氣の毒な有様を思ひ出す) 男

あふことは露の命ももろともに こよひばかりや限りなるらむ

女かへし

限りとして立ち別るればもとの身の 君より先へ消えぬべきかは
その後重衡は南都に斬られ女は様かへて殊勝にも墨染の袖に身をやつし戀人の後世を弔うたと云ふ。

其二は大納言の典侍である。否これが重衡の正妻である。彼女は安徳帝の御乳母（鳥飼中納言惟實の女で五條大納言邦綱の養女）として夫重衡捕はれの後も主上の御供をして壇の浦まで落ちのび、入水間際源氏の兵に助けられて京都へ護送せられた。明石の浦を過ぎる時

わが身こそ明石の浦に旅寝せめ 同じ波にも宿る月かな

と詠んだので源氏の荒くれ武者も思はず貫ひ泣きした。その後姉の大夫三位成子が日野の宅に身を寄せてゐる中、夫は南都へ渡されるとてこを通り過ぎた。（この對面が哀れである）重衡は素通りもしかねて立ちながら門から聲をかけると夢かやこれとはと、つかは典侍が走り出て、見れば僅かの間に夫がけつそりやつれ果ててゐる。詞はなくて暫らくは涙々にかきくれてゐるが、「せめてはお召替へを」とて袷の小袖に淨衣を添へて差出す、重衡は之に着替へ

せきかねて涙のかゝるから衣 のちの形見にぬぎぞかへぬる
と古着を進める。之を受けた典侍は

ぬぎかふる衣も今は如何せん 今日を限りの形見と思へば

と返し「せめては來世で一つ所に生れあひませう」と契る。重衡没後そのなきがらを鄭寧に日野の里に葬り彼女は女院と諸共に小原の寂光院に清く淋しき餘生を送つた。

其三は千手の前である。「百年の齡を一朝の情けに捧げる」ことが女のしほらしく美しい生命だとするならば、千手の前の如きはその典型的なるものであらう。

鎌倉屋敷の四邊寂として萬籟聲を呑む折柄伊豆の國の住人狩野の介宗茂の邸では燭光まぶしく照つて美姫頻りに漫舞の袖を翻す、正面に默座せるは誰——、一の谷の捕はれ人三位中將平重衡その人である。下手に十餘人の侍坐は主人宗茂始め家の兒郎黨である。紅の一點と輝く美姫は是れ手腰の長者がまなむすめ千手の前とて、今鎌倉に絶世と謳はれた美女である。

此宵宗茂風呂を立て、重衡に入浴をすゝめる。「ハハアかうして身を淨めさせておいて殺す所存か」と嬉しいにも無氣味が先立つ。

（卷十）や、ありて年の齡二十ばかりなる女房の、色白く清けにて、髪のかゝり誠に美しきが、めゆひの帷子に

染附のゆきさして湯殿の戸押しあけて参りたり。

とあるその女である。

中將守護の武士に「さても只今の女房は優なりつものかな、名をば何といふやらん」

と問ふと、主人が答へて「あれは手ごしの長者の女にて候ふが、みめかたち心ざま優にわりなきものとして、此二三年は左殿に召し置かれて候名をば千手の前とぞ申し候ふ」と云ふ。やがて晚餐が出る、女が出る。女は琵琶を携へて出る。「羅綺の重衣たるは情なき事を機婦にねたむ」と朗詠する。その聲も容姿も美しい。重衡は身の憂さも忘れて自らも吟じ女にも色々とおとらへて歌つたり舞つたりさせた。最後に今一曲をとて「あな思はずや、吾妻にもかゝる優なる人のありけるよ、それ何事にも今一聲」と所望する、女は起つて又もやかへす羅綾のたもと、

一樹の蔭に宿りあひ、同じ流をむすぶも皆是先生の契と白拍子を誠に面白く歌舞する。重衡も又朗詠一曲「燭は暗し數行虞氏の涙夜は深し四面楚歌の聲」と續ける。それを頼朝が立聞して「優しくもあはれな重衡」と心にめぐる。

其後中將南都へ渡されて斬られぬと聞えしかば、千手の前は、中々思ひの種とやなりけん。やがてさまをかへ、濃き墨染にやつれ果て、信濃の國善光寺に行ひすまして後世菩提をぞとぶらひけるぞ哀れなる。

二代の後は餘り美し過ぎてのお氣の毒な御入内、建禮門院は平家の哀史を一身に結體されたかのやうな御境遇で最大級の悲喜劇を一生涯に觀もし自身主役に立たれもした。

葵の前 戀のまゝならぬは貴賤上下おしなべてのこと、はいへ、天皇の御身分でありながら愛する女を愛することも得せられなかつた高倉天皇は眞にお氣の毒であり、その犠牲になつた葵の前も痛ましい極であつた。

卷六 葵の前の事

此人女御后とも、もてなされ、國母仙院とも仰がれんとて、其名を葵の前と申されければ、内々は葵女御などぞさ、やきははれける。主上は之を聞し召して、其後は召さざりけり。是は御志の盡きぬるにはあらず、只世の謗を憚らせ給ふによりてなり。されば御詠めがちにてつやく供御も聞し召さず、御惱とて、常は夜のおとゝにのみ入らせおはします。其時の關白松殿、此由を承りて、主上御心つきぬることこそおはすなれ、申し慰め參せんとて、急ぎ御參内ありて、さやうに叡慮に懸らせましまさんに於ては、何條事が候ふべき。件の女房召され參らすべしと覺え候。品尋ねらるゝに及ばず、基房やがて猶子に仕り候はんと、奏せさせ給へば、主上仰なりけるは、いなとよそこに計ひ申すもさることなれども、位をすべりて後はまゝさる例もあるなり。正しう在位の時、さやうの事は後代の誹なるべしとて、聞し召しも入れざりければ、關白殿力及ばせ給はず、御涙を抑へて御退きありけり。

その後主上、綠の薄様の匂殊に深かりけるに、古きことなれど思し召し出で、かうぞあそばされける。

忍ぶれど色にいでにけり我戀は ものやおもふと人のとふまで

冷泉の少將隆房、是を賜り、ついで、件の葵の前にたばせられたれば、是を取りて懐に入れ顔打ち赤め例ならぬ心地出で來りとて、里へかへり打ち臥す事五六日にして、遂にはかなくなりけり。君が一日の恩のためには妾が百年の身を過つともかやうの事をや申すべき。昔唐の太宗の鄭仁基が女を元華殿に入れんとさせ給ひしを魏徴彼女既に隆氏に約せりと諫め申したりければ、殿に入れらるゝ事を止められたりしには、少しも違はせ給はぬ今の君の御こゝろばせなとぞ人申しける。

小督の局

戀愛の表で二線以上に繋がる男女は、必ず戀の悲劇の主人公である。前掲小督の局も上に天皇あり下に隆房ありその戀の心境は可なり苦しいものである事は一見明瞭だが、此は亦太政入道と云ふ第三者の干渉が一層その悲劇の効果を高めてゐる。そもこの小督の局と云ふは櫻町の中納言重範卿の息女で禁中第一の美人で又第一の琴の名手であつた。早く冷泉少將隆房に見そめられ千束の文の言ひ寄りに一旦は離いて相思の情いやましに熱くなつてゐた折柄中宮の御推薦で主上に侍ることになつた。その頃には隆房は清盛の女を買つてゐたが、小督との戀はなかくにさめないで何とかしてせめて一目でもお姿を見たいものだ、毎日のやうにさした用事もないのに參内してその局のあたりをとさんかうさんたゝすみあるいてゐた。局心に思へらく「少將の君はいとしいけれども一旦我君へ召されてお伽を申す以上はどうしても逢ふことは出來ない、言葉をかはすも不都合であらう」と……男は思ひあまつて一首の戀歌を簾中に投げ入れた。

思ひかね心はそらに陸奥の 千賀のしほがまちかきかひなし
 女も流石に氣の毒に思つたが強ひて心を鬼にして、此咏草に指さへ障へず小童にとらせて坪庭の内へ投げ入れさせた。
 これを見た少將は悲しさ悔しさ狂するばかりであつたが「人目にかゝつては」とて又その歌をとりをさめ、行かうとし
 て又立返つて

玉つさをいまは手にだにとらじとや さこそ心におもひすつとも

と咏み、「今は此世にて逢ひ見んことも難ければ、生き居て、とにかくに人を戀しと思はんより唯死なんとのみぞ願は
 れ」るやうになつた。かくと聞いた清盛の立腹も無理ではなかつた。「中宮と申すも御女。冷泉の少將もまた婿なり。小
 督の殿に二人の婿をとられては、世の中よかるまじ、いかにもして小督の殿を召し出して失はん」と威丈高、それ
 を聞いた小督の心配は又一通りではなつた。「我身の上は左にも右にもなりなん、君の御爲御心苦し」と思つたので一夜
 内裏をぬけて出て、行方も知らず身を隠した。主上の御歎は譬へん方なく「晝は夜の大殿にのみ入らせ給ひて、御涙に
 沈ませおはします、夜は南殿に出御なりて月の光を御覽じてぞ慰めまし」とた。入道は「何も小督とは限るまい、然
 るべき女房を詮議して上げませう」と事もなげに言ふ。人々は入道の非人情を憎み、兇暴を恐れて誰一人参り仕へよう
 と云ふ者はない。

頃は八月十日餘のことにて、さしも隈なき月の良夜を、君は涙に御眼も冴えられず、やゝ更闌けて「誰かある」との御召し……暫らくのしじま、又「誰かある」との御聲「ハハッ彈正の大弼仲國控へて居ります」とお、仲國
 が、申し付ける急用がある、もつとこちらへ寄れ「ハイ」と畏みながら數歩を進んで畏る。「其方は若や小督の行方を存
 じては居るまいか」とどうしてそれを存じませう、一向に存じませぬ「きけば小督は嵯峨の邊の、片折戸したる賤が家に

隠れて居るとか云ふぞ、よしや主人の名はわからずとも、其方尋ねて見てはくれぬまいか「主人の名が不明ではどうも尋
 ねかねまする」成程な……如何にもな……と主上はためいきをせられる。御眼はいつしか御涙に濡れてゐる。

仲國つくづく物を案ずるに、まことや小督の殿は琴彈き給ひしぞかし。此月のあかさしに君の御事思ひ出で参ら
 せて琴彈き給はぬことはよもあらず、内裏にて琴彈き給ひし時、仲國笛の役に召され参らせしかば、其琴の音
 は何處にても聞き知らんするものを、嵯峨の在家幾程かあらん打ち廻りて尋ねんなどか聞き出さであるべき
 と、主上に御同情申す餘りの義侠と、かうした御用には向の適任者であることを思はせるデリケートな探偵の手が、り
 との心持が揺いて「では、主人の名が分らなくても、一つ尋ねて参りませう……が御手紙がなくては、あらぬ使と思
 はれませうから何卒御文を下しおかれませう様」と御承けする「成程左もあらう」とて、やがて御したゝめになる。「寮
 の馬に騎つて行け」と仰せられる。

月は今、龜山の松のうれを離れて、千草八千草おく露を何の玉かと輝かせ、蟲の聲々恨み顔にすだける西の京の郊外
 の道を四蹄しめやかに響かせて戀のはゆまづかひ、仲國の姿は實に一幅の繪でもあつたらう。目當てはたつた一つ
 の片折戸、こゝかそこかと手綱をば、控へて聞いては見たが、琴の音は何處にも響いては居ない。釋迦の御堂はど
 うかとして、又々堂々をへめぐつたが、琴も聞えず、それと思しき女房の影も見えない。仲國の胸中やうやく不安になつ
 て「このまゝ素手で歸つては寧ろ來なかつた方がましであらう……と云うてこれから逃げかくれして見ても、普天の
 下は皆王土……あゝ困つた役を仰せつかつたものだなあ……と暫し思案にとつおいつ……「おゝさうぢや、法輪
 かも知れない、程近いところだから、月の光に誘はれて、つひチヨコ」と出向はれ、そこで一曲と云ふやうなことが
 も知れない。一つ行つて見るとしよう……」と、その方向に歩ませた。……と龜山のあたり近く、松の一むらある

方に、ほのかすかに………琴の音がする。峰の嵐か松風か切に尋ねる心の故かと、暫らく立つて聞耳たてる。また響く又近よつて又聞くとまた響く、嘯のすさび、音は一步毎にしろく、胸は一音毎に躍る。いよく近よつて手綱をきつと控へて、ぢつと聞入る、確かに琴だ、而かも、てつきり局の琴だ、お負けに曲はこの折柄にふさはしい想夫戀だと思ふと一荷の重荷は急に下りて、馬からヒラリと飛んでおり、嗜む一管の横笛、歌口しめしてやをらその曲に合わせて吹きく、扉近く歩み寄つて「コトン」と訪うた。内からは愛らしい少女が出て、戸を細目にあけて「あなたほどなた御用は何か」ときく「私は彈正大弼仲國、君の仰せを蒙つて、内裡から参つたと取次いで下さい」「ハイ」と入つたが二度目には、「それはお間違ひでせう、ここは左様に宮中から御使を戴くやうな住家ではございません」と云ふ。悪くすると締め立を喰ひさうなので、仲國は門をあけてつと入つて、ぢかに局の座席に向つて云ふ「ナゼこんな所に居られますか、主上は御身の爲めに、御心惱ませられて、御壽命もどうかと危まれるまでに御見受け申します。嘘と申し召すならこゝに御文もあります。これを御覽下さい」と云つて差出す、局はそれをあけて見ると成程主上の御筆蹟で、事も細かに書かれてあつたので、涙ながら御返事を認め、女房の装束一重ねを祿として被けた。世故にさがない仲國は、若もの爲めに馬部吉上をとめ、家の主にも言ひ啣めて、局の御出家などなきやう、又こゝから外へ忍ばれぬ様手を廻しておいて、さて我身單身殘んの月に鞭をあけて急ぎ内裏へ驅けつけると、さしもの秋の長夜もほのくと明け渡つた。

祿をはね馬の障子にかけ南殿に参れば主上はまだ夜の御座のまゝにゐらせられ「南に翔り北に向ふ閑雲を秋の雁につけがたし。東に出で西に流る只懺法を曉の月によす」と御心細けに朗咏を口すさまれて居た。………

翌の夜仲國又も主上の命を帯びて局を宮中に迎へ、一間なる閑室に圍つて夜なく召されたが姫御子一所——坊門の

女院と云ふのが御産まれになつた。それと知つた入道は前の怒りと自己の權威の侮辱の怒りと二重の腹立に、或夜局を誘き出して無理強ひに尼になし奉つた。出家はもとよりの希望とはいへ、かうした不本意な仕打に局の悲歎は又新たとなつて戀ははかないものは弱いものつくづくはかなみながらも廿三歳の美しい優婆夷姿その日から嵯峨の僧庵に讀經の主が一人増したと云ふ。

此物語は揚貴妃の長恨歌や源氏の命婦の使とよく似て居るが、高倉天皇が聰明の君で前には「林間に酒を煖むるに紅葉を焚く」と近侍の過失を美化して許され、後には葵の前を愛しながらも世の風教を慮つてよく自己を抑制せられた主上であるだけに讀者の同情が厚いし、月の嵯峨野の片折戸、美姫で名手の琴のすさび、と云ふ詩趣が一層讀者を魅する。唯小督その人の境遇を中心に考へると、戀の主人公を少しも當人の意志通りに進退せしめないで、まるで將碁の駒同様に見て、あつちを進め、こつちを退かせする入道始め當時の周圍の無情が憎らしくなる。

今、渡月橋畔數株の松に擁せられて、ささやかながら文字ははつきり「小督之墓」と刻まれたおくつきがあつて、櫻に匂ふ嵐山の春四月、麗衣の子女の通りすがりに「おやこれがあの小督の墓」と一時平家物語や源平盛衰記の情調を顧みさせる象徴のやうになつてゐる。

靜御前 源義經の情事は淨瑠璃姫、卿の君、河越太郎女など多くあつて、何れも義經記や盛衰記や十二段双紙や鬼一法眼三略卷などに散見するが、余の第一に擧げようと思ふのは靜御前である。之については嘗て義經記によつて作つた拙文があるから左にあける。

波の逆櫓に逆はれて、無念やるかたなき梶原は、君を不忠と讒言してより、何事ぞ稀代の軍功を立てながら、

一天の下五尺の體軀おきどころなく、昨日は堀川、今日は大物、鎌倉方の取締、嚴なれば花の都や、月の須磨、響く樂さへ嵐さへ、四面楚歌とぞ思はれて、心ならずもよしの吉野の山の奥深く、行くへ定めず踏み迷ひ入り給ふ。相従ふものとは、かの西塔別當武藏坊辨慶を始めとして、龜井、片岡、伊勢、駿河、日頃腹心の從者十數名のみ、あ、昨は壇の浦に巨船を浮べて數萬の部下、今は寒村の僻陬に流浪して百人満たず。人情の反覆まこと波瀾に似て、人生の榮枯宛ら糾繩のそれにも似たる哉。

師走半ばの寒鴉、哀歌しらぶる枯木立、それさへあるに昨日今日、降りつむ雪は丈にも垂々として、吉野の山は花ならぬ吹雪の花に埋れぬ。雪のはざまを流れおつる谷の小川の水音も、始めは高く後低く、末は氷柱と凍るらむ、一二の挾間、三四の峠、杉の段など數た、び足止に迷ふ難行苦行——。

あはれ百年の齡を捧けて、拙き運命を樂舞の道に盡さむと心は定めし身にしあれど、君が情の切にして、この夏よりぞたゞならぬ身とまでなり、西海の波路も共にさすらひぬ。吉野の吹雪も共にさまよはむ。一たび夫と定むるからは吉野山越一筋道とかよわき脛もあかむまで靜はあとに従ひぬ。

これより奥は女人禁制の堂もあり、ましてやこの難路到底其許などの通り得べしとも思はれず、これまで慕ひつる志は誠に嬉しく生々世々に心にとめて、生きなば惜老亡せなば同穴……早々討手のかゝらぬ中、今宵は麓の堂にあかし、明くれば直に都なる母君がもとに歸り、靜に身二つとなりて後重ねて招きよすることもあるべきぞ……と卿は懇に説き聽かせ、懷より一つの小鏡をとり出し、「これぞ、わが日頃姿を寫せるもの……かたみにせよ」と手渡し給へば瞳は涙の雨やさめ織手もやゝにをのゝまつ、見るととても嬉しくもなしますかゝみ 戀しき人の影をとめねば

と歌ふにぞ、卿も

いそぐとも行きもやられず草枕 しづかに馴れしころならひに

金子若干をも賜はりて泣く／＼麓へ返す。

其後關東よりの沙汰として六波羅によびよせられ、更に鎌倉に召されて、母、磯の禪司もろともに堀藤次が館に預けらる。

又ふりかゝる身の憂き苦、此末如何にと思ふにつけても、せめては殿の御かたみなりと安らかに産み參らせむものと京を遙に伏し拜み、稻荷、上賀茂、祇園、山王七社に春日に日吉、大社々々に祈願をかけて殿の延命息災と我身の安産願ぐより外又希ふ旨もなし。

頼朝は、靜が舞の名手たるより所望頗なり。二度三度は愛なく斷りぬ。四度五度人をかへ辭をかへての起つての所望に彼女も今は餘儀なく承引、鶴ヶ岡の廣前に、三尺の舞臺美々しく造りなされぬ。

白の小袖に緋の袴、唐綾上にしきかけつ、銀もて縫ひたる網の水干に、丈にも餘る漆の黒髪を清らに結ひなし、皆紅の扇をハラリとひらき、少し面やせたるに薄化粧……細眉、かぎりなく艶、限りなく麗、それに一種の氣高さ神々しさも加はりて……あつばれ舞妓やと満座は早も恍惚たり

笛の拍子は畠山、鼓のあひは工藤祐經、鉦は長沼五郎つとめて裝束いづれもきらびやかなり。

寒竹の笛陽調に響けば、紫檀胴の鼓、六つの緒のしらべを搔き合はせ、黄金菊形うつたる銅拍子乙の音に響きて神靈も爲に和み給ふらむ。折から奏づる靜がわざをぎは巧の極、妙の極、とんで胡蝶となり開いて百花となり織手、紅の扇を自在に翻翾して白魚丹花に跳ぬるとばかり、やは肌つゝむ關節は數多小さき轆轤のごとクルクルクル車のこなし

や流水の態をまねたる千趣萬様、新舞初の奥技つくせし妙の振一曲終りて一禮すれば歎聲賞聲わくが如く將軍の喜悅又なほめならず。

舞の手はかりて君が代となる。嚙曉たる管絃嘔啞につれて玉をまろばす奇し音は迦陵頻迦も及ばじよ……やがて徐ろに二足三足進みて鎌倉殿の顔をきつと見上げ

「如何に將軍、今海内を一つに統べ給ふと雖も骨肉の判官卿を疎んじて讒邪の悪臣ども信ぜらるゝこそ心得ね。無情とや云はん、暴逆とや云はん、あな怨めしみの鎌倉殿よ、笑止の二位殿よ……」

と丹火燃ゆるん唇に、淀みもなく責め立て、柳眉少しく上りつ。ましてや頼朝は烈火と怒れど理ある詞に返さむ術もなく、尙も舞の振に腫を凝らせば、少しく色を和けつ、懷舊と懇願の態もしほらしく聲は依然たる朗らかさにて

吉野山峰の白雪ふみわけて 入りにし人の後ぞ戀しき

しづやしづしづの苧環くりかへし 昔を今になすよしもがな

吉野山峰の白雪ふみわけて 入りにし人の音づれもせぬ……

と舞ひをさむれば翠簾や、に掲げて政子もそと涙を拭ひぬ。舞殿一しきり濕やぎて彼女はしとやかに座を退れば觀衆始めて我にかへり、あゝとばかり、又めづべきことばを知らず。

靜が美と貞烈とは對手の義經と相俟つて世の同情を惹き作家の興味を刺衝して色々のものに作られた。謡曲には左の數種がある。

吉野靜（佐藤忠信と謀り、衆徒評議の席に出て法樂の舞を奉でそれに見惚れてゐる間に義經を逃がす處）

鶴岡（萬人靜の舞に感泣し京へ歸參を許されると云ふ筋）

二人靜（菜摘女と靜の靈と相舞によつて吉野落の苦境と鶴岡の舞の怨とをあらはす。その菜摘女も彼女の靈の

憑いたものなので二人靜と題する）

戯曲では

竹田出雲、三好松洛、並木千柳合作 義經千本櫻（延享四年）

が名高い。（その他は近世期の戯曲の處参照）これは歌舞伎にもよく演ぜられて余も二度見たことがある。櫻の花蔭で鼓を打つ彼女の舞臺姿は今も思ひ出される。

室鳩巢の文「靜御前」は實話の雅文で、上田秋成の「劍の舞」は大分小説的に脚色されてある。脚本（狂言本）には

並木正三の傾城初寅詣

といふのがある。（此については國語と國文學四月號四七七——四八二に守隨憲治氏の精緻な評がある）

白拍子氣質 白拍子の起源沿革については別にそれを専攻する學問があるからこゝには云はぬが、そも／＼鳥羽院頃

の島の千歳、和歌の前、高倉の朝の妓王、妓女、佛、磯禪師、安徳の朝の千手の前や、この靜御前、後鳥羽の御代の龜菊、戰國時代上杉家のこう桐、しやう桐、松桐、藤桐、櫻桐の五女 又「鹽尻」に掲けられた武州熊谷の西新堀村の桐大藏と通覽するにこれ等は何れも

一、若いこと

二、美しいこと

三、文學の才のあること

近古文學に於ける戀愛物 白拍子氣質 太平記に表れたる戀愛物語

四、氣概あること
五、操正しいこと

など美しい特徴があつてその代表的なものが靜だと謂ふことが出来よう。此は細い線を曳いて後の傾城道に繋がつてゐるが、傾城氣質となると嘘が多い、手管が多い、若くて美しいには變りはないが、文學の才もおちれば氣概も意氣とか張とかに變り、操はそのつとめ柄一點の朱唇を萬客に嘗めさせなければならなかつた。
(傾城一覽—手管—無管操—十氣十管操) + (水十十口體) || 口廿子と謂ふべきだ。

太平記に表れたる戀物語

太平記には楠母や、瓜生保の母のやうな賢母、菊地武時の妻や伊賀局のやうな烈女と共に後醍醐天皇と中宮禧子、准后廉子、新田義貞と勾當内侍、楠木正行と辨内侍など美しい戀もあるが、その素質に於て源平時代の軍記物以上の展開を見ないから省いておく。殊に高師直の如きは戀とよりは色であり色とよりは淫とも謂ふべきで、太平記以外南山巡狩録や園太曆や塵塚物語にも色々出てゐるが、皆唯唾棄すべき醜惡な記録たるに過ぎない。

謡曲に表はれたる戀愛

謡曲中所謂「鬘物」は凡て戀愛中心の劇であるが、此に取材されたものは空蟬、暮、夕顔、半菫、野宮、須磨源氏、玉葛、落葉、浮舟などの源氏物、井筒、杜若などの伊勢物語物、海人、采女、松風、當麻、姥捨、梅ヶ枝、羽衣などの傳説物小町や靜や王昭君の史實物などで素材に比べると稀薄な刺戟をしか與へない(此は謡曲の本質上やむを得ない)むしろ狂女物中、夫婦關係を畫いた、班女、加茂物狂、水無月祓、花筐、富士太鼓、藍染川、砧、舞車、芦刈などに稍強い戀情がほのめき、修羅物中戀愛の妄執で煩悶し一遍の回向で得度するといふ錦木、戀重荷、綾

鼓、舟橋、女郎花、三山の方にすごい執着が見え、鬼事の一つの「道成寺」は夢幻劇ではあるが、戀の一念を具象化して非常な熱があり力があり、舞踊の上からも効果の多いものだと思ふ。

道成寺

紀州日高川の片邊りにまなごの庄司は一人のいつき娘(後に清姫として傳はつてゐる)があつた。その頃奥から熊野へ參るさる山伏があつて、その度毎に彼の庄司がうちを定宿にしたが、ある日の庄司は戯談にその姫に向つて「あれこそ御身が未來の夫よ」と言ひきかせた。姫は羞しいながらも嬉しく、或時の泊りにさ夜更けて男の寢室に忍び入つて「いつまで妾をこのまゝにしておかれませう。早く迎へ娶つて下されい」と思ひ入つて申し出たので山伏は驚きあきれ直ぐに逃げて道成寺にかけつけ住持にかくと事情を告げて救を求めた處、さそくの機轉に鐘をおろして上から伏せてやつた、姫は山伏の後を慕うて飛び出したが折節日高川の水嵩まさつてさなきだにかよわい姫の渡るべうもない。一念の戀は凝つて蛇體となり難なく河を泳いで此寺に来て、室の隅々をあさつたが鐘のおりてゐるのを怪しんで、龍頭をくはへて七まきまとひ、口からは焰を出し尾では鐘を鞭うつたので、鐘は見る／＼毒炎に鋒け無慙や山伏は毒蛇にとられたと云ふ。

謡曲道成寺はこの説話を取材して、鐘供養の當日姫の怨靈が白拍子に化けて鐘に怨みの數々を並べると……住侍を始め驚き目さめてそれから住侍の物語となり一同の祈願となり妄執消化して事無きを得たと云ふので終りになつてゐるが、華やかな佛語はこの灼熱の戀の清姫の説話と相俟つて好文章を爲してゐる。

前シテ 白拍子 後シテ 蛇

ワキ道成寺 住僧 ツレ寺僧

近古文學に於ける戀愛物 太平記に表れたる戀物語 謡曲に表はれたる戀愛道成寺

ワキ詞「是は紀州道成寺の住僧にて候ふ。扱も當寺に於いてさる子細有つて、久しく撞鐘退轉仕りて候ふを此程再興し鐘を鑄させて候ふ。今日吉日にて候ふ程に、かねの供養を致さばやと存じ候ふ。いかに能力、はや鐘をば鐘樓へ上げてあるか 狂言「さん候ふはや鐘樓へ上げて候、御覽候へ、ワキ「今日鐘の供養を致さうするにであるぞ。又さる仔細ある間女人禁制にて有るぞ、かまひて一人も入れ候ふな、其分心得候へ、狂言「畏つて候。

シテ次第「つくりし罪も消えぬべし、鐘の供養に參らん、サシ「是は此國のかたはらに住む白拍子にて候ふ詞「扱も道成寺と申す御寺に、鐘の供養の御入り候ふ由申し候ふ程に、唯今參らばやと思ひ候ふ歌「月は程なく入りしほの、煙みちくる小松原、急ぐ心かまだ暮れぬ。日高の寺に着きにけり。詞「急ぎ候ふ程に、日高の寺に着きて候ふ、やがて供養を拜まうするにて候ふ。狂言「シカ／＼」シテ「是は此國のかたはらにすむ白拍子にて候ふ。鐘の供養にそと舞をまひ候ふべし。供養ををがませて賜はり候へ、狂言「シカ／＼」シテ「荒うれしや涯分舞をまひ候ふべし、うれしやさらば舞はんとて、あれにまします宮人の、烏帽子をしばし假に着て、既に拍子をすゝめけり。次第「花の外には松ばかり、暮れそめて鐘や響くらん、ワカ「道成の卿承り始めて伽藍橋の、道なり、興行の寺なればとて、道成寺とは名付たりや、地「山寺のやシテ「春の夕ぐれきてみれば地「入相の鐘に花ぞ散りけるシテ「さるほどに寺々のかね地「月落ち烏鳴いて霜雪天に、みちじほほどなくひたかほの寺の、江村の漁火愁に對して、人々眠ればよき隙ぞと、立ち舞ふ様にてねらひよりて、つかんとせしが、思

へば此の鐘怨めしやとて、龍頭に手をかけ飛ぶとぞみえし、ひきかづきてぞ失せにせる。狂言「シカ／＼」ワキ詞「言語同斷、かやうの義を存じてこそ、固く女人禁制のよし申して候ふに、曲事にて有るぞ、のう／＼皆々かう渡り候へ、此鐘に付て女人禁制といはれつるいはれの候ふを御存じ候ふかツレ「いや何とも存ぜず候ふワキ「さらば其謂を語つて聞かせ申し候ふべしツレ「懸に御物語り候へワキ「前掲大意を文法に直したものである省く……中略……ツレ「言語同斷、かゝる恐しき、おん物語こそ候はね、ツレ「其時の女の執心残つて、また此鐘に障碍をなすと存じ候ふ、我人の行功も、かやうのためにこそ候へ、涯分祈つて此鐘を二度鐘樓へ上げうするにて候ふ。ツレ「尤しかるべう候ふ、ワキ「水かへつて日高川原の眞砂のかすはつくるとも、行者の法力つくべきかとツレ「みな一同に聲をあけ、ワキ「東方に降三世明王 ツレ「南方に軍荼利夜又明王 ワキ「西方に大威徳明王 ツレ「北方に金剛夜又明王 ワキ「中央に大日大聖不動地「うごくかうごかぬかさつくの、曩謨三曼多囉日羅南。旋多摩訶嚕遮那。娑婆多耶吒多羅吒干輪、聽我説者得大智惠、知我身者即身成佛と、今の蛇身を祈るうへは、ワキ「何のうらみかあり明の、つきがねこそ地「すは／＼動くぞ祈れた、ひけやてんでに千手の陀羅尼、不動の慈救の偈、明王の火焰の、黒煙を立てぞ祈りける。いのり祈られつかねど此鐘ひきいで、ひかねど此鐘をどるとぞみえし。程なく鐘樓に引きあけたり。あれみよ蛇體は顯はれたり。地「謹請東方青龍清淨、謹請西方白體白龍、謹誓中央黃體黃龍。一大三千大千世界の、恒沙の龍王いみん納受、哀愍自謹のみぎんなれば、いづくに大蛇のあるべきぞと、祈りのられかつばとまるぶが、又おきあがつて忽に、かねに向つてつく息は猛火となつてその身をやく、日高の川浪深淵に飛んでぞ入りにける。望み足りぬと驗者達は、わが本坊にぞ歸りける。

これが後世道成物の本源のやうになつた。(舞曲の娘道成寺など) 思ふに作者清次は多分當時紀州に傳はつてゐる傳説によつて趣向したものであらう。何となく神話めいた點がある。が、生娘の一本氣、思ひ詰めた戀を蛇體に象徴したのは面白。老近松が初期の脚本に藤壺の戀を藤の花にかたどり見る中、その藤が大蛇になると云ふのが此も似た着想だ。朝顔日記の深雪が戀人の後を慕うて大井河まで驅けつけると、悲しや河は川止めとて悲歎やるかたなく己に身投げと危い處へ奴の關助が追ひついて抱きとめ、乳母の淺香もやつて来て、亥の年亥の月亥の日の生れの女の生血が眼病の妙藥ときいてゐますからとて、淺香はその場に自害して「早くこの血を上つてお目を直して下さい」と勧める。已むなく關助が水呑で受けて深雪に服ませると、不思議にもパツチリ眼があいてもとく通り清眼の美女となり、父弓之助の歸參もかなひ親々のゆるしも出て戀人宮城阿曾次郎とめでく結婚すると云ふ筋になつてゐるが川どめのところは日高川と大分似てゐる。唯作者が女主人公深雪をば清姫以上に優遇して旨まで直して結果をめでたしにしたものと思はれる。蛇の執着は從來秋成の「蛇性の淫」などもあつて聯想上何となく肯かれる。殊に女の妄執の象徴としてはふさはしいと思ふ。清姫が若し鶉に化つたら、蝦蟇に化つたら、狸に化つたら……と假定をおいて想像すると大蛇に化ると云ふ筋が一番妥當なやうに思はれる。

謡曲砧

前シテ 妻 ツレ 侍女夕霧
後シテ 妻の幽霊 ワキ 蘆屋某
處は 筑 前

九州筑前蘆屋の某訴への爲め出京、三年の滯留に故郷のこと心もとなく侍女夕霧をかへして妻に消息する。

シテサシ「夫れ鴛鴦の衾の下には、立ちさる思ひを悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁ひ有り、ましてや深き妹脊の中、同じ世をだに忍ぶ草、我は忘れぬ音を泣きて、袖に餘れる涙の雨の晴間まれなる心かな。

と折から夕霧到着、妻はいそぐ出迎へて夫の吉左右を尋ね留守居の淋しさを述懐する。

シテ「……思ひやれ實には都の花ざかり、なぐさみ多きをりくにだに、憂きは心の習ひぞかし、地「鄙の住居に秋の暮れ、人目も草もかれく、の、契りも絶えはてぬ、何を頼まん身のゆくゑ、三年の秋の夢ならば、うきはそのまゝさめもせで、思ひでは身にのこり、昔はかはりあともなし、

と、折から響く里砧「あゝら不思議何の響き」と訝かると、夕霧が「あれは里人のうつ砧と申すものでござります」とてはアノ砧か」と漢の蘇武のことを思ひ出し、夫戀ひしの餘りに、強ひておりたつと、夕霧もやむなく一緒に打つ(この處は謡としてはシテ、ツレの掛合ひよろしく地も優麗に出來てゐる。)

シテ「いざく砧うたんとて、馴れて臥猪の床の上。ツレ「涙かたしく小筵に。シテ「思ひを述ぶる便ぞと。

ツレ「夕霧たちより諸共に。シテ「恨みの砧。ツレ「うつとかや。

地次第「衣に落つる松の聲、衣に落ちて松の聲、夜寒を風や知らすらん、シテ「聲「音つれのまれなる中の秋風に。地「憂きを知らする夕べかな

その後又も都のたより「ことしの暮にもまだよう歸らぬ」とのことには妻はがっかりして

シテ「恨めしやせめては年の暮をこそ、偽ながら待ちつるに、さてははや誠に變り果て給ふぞや。地「思はじと思ふ心も弱るかな。聲も枯野の虫の音の亂る、草の花心、風狂じたる心ちして、病の床に伏し沈み、つひに空

しくなりにけり。

用事を済ませた夫は倉皇筑紫に下つたが、歸つて見れば妻は早や焦れ死にして形もない……否荒涼たる廢屋の中何やらん髻髻たるものがあつてやがて顔となり胸となり手となり妻の面影となつて、相手の無情を色々と怨む……それは亡き妻の妄執なのであつた。夫が靜かに法華經を誦して回向するとその功德によつて妻は圓滿な佛果を受ける。この末段は能に演じては難も無からうが、之を單なる文學として讀む時には左の一段は前段に對して餘り唐突であり木に竹を繼いだやうな嫌がある。

地「法華讀誦の力にて、幽靈まさに成佛の、道あきらかになりけり。是も思へば假初に、擣ちし砧の聲のうち、開くる法の花心、菩提の種となりけり。

其他謡曲の戀では大抵女が男を戀ひ、焦がれ〜て狂うたり死んだりする。死んだものは戀の執着がつよくて冥界に迷うてゐる。狂うたものは(あまり淫らな色情狂めいた騒ぎはしないが)現し心もなくさまよひ歩くが、何れも佛經讀誦の功德によつてめでたく成佛したり本心に立ち返つたりすると云ふことに落ちてゐるものが多い。

兒物語 當代にはまだ衆道物として色々の兒物語がある。何れも美少年を中心にした戀の哀話で、禁慾生活を標榜する寺の裏面描寫として、又は或一部の變態性慾者の内面描寫としてその方面から觀ては價值があらうと思ふが、余にはまだこの衆道そのものについての定見がないし、兒物語もあまり見ないからこの項を省いておく。唯二三有名な書の略筋を云ふと

「松帆浦物語」は侍従の君といふ童の戀人岩倉の宰相が事によりて淡路へ流されたので、後を慕つてその地へ下つて見

ると宰相は早やみまかつて居たので、發心して法師になつたと云ふ話で、定家の「こぬ人をまつほの浦の夕風に やくやもしほの身もこがれつゝ」の咏から思ひついた題であらうと思ふ。

「秋の夜の長物語」山と寺との關係を背景にした衆道物で西山の瞻西上人と三井寺の坊にをつた梅若君(花園左大臣の子)との情事を綴る。梅若はこの後いろ〜の作品にうたはれた。

「鳥部山物語」武藏の國民部郷と云ふ法師が上京して藤の辨と云ふ童に契ると云ふ筋

凡てこれ等の物語の美少年を形容するには伊勢源氏以下の諸物語の女性さながらのかたち、心ばへをあてはめて、王朝の物語の變質のやうに想はれるのは多分は作者の好みが作品に反映してモデルの事實をひどく變へたのであらう。

近世文學に表れたる戀愛

徳川時代に入つて戀愛文學は多様に發展した。一體文學は太平の世に興るものなの

が、殊に戀愛文學のやうなものは就中文化の享樂時代に勃興する性質のものだ。(尤も近代戀愛觀から云へば眞面目な戀は人生と共に何時でもあるべきものだが……)この點から考へて、王朝と元祿と明治大正の現代とに戀の文學が發達したことは自然の數と謂つてよい。遊廓と歌舞伎は近世人の本能の噴火口であり遊戯衝動の安全瓣でもあり後には二大社交機關とさへ看做されるやうになつた。これに地方の素野な生活を加味すれば、當期の戀愛文學の本源は盡せてゐると思ふ。女性史や閨門史には堂上家の戀もあらうし、史實としては大奥の女中まつはる戀もあらうが、赤穂義士の快擧すら如實に寫すことを止められた當時に在つては、それを自由に取材することは許されなかつた。自由に取材される戀物語としては遊廓情調、歌舞伎氣分乃至田舎の盆踊り式なものが多數を占めた。

そこで當期の戀愛文學を大別すると

近世文學に表れたる戀愛物

- 一、俚謡
- 二、小説
- 三、戯曲
- 四、脚本

となる。一には地方人の戀(尤も俚謡の材は都鄙貴賤の凡てを含み、二は遊廓の生活を取材し、三、四は歌舞伎を中心にしたものが大多數を占めてゐる。

俚謡 当期の俚謡は三絃中心のもの、箏中心のもの、素謡のもの、と樂器の有無で別けるか、地方生活を歌つたもの、町人生活を歌つたもの、遊廓の歌、歌舞伎の歌と、その着想によつて別けるか、若くはその流行の年代順にあけるかすべきだが、今は戀を歌つたものとして大まかに略々年代順にあける。それとて当期の俚謡は非常な多數で新羣書類從第十や聲曲類纂にあがつてゐるのだけでも此書一冊の分量位だから今は極めてその一斑に觸れるだけである。

隆達節 陰徳太平記には小早川隆影が林吉兵衛入道に「此節はどんな謡がはやるか」と聞いたたら「そりや隆達節でせう、殊に「面白の春雨や」などは男女僧俗八十の老翁三歳の孫兒に至るまで誰でも口にしてゐます」と答へたとある。これは文祿年間のことであるが當代に入つても初期には廣く流行してゐたと云ふ。

尺八の一節切こそ音もよけれ 君と一夜は寝も足らぬ

誰が作りし戀の道 如何なる人も踏み迷ふ

立たば立て、我名、君故ならば惜しからぬ命、

夢はへだてず海山を、越えても見ゆるよなくに

寝ても覺めても忘れぬ君を、焦れ死なぬはいなものじゃ

諸國盆踊歌 一名を山歌鳥蟲歌と云つて前期並に當代初期の民謡集とも謂ふべきもので必ずしも盆踊に歌つたものとは限らない。(此書は寛文年間後水尾院撰集文政己酉六月朔日柳亭種彦の編となつてゐるが随分猥雑な歌詞も雜つてゐて到底勅撰集では無いと謂はれてゐる)

山城(二十五の内)

ござるその夜はいとひはせねど くるがつもればうきなたつ。

しのぶみちにはあわきびうゑな あはずもどればきびわるい

こなた思へば千里が一里、あはずもどれば一里が千里 (これは關東では、あふたその夜は千里が一里、と云

ひ、關西では思て通へば千里も一里など云ふ)

さまはさんやでよひく御ざる、せめていちやはありあけに

しゆすのはかまのひだとるよりも さまのきけんのとりにくさ(鶯娘の踊歌にも此をうたふ)

山にさくはなあらしがどくよ、わしはきみさま見るがどく

大和(二十六の内)

人めおもはずひとさへいはにや、おつてきしよぞやたつじまを

河内(二十五の内)

山家くくと あしけにいやる 色のよい花山にさく

あきもあかれもせぬ中なれど いとまやりますおやゆゑに

近世文學に表れたる戀愛 諸國盆踊歌

かねがなるかよしゆもくがなるか かねとしゆもくのあひがなる（これは戀歌と限らないが、人間愛の表現として面白いもので、見様によつては或哲理をさへ含んでゐると思ふ）

こなた百までわしや九十九まで かににしがのゆるまで

たづねてござれこひしくば わしはしのだのもりにすむ

伊勢(五つの内)

かけてよいのは衣袴に小袖、かけてたもるなうすなさけやあれやあれく

しん中しましよかかみきりましよか、やあれ、かみははえもの身はだいいじ、やあれやれく

三河(三つの内)

さまの心はなげうすくなる こゝはやつはしかきつばた、

あかぬふるさとふりすて、 たれがためかやきみゆえに。

駿河(三つの内)

しつておれども人にまたとふて、母のさしづでむかひとれ。

甲斐(三つの内)

たかい山からたにそこ見れば、おまんかわいやぬのさらす、おれがさらすはぬのではないぞ、あだな男の心を

さらす

伊豆(三つの内)

こんどござらばもてきてたもれ、いづのお山のなぎつ葉を、じつにそふならなまづめはなそ、おれは五つのゆ

びをきろ。

武藏(六つの内)

色のよいのは出口の柳、とのにしなへてゆらくと。

いとしとのごを遠くにをけば、からすなくさへ氣にかゝる。

わかいをなごのとのごのないは、笠にしめ緒のないごとく。

安房(三つの内)

やまな白雪朝日にとける、とけて流れて三島へ落ちて、三島女郎衆のけせう水

越中(四つの内)

あゆはせにつくとりは木にとまる、人はなさけしたにすむ

佐渡(五つの内)

さまはつりざぼわしやいけのふな、つられながらもおもしろい

丹後(六つの内)

いはのしみづはそこからわくが、さまの心もそこからか

たんば田處よい米どころ、むすめやりたやむこほしや

但馬(七つの内)

あめはふるとも身はぬりやせまい、さまのなさけをかさにきて

播磨(六つの内)

ござるくとうき名をたてし、さまは松風おとばかり
備前(五つの内)

備前岡山新太郎さまの、江戸へござれば雨がふる、あめぢやござらぬ十七八の、こひの涙が雨となる。
備中(五つの内)

こなたおもへばてる日がくもる さえた月よがやみとなる
長門(三つの内)

こいじやせきやるなうき世はくるま、命ながけりやめぐりあふ
淡路(四つの内)

舟がつくく二百二十七そう、さまがござるかあの中に
しんくしまだにけさゆふたかみを、さまがみだしやるぜひもない
伊豫(五つの内)

やみのまる木ばしさまとならわたる、おちてながれてさきのよとも
對馬(三つの内)
いらぬきせるのらうがながうて、様とねたよのみじかさよ

弄齋節 朗細節とも癆癡節ともあてられたが、今は普通弄齋節と云ふ。隆達節の後を受けて元和寛永頃から流行した。始めは、素謡、琴唄として謡はれ、後には三味線歌としてひろまつた。

逢ふて立つ名が、立つ名のうちか、逢はで立つこそ、立つ名なれ

思ひ出すとは、忘るゝ故よ、思ひ出さぬよ、忘れぬは

は少々理におちるが、

よしや今宵は、曇らば曇れ、とても涙で、見る月を

の咏歎は婉曲だ。寛永頃に行はれた「淋敷座慰」(新羣書類第六 二六四—二九八)にあけた中、佳調をあけると、

迎も縁ない中にてあらば、などやはじめのつらからぬく

思ふまいもの心をつくし よそに心のあるさまを

思ひ出す夜は枕とかたろ 枕ものゆへこがるゝに

はなれくんのあの雲見れば あすのわかれもあの如く

戀をはじめた人うらめしや 今の我身のつらきゆるゑ

弄齋節以後暫らくは俗謡の混沌期に入つて左の諸謡が一時歌はれた

寛永ほそり(聲を細くして唄ふ意) 片撥(三味線の撥使から來た名稱)

承應 芝垣節(明暦の大火に江戸の町中が柴垣になつたといふ意歎、但し明暦はこの節流行の末期である)

明暦 櫻川の節

萬治 ぬめり(ぬめりは靡詞で浮かれ歩くと云ふ意で遊廓通ひの若者の間に行はれた)

土手節(ひやかし節)

籬節(これについて稍流行したものとしては山谷源五兵衛節、替り源五兵衛節、のぼん節)

近世文學に表れたる戀愛 弄齋節

寛文 加賀節(寛文頃金澤からはやり出したもの)

れんほ(慶長頃からはやり出したもので一節切の曲譜に歌詞づけしたもの)京はやり節、浮世流行いそべ殿節、かはりせうがな節、のつちりふくじる節、

延寶 谷中浮氣節、御門徒興五平節、大阪かゝすみ節、吉原しよくりしよぶし

此外に、近江踊、伊勢踊、小倉踊、菅笠節、大和踊(吉野山)小六節、鹿踊、岡崎節(岡崎女郎衆)などは寛文延寶頃から元祿頃までも、三味線や一節切の初心の徒が歌つたものだが歌詞としては上述の諸謡と略近い。

投節

延寶頃から歌はれ出して弄齋節の下火になるにつれて俚謡界の主節を占めた。その名稱の起原は「柳節」からであらうと衰笠翁は言ふ。それかあらぬか、諸國盆踊歌中伊豆の部には前述べた通り柳の葉が文句にある。その流行次第についても諸家の説があるが、今はそれ等をおいて單に戀唄の佳調をあける。

戀しゆかしは過ぎにし昔、今は訪はれも訪ひもせず

訪は、訪へかしこの夕暮を、明日の命も知らぬ間に

宵の口説にしらけた迹を、鳴いて通るや不如歸

なまぜ生中馴れずばかほど、物は思はじさりとは

逢はぬつらさを焦れしよりは、逢ふて別るゝ憂き涙

花に置く露小笹の霰、こほれやすきはわが涙

尙投節と並行して一地方に唄はれたものに、わきて節、伊香保節、長崎節、のんやほ節など云ふものが三十種程あるが

その中の例をあけると、

有馬 (有馬の温泉地にはやつたもの)

露になりたや袂の露に、消えぬ憂身のかこち草、何を種とか我思ひ、

星になりたや七夜の星に、橋の紅葉の色ふかく、掛けて願の糸の縁、

薩摩節

空に鳴音は、皆うそ鳥よ、閨の内こそほとゝぎす

さんさ節 (はやしからつけた名)

滋賀の漣、立つともまよ、なさ、霞がくれの舟ゆかし、な、ほいさほいな。

せうし(始めの歌詞をとつた名でさきはぎ唄である)

笑止くが三笑止ござる、一に出ぬ首尾、二に舟の雨、土手の夕ぐれ、橋場の烟り、明の鳥のこゑぐも、氣

のどく、

しよがへ節

あまりあつさに門まで出たりや、お寺若衆に引きとめられて、のきやれ放しやれ帶きらしやんな、帶の切れた

は結びもなるが、ゑんの切れたは結ばれん、しよんがへ。

下の關節

思案橋とんくく、越えてな、お宿にござんすくる、そこせいく、三里隔てし波の上、色と情を小舟に

乗せて、くるは誰故そさま故

さうだんべい

内裏女藤衆は水の月、手にもとられず見たばかり、さうだんべい、しごくときゝわけた。

涙川

立田川には紅葉を流す、我は君故浮名を流す、君故流す。

花見車

花見車を引きやるはよいがく、御所の女藤衆の袖ひくな、やれ袖ひくなく、御所のちよろしの袖ひ

吉田小女郎

吉田通れば二階からちよいと招く、しかも鹿子の、ずんと振袖が、なん君よよいとしよ。

尙當代前半期には京阪を中心にした上方唄（法師唄とも地歌とも云ふ）がやはり、後半期には江戸長唄や、江戸淨瑠璃が流行したが、その中にあらはれた戀は多く遊女を中心にしたものであつた。

潮來節 常州行方郡潮來は享保元文頃を絶頂に可なり繁昌した港で、潮來節はその闇夜に咲く花をたゝへたのが起りらしい。天明寛政頃には已に江戸にもひろがり爾後全国的に流布した。

潮來出島の眞菰の中に、菖蒲咲くとは露知らず（今は菖蒲咲くとはしほらしやとも云ふ）

三味の糸さへ三筋にわかる、おなご心の一筋に

宵の鐘なら千里もひゞけ、きかせともなや明けの鐘

人がくどけば一度で落ちろ、小野小町の末を見ろ

筆にいはせて硯にたのみ、文に媒させた中、わすれさんすな紙の恩（千載集のする墨もおつる涙にあらはれて

こひしとだにもえこそかゝれぬ）

これと併行して地方々々に唄はれたものには

よろこび節、十二月・一つとへ、こひな節、いろは教訓歌、こんたん節、よしよし調——これには左の轉化がある

始め よしよし調

文化七年 なんじやく

文化九年 なんとしやく

文化十年 はりはいなあ、すいたかよ

文化十四年 ひつちやくちやのなんきやく節 同替唄

文政二年 なんしよ節

よいやさ節、じくじく節、いよさかすのしよてきはさんさ節、よふきぶし、てかの節、いよさがすいしやでき

はさんざ節、案じられ節、なま節、さんへ節、どもり唄、よしかへ節、づいとせ、でんぐりぶし、まいご節、

だんぼさん、おなら、張形、鼻息、

などがあり、遊廓からはやり出した

久かた、夢の手枕、ほんにかへ、江戸つ子、女文章、鳥影、心意氣、

などがあり劇場がもとで廣まつたものに

近世文學に表れたる戀愛 潮來節

傾城づくしのつま琴唄(文化十二年四月流行)、座頭徳市木琴の唄(文政元年流行)などがあり地方民謡の復活や替へ歌で相當流行したものに

雲助唄(御笑草諸國の歌)、船唄(御船唄五十五番中)、住吉節、笠を節、丹後の宮津、出羽國庄内節、京の金閣寺、

飴賣が流行の源をなした

勇節、世なをし節、

輸入歌として稍異國情調のある

かんかんのう

その模倣とも謂ふべき

てれんとん、つんつるてんてん、ちやらつとてちん

随分思ひきつた歌詞の

坊さま、戸板に豆、とほけた婆さま、いよさ、なんじよいな、

哀婉調で情死者を増したと云ふ二上り新内など一々數へるも煩はしい程だが遂に一種をもこゝに擧げるに値する勇氣のないほど平凡であり猥雑であり無内容であり、陳套である。

よしこの これにも諸説はあるが、大體潮來節の轉化で、次期の中心勢力となつた俚謡と見てよろしからう。

風呂へ行くとて手拭もつて、跡から來る人、もし、手拭が落ちました、と言はれて悔り、跡振返つておかたじけ

儘よ三度笠横ちよに被り、旅は道連れ、世は情

意氣な丸鬚結城の小袖、旦那おはやうといふて見たや

女禁制の高野の山よ、誰がうゑたか女郎花

きのふ北風けふ南風、あすは浮名の辰巳風

ぬしは性悪田毎の月よ、どこへ誠がうつるやら

(尙これには文句入よしこのや早口よしこのもある)

よしこのと併行して愛誦されたものに

しやりしよ節、ちうちう節、越後節、世話にはなるまいし、そうだろ節、はいよ節、やしよめ節、世話やかし

やんすな節、どんく節、蝶々蜻蛉、囀り唄、お影参り(お影参り唄、お影参りの三十六ヶ錢唄、お影参り別

の唄)やれこりやよい、えつさく節、ほんだよ節、つやまた節、なぞ唄、はねだ節、よいやさ節、笑ひ節、

道理じや節、四季の唄、まねき節、かつか節、三國一の唄

などがある。

どどいつ 「よしこの」から轉化したどどいつは天保九年八月俗謡美音の天才都々一が扇歌の牛込薬店で謡つた頃から盛行して明治大正の現代尙ほ一勢力をなしてゐる。

灰に書いては消す男の名 火箸の手前も恥しや

山で伐る木は數多けれど 思ひ切る氣は更にない

近世文學に表れたる戀愛 よしこの どどいつ

女房もちとは知つての事よ、惚れる加減の出来やうか
 かゝる綱なき身は捨小舟、よしとあしとにつままれる
 夫婦けんくわは三日のつきよ、ひと夜ひと夜にまろくなる
 ど、いつの歌詞には優れたものが多いが余の頭ではそれが現代の作か天保以後慶應までの作かまたはつきり考證のつかぬものがある。

このどどいつと相並んで行はれた俚諺に
 助さん小間物の唄、ビヤボンく、おいとこ節、伊豫節、大津繪節、粹か不粹か、豊年やるせ節、おかしや、
 一らんだ、丹後の宮津、伊奈勢節、のうち中ちやん、ほんやん節、よさこい節、忠臣藏鳥さし、風流まんまど節、
 じゃうだいな節、のんのこさいさい節、きやり節、のうへ節、やつとんまかせ節、よつしよこしよ節、こうつく、
 當世這世武士、ばあばあ節、三鼓節、おばさん、名物節、歌澤
 などがある。

最後に今一つ
 君と寝ようか五千石取るか、何の五千石君と寝る

と云ふのがある。作者は五千石の旗本三浦肥後で唄はれ出したのは寶暦元年からで、天明五年七月十四日藤枝外記と遊女綾衣の情死以來殊に盛んに唄はれた。感覺的ではあるが戀愛至上の讚美歌とも謂ふべきものだ。(外記は四千石の旗本綾衣は京町四丁目大菱屋の抱へ)

俚諺に盛られた戀は斷片的、感覺的、遊戯的なものが多いが、短歌に比べるとその真情を開放して無邪氣に表されてある。余がこゝにあけたのは主として七七七五の廿六音調のものであつたが之以外の調のも澤山ある。(けれども大體當期の俚諺調は廿六音が基本と見てよろしからう) 此稿は主として紫浪小史藤澤衛彦氏の流行唄變遷史によつて採萃した。

小説 當期の小説については總合日本文學全史以後左の數書の外、何も原本を讀んで居ないから敷衍を省く。

- 藤岡作太郎氏 近代小説史
- 鈴木 敏也氏 近世日本小説史
- 同 雨月物語評釋
- 津田左右太氏 文學に現れたる我國民思想の研究、平民文學の時代
- 藤村 作氏 上方文學と江戸文學
- 藤井 乙男氏 江戸文學研究
- 雜誌國語と國文學十月元祿文學號

戯曲 概して謂へば戯曲の男女の多くはロマンチックな戀の主人公である。西洋文學にあるやうなプロセスに委曲があつて、議論や、事業や、主義や理想の上から、相接近したと云ふのでなく、「袖ふりあふも他生の縁」と云ふ俚諺を根底とし「チラと見初めて、見初めてそめて」と云つた鹽梅で、「好きでくならぬ仲」となり、「たとひ火の中、水の底までも離れまじ」と熱し、其結果が、婿曳家出、かけおち、心中となるもの比々皆然りである。隨て相思の仲になるまでの兩性の心理解剖なんかは、てんで見られない。開幕已に双方の愛の成立してゐるものや、許婚の仲になつてゐるもの

のが多い。八陣の雛絹主計の助がさうであり、歌祭文のお染久松がさうであり、五十年忌歌念佛のお夏清十郎がさうであり、長町女腹切のお花半七がさうである。(例は他にいくらかもある) 唯其中チャンスチャンスの戀にじんだおさるやおさんやお種など云ふ女性描寫には稍精細なプロセスがあるが寧ろ例外と謂つてよろしからう。随つて戀の場面ラブシーン(濡れの幕)はあるものとなないものがある。あるものに就いて見ると、ロマンチックな、美しい、可愛らしい、優雅な趣がある。大峰櫻、妹脊山、朝顔日記などがその好例である。之を西洋文學作品と比べて見ると彼の戀の場面の大部分は饒舌澤山な對話と抱擁、接吻との持ち切りの様だが、戯曲では餘り詞を多くしないで表情にゆかしみをつけるやうに出来てゐる。更に戀愛の時代的色彩を観ると上代、王代の戀には純粹感情の掬すべきがあり武家時代の戀には「貞婦兩夫に見えず」と云ふ凛乎たるものがあり、世話物には町娘の「思ひつめた娘氣」のおほこな熱烈、傾城の「浮世の義理が何で候」と云つた意氣でお俠で戀には脆いと云つた風の情味がある。

心中物については前に表示したから、今はそれ以外の戯曲に表れた異性關係をあける。

第一世 話物

女	男	作者	題目
小梅	由兵衛	原田 良輔	茜染野中の隠井
お夏	清十郎	近松	お夏五十年忌歌念佛
梅川	忠兵衛	近松	梅川冥途の戀飛脚
夕霧	伊左衛門	近松	夕霧阿波鳴戸

松山 椀久
おさん 早次郎

椀久末の松山

松山 椀久

紀海音

椀屋久兵衛末の松山

松山 椀久

文耕堂

丹波屋松山
椀久元日金年越

清川 文七

文耕堂

雁金文七

清川 文七

雁金文七三年忌

つね

吾妻 山崎與次兵衛

近松

山崎壽の門松
與次兵衛

お菊 難與平

彦助

お長 長吉 (放駒)

西澤 一鳳
田中 千柳

昔米萬石通

お菊 幸助

宮古路豊後

加賀お菊妹脊中

お七 吉三郎

佐藤定七

お七 武兵衛

紀海音

八百屋お七

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

雛鶴
小 雪 吉三郎
お 七 稻垣兵太

爲永太郎兵衛
淺田一平鳥
豊田仙鶴
但見鶴

きそ 安森源次兵衛

小さん 金五郎
あけほのや大次郎

大夫眞之正本

金屋金五郎後日雛形

お 花 半七

近松

長町女腹切

お 柳 半七

竹田 和泉

お花京羽二重娘氣質
半七

おさつ 新平

お 駒 才三郎

松 貫四
吉田 角丸

戀娘昔八丈

お 俊 傳兵衛

おしゆん 近頃河原達引
傳兵衛

薄 雲 三笠頼母

紀海 音

三井寺開帳

姫 君 雲川彈正

お 長 久助

お 品 彌左右衛門

お 高 花岡文七

竹田 出雲

江戸文七髮結
大阪屋文七紺屋男作五雁金

お 鳴 文七

清 川

吾 妻 與兵衛(放れ駒)

竹田 出雲

双蝶々曲輪日記

お は や

お 照 與五郎(濡れ髪)

三好 出雲
並木 松洛
千柳

お と ら

薄 雪 園部左衛門

文 耕 堂
三好 松平
小川 半雲
竹田 小出雲

時代新薄雪物語
世話

籬 妻 平

お梅の方 園部兵衛

おれん 吉助

おてる 六郎右衛門

置く霜 新七

お 霜

文 耕 堂
三好 松洛

敵討襦袢錦

おぬい 佐兵衛

長谷川千四

敵討御未刻太鼓

近世文學に表れたる戀愛

戯曲

おさだ 八内
 お雪 藤助
 お菊 友藏
 お來 石井兵衛
 赤松水右衛門
 近松 半二
 道中龜山噺
 お時 香川左市
 岡野 源藏
 おくら
 おみの 吉兵衛
 江川
 糸 彦三
 近松 半二
 川崎屋彦三 替唱歌糸の時雨
 小野村古今
 於 咲 花屋惣八
 お梅
 御簾外御前 備前生田
 河合正宗の由來 志賀の敵討
 芭蕉翁俳僧濫觴
 初瀬の方 伊賀上野の城主

およつ 東之助
 瓦井政五郎
 お菅 渡邊數太夫
 お鹽 蘭 又右衛門
 近松 半二
 伊賀越道中双六
 瀬川 渡邊志津馬
 お袖 又五郎
 お谷 政右衛門
 お後
 お豊 平作
 おきの 助 平
 紀上 太郎作
 達田 辨二 補助
 糸櫻本町育
 お梅の方 源左衛門
 小糸 神原左五郎
 花 咲 中根屋綱五郎
 お房
 お岩(岩藤) 百姓茂治作
 達田 辨二 鬼眼
 お咲 山田幸之進
 佐久間文治
 近松 半二
 伊賀越道中双六
 お咲 緒重 血紅跂
 文治

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

お松 八十七

矢島源治郎

お梅の方 源左衛門

錦木 禮三

お才

おとは 岩川治郎吉

よつ 千羽川吉兵衛

かほよ御前 鹽谷判官

お石 由良之助

お品

となせ 加古川本藏

小浪 力彌

お輕 茅野三平

お園 天川屋儀兵衛

お蘭

近松 半二 三好松洛 竹田 文吉

關取千兩幟

竹田 小出雲 八民平七

竹本 三郎兵衛

竹田出雲 三好松洛 並木千柳

假名手本忠臣藏

おさん 以春

おたま 茂兵衛

お澤 先夫

松風 與平

小菊

吾妻 淀屋勝二郎

小まん 篠野三五兵衛

おまん 菱川源兵衛

お蘭

博多の妓女 小町屋惣七

重の井 丹波與作

小まん

お種 小倉彦九郎

お藤 宮地源右衛門

おゆら 政山三五兵衛

近松

おさん 戀八封柱曆 茂兵衛

近松

女殺油地獄

近松

淀戀出世瀧徳 源五兵衛 薩摩歌 おまん

近松

博多小女郎浪枕

近松

丹波與作

近松

堀河波の鼓

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

遠山——狩野四郎二郎

近松

傾城反魂香

姫君

浦里——時次郎

浦里明烏六花曙
時次郎

……手代彦六

高雄——玉木衛門之助

近松 半二

傾城阿波の鳴門

……團八

お弓——十郎兵衛

おまさ——邦家三郎右衛門

夕霧——伊左衛門

お菊……

おその——毛谷村六助

お駒——才三

沖の井——度會銀兵衛

玉手御前——高安浦俊

淺香姫——俊徳丸

妻——合邦

おさん——宗五郎

梅野下風 御庫九州
近松保藏 地理八道

彦山權現誓助劍

松貫四

戀娘昔八丈

松貫四

伽羅千代萩

攝州合邦辻

花雲佐倉あけほの

第二、時代物

高麗笛姫——雅樂之介龍起

松田和吉

河内國姥火

玉琴——平藤太

木々乃——

東路——大内義隆

薄雲——

信夫——吉川右衛門景任

お心——尾張守晴賢

中宮——高倉天皇

小督の局——

妓王——

妓女……清盛

延壽……

小ゆるぎ——義澄

吳竹——太郎義盛

お房——畠山重忠

おかつ——九郎兵工

近松添削 松田和吉

妓王 佛御前扇車
妓女

長谷川千四 文耕堂 三浦大助紅梅鞆

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

小太夫——真田文藏國安

漣——新六郎義胤

帶刀兵衛

長谷川千四
文耕堂

信州姥捨山

お千枝——犬八

裏葉——里見左近之丞友繁

お菅——文之進

柳の前——鬼次郎

皆鶴——牛若

常盤御前——清盛

品照——阿根輪平次光景

禪菊——薩摩守忠度

桂子——小萩

丘谷——二郎惟光

糸竹——三郎惟義

千壽——重衡

ちか——加藤次

こなつ——二郎作

長谷川千四
文耕堂

鬼一法眼三略卷

長谷川千四
文耕堂

須磨都源平躑躅

文耕堂

太平記車返合戦櫻
住吉卷

二葉の前——大森彦七

玉峰

錦木——荒川藏人

おうしう——仲秋

小蝶の前

おたき——才藏

玉水姫——桂中將在教公

將門

木末——沼田村の百姓多次兵衛

小枝——秀卿

お袖——大六

吳竹——丁七唱

乙女の前——丘衛佐頼朝

政子

萬壽御前——河津三郎祐重

牧の御前——北條時政

お石——由良之助

文耕堂
竹田小出雲

三好松洛
千前軒

淺田可啓

今川本領猫魔館

同上

將門冠合戦

同上

伊豆院宣源氏鏡

同上

太平記忠臣講釋

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

お禮 五郎太

お京 北村傳治

浮橋 縫之助

りゑ 矢間重太郎

おきた 寺岡平右衛門

おその 天川屋儀兵衛

京の君 義經

静

花の井 侍從太郎盛國

おわさ 辨慶

若葉の内侍 小松三位維盛

おさと

京の君 義經

静

おりう 渡海屋銀平

たをやめ御前 義晴

賤の方

文耕堂
三好松洛

御所櫻堀河夜討

竹田出雲
三好松洛
並木千柳

大物船矢倉
吉野花矢倉

義經千本櫻

近松半二
竹田因幡
竹田半七

三好松洛
竹田小出雲
竹本三郎兵衛

武田信玄 本朝二十四孝
長尾信景

八橋 村上義清

賤の方 北條氏時

濡れ衣 叢作

八重垣姫 勝頼

常盤井御前 信玄

唐織 高坂彈正

お種 慈悲藏

玉房御前 畠山重忠

白梅 三谷四郎國時

阿古耶 景清

衣笠

唐綾 本多近經

山吹御前 義仲

お芳 富藏

千鳥 源太景季

平次景時

延壽 平三景高

壇浦兜軍記

三好松洛
淺田可啓
竹田小出雲

逆櫓松
矢箆梅
ひらがな盛衰記

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

千種の姫——要之助 福内 鬼外

源氏大草紙

……梶原平次

吾妻——荏柄の平太

……梶原源太

喜瀬川——朝比奈

白河——佐藤次信

静——新左工門常盛

初花姫——

おりく……義 蜂

お船(死靈)……

久賢御前——佐々木判官秀詮

お筆の方——

花扇——縣の三郎

關の戸——將 監

高 雄——足利頼兼

歌形姫——(細川家息女)

裏 藤——彈正左衛門

東門都 福内鬼外
同人 森羅萬象
浪花 二天作

矢口新御靈新田神徳
後日

烏亭 焉馬
達田 辨二

伊達競阿國戲場

河内——女之助

きさかた御前——足利義政

累——絹川(力士)

都 路——畠山六郎重保

花 扇——

お 秀——萬次郎

八城御前——千葉常胤

櫻 木——與 市

梓——大庭太郎

政 姫——頼 朝

静ごぜん——義經

卿の君——

浮 島——土佐坊昌俊

濱 荻——行 家

更 科——辻法師

おさご——青墓屋清兵衛

賤の戸——河連法眼

萬象亭 隅田喜四郎
中田林七 芝 鬼
双木千竹 松 眠

石田詰將基軍配

福松 淘宇

宇賀道者源氏鑑

松貫 仲二
吉田

吉野静人目千本

戊々衣——左工門助國時

軍太夫

そへ——勇

細川家息女——左門之介

美鳥——速水雅次郎

操姫——縫之助

おまん——庄屋

戀絹——生駒之助

敷妙——義家

袖萩——貞任

濱ゆふ——直方

お谷——善知鳥文治安方

岩手——安倍頼時

浮船——龍川

初花——櫻井數馬

お辰(狐)

お崎——喜藤次

並木春三
吉井平八

自雷也物語

容楊黛

加賀見山舊錦繪

近松半二
北窓後一
竹本三郎兵衛

奥州安達原

近松半二
竹本三郎兵衛

山城の國畜生塚

お通の方——小田信忠

衣垣——森蘭丸

雛次——久次

勾當の内侍——義貞

雪枝——伊賀の守

初音の前——楠正行

妻——小山田幸内

磯波——小山田彌太郎

おそね——小山田孫三郎

お此——がま六

眞鹿御前——常陸の國司

照田姫——桂川の宮

よつ——小太郎

お花——

千本の姫——與市郎藤成

近松半二
竹田平七
竹本三郎兵衛

蘭者待新田系圖

近松半二
並木永輔
柿本三郎兵衛

竹田伊豆
竹田小出雲
竹田平七

常陸帶小夜中山鐘の由來
夜啼石

近松半二
八民平七
三好松洛
竹本三郎兵衛

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

うてな——小田信永

泉州小田居茶屋 三日太平記

小野お通

松浦の前——小田信忠

くれは——真柴大領久吉

さつき——光秀

近松半二 三好松洛

陸奥太夫——大内多々良助義隆

廓の名は陸奥 萩大名傾城仇討

妻——高倉十内

千手の前

紀海音

新百人一首

金山——春霞雲井之丞秋忠

浮橋——和田義盛

同

末廣十二段

松が枝——靱負之丞

同

殺生石

あふちの前——了俊

同

忠臣青砥刀

おさん——青砥五郎藤次

初秋——松名

同

頼光新跡目論

虎——十郎

同

曾我姿富士

少將——五郎

野分——里見の七郎

同

花山院都巽

弘徽殿——藤壺の君

常陸御前——信虎

同

甲陽軍鑑今様姿

錦——長坂長閑

淺茅——朝比奈三郎

同

鎌倉三代記

時姫——三浦之介

正貞尼——秀衡

同

義經新高館

花卷——和泉三郎忠衡

青柳——片岡六郎

となせ——齋之助

同

東山道室町合戦

榊の前——大樹

植竹——大和田要人

同

三莊太夫五人娘

女房——山岡

おはつ——成相太郎

おつぎ——橋立次郎

おさん——三郎

妻木——大和田内藏進綱清

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

壽
山の井——喜六太(義仲)
近江のお金

竹田 出雲
長谷川 千四

照天姫
常陸——小栗判官兼氏

千前 軒
文 耕 堂

小栗判官車街道

桔梗

宿木——後藤左衛門
淺香——太郎

千里——左衛門

多子の君——近衛院
呈子の君

竹田出雲
近松半二

吉田冠子
中邑閨助

菖蒲前操弦

菖蒲の前——頼政

春日——石川次郎左衛門秀廉

早咲——齋藤太郎左衛門秀廉

近松添削
竹田出雲

大塔宮曠鎧

三位の局——永井右馬頭信明
花園

蓬生——大彌太

靜——義經

竹田 出雲

右大將鎌倉日記

卿の君

安督——佐藤四郎兵衛忠信

政所——頼朝

常盤井——工藤祐經

竹田出雲
北窓後一

二樂堂
竹本三郎兵衛

近松半二
三好松洛

太平記菊水之卷

葉末——氏滿

玉川

千束——石堂勘解由

若紫——小姓竹之丞

秋篠——楠帶刀正行

久我大臣息女——義經

近松

凱陣八島

妻——和泉三郎忠衡

錦祥女——吳將軍甘輝

近松

國姓爺合戰

蘭玉——凍芝豹

同

國姓爺後日合戰

梅檀女——甘輝

紫燕——朱一貴

同

唐船嘶今國姓爺

光姫——源頼義

同

文武五人男

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

有明	下部民部季宗	
唐綾		
宿木	鎌田兵衛	同
花月	若狭の介則風	同
常盤	義朝	同
	清盛	
淨瑠璃御前	牛若	
藤の前	頼朝	同
淨瑠璃御前	牛若	
北の方	民部省教房	同
卯の花	中務	
老女	小柴の郡司	同
姫	二の宮の太郎安清	同
虎御前	十郎祐成	同
少將	五郎時致	
第九の姫君	高倉帝	同
あづまや	俊寛僧都	

鎌田兵衛名所盃
大職冠
朶常盤
朶常盤追加源氏冷泉節
賀古教信七墓廻
大磯虎稚物語
曾我虎か磨
曾我五人兄弟
平家女護島

千鳥	康頼	
照手	兼氏	同
琵琶の君	斯波左衛門義將	同
中川	藤内太郎家治	
小晒	藤内二郎盛清	
龜菊	祐經	同
白妙	彌兵衛宗清	同
勾當の内侍	大森彦七盛長	同
女房	小山田高家	
横笛	齋藤瀧口頼方	同
かるも	左京の進義次	
常夏	本多次郎近經	同
阿古屋	工藤祐經	
龜菊	...	
虎	十郎祐成	
少將	五郎時致	
小野お通	信長	同

當流小栗判官
雪女五枚羽子板
百日曾我
源氏烏帽子折
吉野都女楠
娥歌加留多
曾我會稽山
本朝三國誌

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

第三、王代物

小町 — 深草少將
水無瀬 — 大伴黒主
蘭の方 — 小野良實
若萩 — 甲賀四郎兼清
絹笠 — 甲賀三郎窟物語
小糸 — 志賀之介
久方御前 — 甲賀三郎兼家
お濱 — 鶴見帶刀
大柏の作太夫
横の戸 — 絹笠外記左衛門
かく山 — 清澄
足がき — 生藏
おりく — やとふまいの百介
村ぢ — 岩藤左膳

竹田出雲
小野炭焼七小町
深草土器師

竹田出雲
甲賀三郎窟物語

竹田出雲
傾城國姓爺

小町 — 四位少將有平
刈屋姫 — 齊世の君
八重 — 櫻丸
お春 — 梅王
お千代 — 松王
榊の前
葛の葉 — 阿部保名
白狐 — 悪右衛門
花町 — 左近太郎照綱
美那の川の君 — 陽成天皇
篠鶴 — 良實
二條の後 — 業平
松風 — 行平
村雨
關の井 — 高松左衛門清友
司の前
松風 — 中納言行平
村雨

紀海音
竹田出雲
三好松洛
並木千柳
小野小町都年玉
菅原傳授手習鑑

竹田出雲
吉田冠子
吉村閨助
小野道風青柳硯

竹田出雲
吉田冠子
三好松洛
吉村閨助
小野道風青柳硯

文耕堂
三好松洛
竹田正藏
行平磯馴松

竹田出雲
菅屋道満大内鑑

近松
松風村雨束帶鑑

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

玲瓏君——惟茂
澤——久作
高子——清和天皇
井筒の前——業平
紅梅——金吾

近松

梶狩劍本地

第四、上 代物

木花開耶姫——瓊々杵尊
齋田 姫——素盞雄命
五百機——巨旦將來
賤機——蘇民將來
漣——吉備國彦
朧月——大雄命
膳 姫——聖德太子
守屋
櫻戸御前——蘇我大臣
軒端の萩——小野妹子

近松

日本振袖初

同

日本武尊吾妻鑑

同

聖德太子繪傳記

藤袴——大伴神手

千歳御前——牧吹宿彌

閑屋御前——當麻の真人

月益御前——葛城島主

玉世の姫——花人親王

……山彦皇子

北の方(右大辨早廣が妹)

蟬丸 同

蟬丸

用明天皇職人鑑

直 姫

ばせを

立 花——百合若

同

百合若大臣野守鏡

松 枝——秀 虎

岩野の姫——菟道稚郎兒

文 耕 堂

應神天皇八百旗

玉 浪——藤の太夫龍邦

淺 香——牟婁の武振熊

早 歌——石上衛士之介

お 冬——五郎藏

豊浦御前——大連

近世文學に表れたる戀愛 戯曲

雛鳥——久我之助清船
近松半二 松田ばく 榮善子
貞香——太宰小貳
近松東南 三好松洛
采女——天皇
十三鐘 妹背山婦女庭訓
橋姫(豊代)——
衣掛柳

お三輪……園原求馬

紅葉の局……鱒七

からたち姫——天王

照日——

妻木——力彌太

おまき——竹

いはね姫——吳人

朝姫——天智天皇

葛城の采女——

初日——千島之助

藻鹽御前——蘇我大臣赤兄

お市——山上次郎光秋

おたよ——光藏

紀海音 五朝五翠道

同 神功皇后三韓責

竹田外記 近松半二 役行者大峰櫻

濱萩——村國庄司
お峰——役小角

妹背山婦女庭訓の清船 雛鳥

今これ等戯曲の戀の解説の一例として余の愛讀するこの一曲をとる。

太宰の領分大和の妹山、大判事清澄が領分紀の國春山、此兩者の境界争ひによつて、兩家は長いこと不和であつた。然るに太宰の娘鶴鳥と清澄が子息清船とは因果な戀をして悲しい破滅に終ると云ふのがこの戯曲の眼目で、つまり運命劇である。それに附帶して、園原求馬に戀するお三輪には傳説的色彩の面白味があり、天智天皇の寵妃采女と、橋媛とには、女同志の義理があり、獵夫芝六が女房お雉には薄倖の慙むべきものがあり、小菊、枝折、めどの方、桔梗、紅葉の局、お清、豊代姫など、皆相當巧に表現されてある。

天智天皇の中宮二人——一人は鎌足の息女采女の局で、一人は蝦夷の息女橋媛である。そして天皇の御心は采女に傾かせられて居るので、蝦夷は内心頗る面白からず思つてゐる。どうかして橋媛をときめかせ、外戚の閥を作り、あはよくば萬乗の尊位を……と陰謀を企て、人して春日の社に「男子誕生平天下」と書きつけ、箱に鎌を入れたものを供へさせ、之を讒誣の口實とし「采女の腹に宿つた御子を男子なれかしと願ひ、己外戚として權威をふるはうと云ふ。怪しからぬ考を持つてゐる」として強ひて鎌足に蟄居を命じたので、采女は在るにも在られぬ思ひで、とう／＼夜ぬけをして九重の宮居をあとに、行くへ知れなくなつた。途中で清船に出あつたけれども清船はお爲を思つて簀笠を貸しまゐらせて、百姓のやうな姿にして遁がしてしまつた。そして公には「局は猿澤の池に身投をせられた」と宣言し、自分ばかりしづき役だつたからと云ふので、紀の國春山の別荘へ蟄居して謹慎することになつた。

近世文學に表はれたる戀愛 妹背山婦女庭訓の清船 雛鳥

蝦夷の我まゝは愈々増長した。妻がとめても、娘がとめてもきゝ入れない。その子入鹿は父君の逆心は天の成敗を俟つ外ないと云つて佛に歸依して別室に幽居し、内實は宮中まで、ぬけ穴を通じて三種の神器を奪ふて、己れ自ら天下の政權を掌握しよう云ふ。寧ろ父より以上の逆心を抱いてゐる。入鹿の妻めどの方の父行主は大判事清澄と心を合せ、八方搜索して、蝦夷の連判状を手に入れ、之を證據に勅を乞ひ、蝦夷に死を賜らせた。白木の三方の前に腹切刀をおいて、「イザ生害——」とすゝめた時蝦夷の齒がカチ／＼と鳴つてさも無念さうにあつたが、やがて事された。……とその一刹那、どこからともなく、矢が一筋飛來して行主の胸板を貫いた……と思ふ間もなく早や最期。……と見ればヌツと奥より入鹿、髪はおどろに麻衣、有髪の僧形凄じく「父蝦夷は器小にして共に事を爲すに足らず、我こそ一天を翻して四海に號令する器量あれ。この年頃を一室にこもると見せかけ、たくみにたくんだ叛逆の妙計成就疑ひなし。汝清澄我部下について、犬馬の勞をとらばよし、否むに於いてはこの行主がよいためし、サア／＼返事は何とく」と有無を云はさぬ而構、思慮深き清澄さあらぬ體に畏り、「時を得給ふ大臣に、何とて違背申すべき」とさも慙懃、尾を振る犬はたゞきもならずサリとてこのまゝ返すには疑はしく、とど入鹿は更に賢女の聞えある貞香にその詮議を命じた。清澄は剛直で「女だてらのしらべ受ける覺えはない」と拒む、貞香もさるもの「眞直なものなら男も女も區別はない身の潔白を立てられよ」と云ふ。「これは怪しい畢竟二人はぐるになつてゐるな」と睨んで……決局「汝等双方の潔白を立てる爲め貞香は娘雛鳥を入内させよ、又大判事は清船を余が目通りへ奉仕させよ」とのつびきならず嚴命した。悲劇はこゝから始まつてくる——が話は少しくもとへかへる。

春日野の宮居に近い冬木立、俄時雨を狩りくらし、久我之助清船は、吹矢筒を肩に歸りかけ、とある床机の主なきを幸こゝに一休みして、霏に薄るゝ三笠の山をゆつたりと見渡して居つた。在朝きつての美男とて、程よし、意氣よし、あ

をによし奈良の満都の子女を惱殺して居つた。角前髪の濡れ羽色を早くも見つけた下向の一群

派手を競へる風俗の、中に際立つ武家育ち、年は二八かそれぞとも、振の袖のみみをじらし、ゆたのためたの絹かつぎ、姦あまた引き連れて

打過ぎながら振り返り互に見かはすまなざしを氣早の姦あゝくたびれた、姫様一寸やすんで参りませうと云ふ。渡に船と、清船の近くの床机に腰を掛けたが、氣ばかり焦立つてやる瀬なの思ひに、居るもはした、歸るは猶惜しいと云つた心持、はしたなのはしたための露骨はこんな時には却つて重寶で「ネエお姫様、最前から見てゐますと、アレあの方は遠目鏡のやうなものを持つてゐられます。あれは何か御存じ……ではございますまい。一寸わたしがかりませう」と云ふ。姫は無駄とも思ひ嬉しいと思ひ、何とも返事せぬ中に「イヤ申し、失禮ではございますが、あなた様に少々御無心がございます、こちらの姫様の御用でございませうどうぞその遠眼鏡のやうなものを、一寸御かし下さる譯には参りませうか「エイ／＼お易いこと、これは小鳥を狩る時の吹矢筒でございます」ハハアこれが吹矢筒と申すものでござりまするか、もし姫様一寸御覽遊ばせ入鳥でもお名前の雛鳥でもこの筒でおとりになりますとやら……握つて御覽なされませどの様な處へでも心よく届きます。清船もこれに心の角折れて姫を見て嬌然微笑む。「今こそく」と姦が勧める。でも餘りと云へば蓮葉なこと、始めて會つた殿方に、どうマア言ひ寄られることぞいの、おゝはづかし」と尙モジ／＼、折から來合はしたのは宮越玄蕃と云つて兼ねて雛鳥を戀してゐる悪徒。あたら戀の萌えを摘みとられたが、この闖入によつて双方は身分が判り、因果な戀に落ちたことも判り思ひも深い春日野道を三方に別れて立ち歸つた。

越えて數月、清船は采女一件で責めを引いて春山の別莊に籠居の身となり、雛鳥も亦塵深い都のくらしを避けて保養旁々妹山の山莊に住むことになつた。名さへゆかしい妹と春の山、岩にせかれて中行く水の吉野の川は、二人の戀の障

碍——社會を象徴して大和を紀伊へ落下する。

古への、神代の昔山跡の、國は都の始めにて、妹脊の始め山々の、中を流るゝ吉野川、塵も芥も花の山、實に世に遊ぶ歌人の、言の葉草のすてどころ、……子息清船いつぞやより、爰に勘氣の山住居伴ふ者は巢立鳥、

弔と我と唯二つ、經よむ鳥の音も澄みて、心細くも哀なり

頃は彌生の初めつきた、四山の花漸く紐を解かんとするに、妹山の亭では雛鳥がつれづれを慰めがたら、早いめから雛祭のこしらえ——附添ふ姦小菊も桔梗も例の春日參詣のお供をしたものばかりである。「チア小菊様、いつもお雛様は御殿で祭られるけれどもお姫様のお思ひつきで、この山峰の假座敷、谷川を見晴し——花の見たんのうして雛様も一入氣が晴れてよからうの」など輕口囁、一人感傷にめいるのは雛鳥だけで

辛い戀路の其中に、親とくは昔より、御中不和の關となり、逢ふ事さへも片絲の、むすほれ解けぬ我思ひ戀

しゆかしい清船様、此山のあなたにと聞たをたより母様へお願ひ申して此假屋、お顔が見たさの出養生、爰までは來れども、山と山とが領分の、境の川に隔てられ、物いひかはす事さへも、ならぬ我身の儘ならぬ……

歎きを聞いて姦もいろ／＼いたはり「せめてはお姿なり」と姫は障子をカラリと明けて、椽端に出て向ふ岸を見る。……こちらでは久我之助、父の行末身の行末を守らせ給へと心中に念悲觀音の經机物思はしけな顔かたち……それが手にとるやうに

見えるので「アレ／＼机に凭れて久我様の思はしいお顔つき……あ々お傍に行きたいもどかしい」

と、鹿の卷筆サラ／＼と思のだけを投げ文する。こなたは時世のなり行きを水に占とふ川道遙「姫様早く」と姦の云ふに嬉しき雛鳥の、飛び立つばかり振袖も、裾もほらく坂道を、折から風に散る花の、櫻が中の立委、し

どけ難處もいとひなく

ノウ久我様か、なつかしや

と云ふに思はず清船も「お、雛鳥無事で」と顔と顔とは見合せながら、手と手とゞかぬ河が、りに、心ばかりが抱き合つて、姫は別れて以後の幾瀬の思ひを告げる。男はそれを慰めて「氣永に待たれよ、又逢ふこともあらうぞ」と云ふノウ、又逢ふこともあらうとは別るゝ時の捨てことば、たとへ未來の爺様に、御勘當受くるとも、わしやお前の女房ぢや、迎もかなはぬ浮世なら、法度を破つて此川の早瀬の波も厭ふまじ、何國いかなる方へなど、連れてのいて下さんせ。わたしはそこへ行きます

と、はやる、後ろにとめる姦二人、前にはすかさず清船の詞のとぎれに

「大判事清澄様の御入り——」「後室様御入り——」

貞香は襦かいどり姿さも律々しく、川を隔て、「大判事様お役目御苦勞に存じます」清澄も會釋して「お早うござつた。御前を下るも一時なら、こちらへ着くも一時ながら、年頃所領の争ひの心が解けるか解けぬかは、今日の役目の落つき次第」と謎をかける。「仰せの通り入鹿様の御誼意は御互に子供の身の上……互に受合うては歸つても、身腹は別けても心は別と、若し應と承引せぬ時には、そなたは何となされます」申すまでもござらぬ、一刀の下に斬りすてる分のこと、自體親とか子とか彼此言ふは人間が手前勝手の私事で、廣い天地の眼で見れば、同じ世界に湧いた蟲」と一問一答次第に進んで「此一時が互の瀬越し」此國境は生死の境「返答一つで遺恨を尙も重ねるか」「川へさらりと流さうか」「まつそれ迄は双方の領分」「お捌をまつて居ります」と親と親との譬喩問答、若木の櫻はヒラ／＼と風なきに散つて、何處からともなく谷鶯の音が響く……

娘——娘——と呼ぶ母の聲は顫ひを帯びてゐる。「アイ」とこたへて何氣なく三つ指ついた雛鳥に「そなたもせだけのびていつまでも娘でおくことも出来ずこのたび入鹿様のお聲が、りを幸お宮仕へをせよ」と言ふ。雛鳥はハツとばかりに取亂し「妾には清船様より夫はありませぬそんなことならどうぞう、死んで貞女を立てさせて下さい」と云ふ「それ程いとしい清船殿の身を立てさせれば、そなたは是非に御殿勤めをしてたもれ」と事こまかに言ひきかすと「では不本意ながら仰せに従ひまする」おうようきいてたもつた」と髪をとりあけて身仕度をしてやる。姫は最前から慰みにしてゐた雛の首をコロリともぎとつて「エ、悔しい腹立たしい」と云ふ。母は詞も氣もしどろ「ノウ娘入内さすと云ふたは眞赤ないつはり」「エエそんなら死んで貞女を立てさせて下さりまするか」と云へば情けに似たれどもまことはその爲め、御身を殺しに來たわいの……」と母も泣く雛鳥も泣く、姫も泣く川向へでは清船流石に思慮あるいまはの分別「私がこゝで切腹ときいては雛鳥も生きてはるますまいから、わざと助けた會圖（前に約束した）花のついたまゝで櫻を流して下され」と云ふ。我子ながらも天晴れ思案と清澄は花ふさ多い櫻の一枝をザンプとばかり流しこむと、向ふで雛鳥が

アレ／＼花が流るゝは、嬉しや清船様の恙のないしるし、私は冥途へ参ります、千年も萬年も御無事で長生遊ばして未來でそつて下さんせ

と口籠り勝の心の一念、

思ひおく事云ひおく事も、もう何もござんせぬ、片時も早う、サア母様切つて／＼

と、せけばせく程血筋のきつな、離れがたなき母の胸……：それでも清船助けたさの一心に「無事」と知らせの花一枝、件の櫻を又投げ込むと、それ見届けた大判事「ハア嬉しやこれぞ雛鳥が入内しらせ、清船安心せよ」と云へば、

「もはやこの世に心残りなし、御苦勞ながら御介錯を……」と云ふ、向ふでも

サア／＼母様切つていのう…… 未練にござんす母上様

と促す。貞香も決心して「ハアさうぢや、早や西に入る日輪は娘がお迎ひ、彌陀の來迎西方淨土へ導き給へ、南無阿彌陀佛と眼を閉ぢて思ひ切つたる首諸共、わつと泣く聲、應ふる筈、肝に徹して大判事、刀スラリとはづれる障子——

ヤア雛鳥が首討つたか？

清船は切腹か？

しなしたり——

いとほしや——

と悔むも歎くも一時涙、これより兩家は和睦し互に力を戮せて皇室の爲めに盡したと云ふ。

（尙歌舞伎の脚本は近頃諸家の研究や原本の翻刻續出してゐる上に、戀愛文學としては戯曲と略同質のものなり、中には彼此相通するものも尠くないから繁を避けて省いておく。）

第七章

造化の妙工や、神の絶對や、人生の弱點や、運命の不可思議等幽玄なる宗教思想の表白に至つては更に／＼に乏し。

環境と國民性

哲學は「驚」きに始まると云ふ。自然に恵まれた我國民は古來甚しい自然の脅威を受けたことがない。火山國、地震國と銘打つただけにその方の災害は可なりあつても一昨年の關東震災のやうな全國的、世界的なもの一つもなかつた。花笑ひ鳥唱ふと云ふ秋津島は、山紫に水清く、何を見ても愛すべく親しむべき趣を有つてゐる。然るに印度は如何、ガンヂスの流れは晝夜獅子奮迅の勢を以て滔々南下する。土俗呼んでアミバージンドと云ふ。「獅子怒號」の義である。晝となく、夜となく大自然のライオンに脅かされたこの國民は早くバラモン教を有ち、佛教を有ちし。又之を西歐の和蘭に觀るに學國低濕、風波の害は、四季常住に襲來する處から、首都海牙市の公章は、ライオンが波濤の上を跳りこえた圖案で、その上の句には「我争うて遂に脱す」とある。自然即破壊、即勁敵と云ふ觀念は彼の國民の文化の建設がいつもかうした呪はれたる自然の環境に對峙してなされることを意味したものであらう。それかあらぬか北歐の文學には、宗教哲理を含んだものが多い。ヘンリック、イブセンの思想劇、問題劇の出たのも縁由する所が深いやうに思はれる。

更に、之を國民性の上から見ると淡白を悦び、輕快酒脫を悦び清廉潔白を悦ぶこと我國民の如きは、他に稀だと謂はれるが、淡白は無執着を意味し、輕快は重厚を缺き、酒脫は眞摯に戻り、清廉潔白は、安價なな正義人道觀以上の開展を見ず、事物の奥底に内在する眞を把握せでは己まぬ底の思惟考察は到底出來さうもない。武田信玄の執意、徳川家康の陰忍、毛利元就の堅忍持久、これ等は我國民としては寧ろ例外とも謂ふべきものだ。

斯して我國民は外の環境も、内の國民性も驚異の瞳をみはる機會に乏しいやうに出來て居り、體驗思索に不便なやうに出來て居り、哲學宗教を有つには縁遠い様に出來てゐた。個の中に全我を認め、刹那の時間に、永久の世相を認め、寸毫の空間に悠久の哲理を喝破するやうな大思想家は不幸にしてまだ現れない。造化の妙工は之を人間に引き下して人間技の最大級讚辭を捧げるが關の山で、人生の弱點は鴨長明の方丈記、兼好法師のつれ／＼草等一部の表現があるだけ、運命の不可思議も、劇や、小説に盛られたそれは、ちつとも不可思議ではなく、離合集散の作者の素描に、豫想されてある様が、始めから見え透いたものしかない。幽玄なる宗教思想と云ふ風なもの、作家の體驗もなければ、讀者の趣味もない。バンヤンの天路歷程を、岡清兵衛の金平本にある金平の地獄巡りとを比べて見よ。ミルトンのバラダイズ、ロストを我墮天女物語に比べて見よ、さう對をとることからして不妥當であるが、どう最負目に見ても我國文學には一日の短を認めないわけにはゆくまい。或人は惠心僧都の往生要集は、ダンテの神曲以上だと云ふ、果してさうであらうか。祝詞が表す神ながらの道は、尊いけれども、未だ時空の思惟の幽玄なものがないし、人間の眞實性を深刻に攫んだものとも謂へなからう。佛教渡來以後の我國文學が用語文章の上に於て多分の善影響を受けたことは、一冊の佛教辭典を見てもわかるし、その着想の上に於ても佛足跡歌、今様始め代々の歌集や、王朝の物語以後の小説や、隨筆一として佛臭なきに徴しても明らかであり、謠曲の幽靈も、これのお蔭で出來、謠曲即通俗説法とまで云はれたが、通俗説法と云ふ上から觀るなら寛文延寶の假名草紙はもつと佛教の善巧方便がかつた作意が見える。否西鶴の浮世草紙にすらもあ

の世で貸金の催促をされて幽霊が凄味を剥ぎとられるやうな趣向もある。心中の兒の來世觀も佛教なら、幕末京都の清水寺で「大君の爲めには何か惜しからむ」と述懐した月照が修したのも眞言祕密の法で、志士の述懐にはよく佛法的運命觀がホノ見えてゐる。けれどもそれ等文學に觀えた宗教觀の多分は、佛教を一個の實踐倫理として觀たもので、それ以上の何物でもないことを遺憾に思ふ。

宗教觀

我々の宗教觀と云ふと、戀愛觀以上に不確だが、さりとて、これを確立せずして宗教文學を云々することも出来ないから貧弱ながら一通りこゝに披瀝する。

神道家は云ふ 宗教とは神業かみわざを修むる事なりと。

儒家は云ふ 宗教とは宗廟を祀ることなりと。

道家は云ふ 宗教とは鬼神を祭ることなりと。

佛家は云ふ 宗教とは轉迷開悟の法なりと。

更に之を西哲の言に徴するに

シュレーゲル 宗教とは吾人が或物に全然依頼することを意味す。

ヘーゲル 有限の靈性が、自らの本質を絶對の靈として認めたる知識、之を宗教と謂ふ。

シエリング 吾人が知る所と、行ふ所との間に存する最も高き調和を宗教と謂ふ。

カント 吾人の凡ての義務は神の命令なりと認識するものはれ即ち宗教なり。

ファイヒテ 宗教とは意識的道德なり。即ち吾人の意識により、而も其原因は神明に基けり。

スピノザ 宗教とは完全なるを知りて神明を愛慕することなり。

マクスミユラー 宗教とは人類の徳性を感化し得べき程に現はれたる絶對者を認識することなり。

ハーバートスペンサー 宗教とは不可思議の神明に對して感ずる所の奇異の情性なり。

更に中島祐信氏が近譯ブライデラーの「宗教の本質と各宗の特質」の引用を假りて孫引すると

ゲーテ 我等が純なる心の衷に、感恩の心より

更に高き、更に純なる一つの未知者へと

喜んで歸依せんとする努力の

切なるを覺える、我等はそれを

信仰と名づける。

シルレル 汝は最高なるもの、最大なるものを求めるか。

植物はそれを汝に教へる事が出来る。

植物が意志なくして有する所の状態に汝は意志を以て到達せよ、其が即ち汝の求むる所の物である。

セネカ 宗教とは神に對する自由の聽従を云ふ。

アウグステイヌス 爾は我等を爾へ向けて造りたり。故に我等の心情は爾に於て休息を得るまでは休む事なし

吾人は此等の至言を充分に味讀すべきで、これ等の一行一句でも眞に體得する爲めには半生を賭し一生を賭する價値があらうと思ふ。

つまり先哲の教へた宗教なるものは、その知性、情性、意性の一部を高潮するけぢめはあるにしても、何かしら全き

もの高きもの永遠なるものへの憧憬をさしやいてゐるかのやうに思はれる。

需要と供給とは物質的な經濟の原則だが、之を精神的な思惟の原則にも移すことが出来よう。自己に内在するもの、充足するものを何とて求める必要があらう。米のないものは米屋に行き、酒のほしいものは酒屋に行くのは、神を得ないものが神にあこがれ、佛を得ないものが佛に欣求すると同じ道理であらう。然るに物質の上にも自給經濟なるものがあつて、我が必要なるものは、悉く自から製作し供給する。經濟學上この現象は幼稚な文化に行はれるが、思想上に於ては高い文化に作用してそれが宗教になる。神と云ひ、佛と云ひ天帝と云ひ、これ等は畢竟人間自ら需要して、人間自ら供給した無形の偶像なのである。で、神の屬性はその時代文化の投影で古代ならば穀物の豊穰も、神のみの配下にあつたらうが、今日にあつては燐酸肥料が大分その神の領分を浸蝕してゐる。嘗ては、飛行自在が貴い神の屬性の一つであつたらうがツェッペリン式飛行機と云つた風のもが出来だしてはこの神性も影が淡くなる。淡くなる一方かと云ふとさうではなく、更に又より困難な、より高尚な屬性が増加し、成長して來る畢竟「始めには神、人を造り、後には人、神を造る」ので、神とは人間の思惟の自給經濟の所産である。

然らば人間何が故に神を要求するか、それは殆めにも謂つた通り己れに足らざるものを追求するのが人間の通有性だからである。

人間通有の弱點は何？、相對的であり一時的であり不完全であることだ。

君と臣、親と子、夫と婦、兄と弟、男と女、主人と婢僕、將官と佐官と尉官と兵卒と、社長と副社長と重役と平社員と雇員と傭員と、大臣と次官と政務官と局長と高等官と判任官と屬と傭とあらゆる人事の價値は相對的のもので、他と比較しないで貴いとか卑しいとか、偉いとか、駄目とか、富んでゐるとか、貧しいとか云ふ評は下し得ないものばかりで

ある。「弘前は寒い」と云ふ、その人の心には近畿關西地方の溫暖な氣候が前提となつてゐるからである。「弘前は暖い」と云ふ。これも吹雪勝なるシベリア、サガレンあたりから來た人の語としては、尤と背かれる。マア人間の云ふことはその程度である。アインシュタインを俟たずとも、相對性は人事の諸相に於いては免れない眞理である。そこで無前提な、無比較な、無條件な、或ものに對して欣求する。

秦皇蓋世の偉業も楚人の一炬に灰となり、豊公不世出の偉圖も、夏冬の陣に脆くも崩れた。況んや些々たる凡人の言動事象、一として恒久不變なるなしで、朝の紅顔は夕に白骨となり、昨日の美人は今日一个の骷髏と化するなど無常は人の世のCOMMONシツクとも謂ふべく、桃李ものいはすの歎き、飛鳥河の咨嗟、國破れて山河有りの思慕、吳王宮裏の懷古、昔から文藝の主内容に有爲轉變の弱點をはかなんだものが多いのはこの故であらう。靜かにこの世を觀照すると人事の轉變も哀しく、自然滄桑の變も哀しく何等か永遠の實在を求めて、之にその悩みを忘れようとする心持が我知らず擡頭する。

文化は開け入智は進み十八世紀頃には科學萬能とまで自惚れたが、その自惚れは早くも破産して、人間は愚かなもの不完全なものと自覺することを餘儀なくされるやうになつた。若し人間が完全なものなら、此世に罪惡は生じなからう。罪惡の根源となるものはすつかり艾除してしまはう、處が石川五右衛門が「石川や濱のまさごは盡くるとも」と云つたやうに世に罪惡の種は盡きない。否もつと限定した學校の試験の際に於けるカンニング事件すらも根絶することは餘程の骨だ。(近頃或學生が新聞に前掲の下の句をかへて「世にカンニングの種はつきせじ」としたのもあり、「勘忍のなる勘忍は誰もするならぬ勘忍するが勘忍」の道歌の勘忍をローマ字で Kanning として「カンニングのなるカンニングは誰もする云々」として出したと云ふのもある)完全が人間の本性なら我々はもつと全き我々であらねばならぬ。貧乏

人の子澤山や、金持の子貧乏もあつてはならない。凡てを知り凡てを能くして、ファウストのやうに歎く必要はなくなる。女は悉く美人で、男子は悉く富貴でも有り得ることになる。寒國の雪を南國のアイスクリームの料に廻すことも出来るし、南國の温熱を北國の暖房装置に利用することも出来る筈だ。地獄極樂自由に出入して、生きかはり死にかはりあの世此の世の歡樂の限りを盡すことも出来る筈だ。處が事實吾々は不完全である。互に一長一短一美一醜一善一惡を相混有してゐる。絶對の惡人の無い代りには、絶對の善人もなく絶對の美人もない代りには絶對の醜婦もない。足で地をふんで眼で天を見、一步墮落すれば三惡四趣、一步向上すれば聲門菩薩と云ふその中間のためたひに集くつてゐる。そこで吾々は全知の實在全能の實在を憧憬する。

この絶對永久完全な實在に對する欣求を宗教と云ふ。

宗教文學

この想を盛つた文學を宗教文學と云ふ。ではさうしたものが我國文學に在るかと思ふに、全然ないとは云はないが、餘り豊富とは謂へなからう。同じ一つの鐘の音でも能因法師が「山寺の春の夕ぐれ來て見れば入あひの鐘に花ぞちりける」や、道成寺の鐘供養には、華やかなセンチメンタルはあつても、どつしりした思索的痛感はない。嘗てミレーの暮鐘の印畫を見、又ハウプトマンの「沈鐘」の譯を讀んだそれと比べると甚しい感銘の相違を認めしたが、蓋しこは誰しも同感であらう。

然らば我國民には永久、宗教文學の創作は不可能なのだらうか。余はさうは思はない。それは現代作家や評論家の作品を讀むと、追々我邦にも深みのある考へ方、表し方、論じ方が成長しつつあると思ふ。それはブラウニングの詩にある「山莊の針金」のやうなものでそれを鳴らすだけの颯風が吹くには、餘りにも恵まれたる自然と環境とであつたから

であらうと解する。

我邦鎌倉時代、日本的佛教の興起した頃法然や親鸞や日蓮などが書いた記録を見ると、そのやむにやまれぬ心の叫び、その人生思索の深み、その佛典造詣の該博、その行文の求めずして得た流麗と力は、憇ひ遊戯半分や、職業氣質で述作したものに比べて、遙かに優れてゐると思ふ。(余がこの種のものに注意したのは、芳賀博士の國文學歴史選中法語の例文や、松浦肇氏の國文學の本質、生命の文學、文學の絶對境、文學の白光の四書に負ふ處多いことを謝しておく)

今、それ等の一二例をあける。くれぐれも斷つておくことは、余がこの方面の造詣の皆無であつて、こゝにあけたのが、強ちその最適の例でないかも知れぬと云ふ一事である。

法然上人の元久法語 又登山狀とも云ふ。今

黒田眞洞・望月信亨共纂 法然上人全集 二四七—二五〇

による。

それ流浪三界のうち、いづれの界にをもむきてか、釋尊の出世にあはざりし。輪廻四生のあひだ、何れの生をうけてか、如來の說法をきかざりし。華嚴開講のむしろにもまじはらず、般若演説の座にもつらならず、鷲峰說法のにはにもぞまず、鶴林涅槃のみぎりにもいたらず、われ舍衛の三億の家をやどりけん。しらす地獄八熱のそこにやすみけん、はづべしく。かなしむべしく。まさに今多生曠劫をへて、むまれがたき人界にむまれて、無量劫をくりて、あひがたき佛教にあへり。釋尊の在世にあはざる事は、かなしみなりといへど

も、教法流布の世にあふ事をえたるは、是よろこび也。たとへば目しるたる龜の、うき木のあなにあへるがごとし。わが朝に佛法の流布せしことも、欽明天皇あめのしたをしらしめして、十三年みづのえさるのとし、冬十月一日、はじめて佛法わたり給ひし。それよりさきには、如來の教法も流布せざりしかば、菩提の覺路いまだきかず。こゝにわれ等いかなる宿縁にこたへ、いかなる善業によりてか、佛法流布の時にむまれて、生死解脱のみちをきく事を得たる。しかるをいまあひがたくしてあふ事をえたり。いたづらにあかしくらしてやみなんこそかなしけれ。あるひは南樓に月をあざけりて、漫々たる秋の夜をいたづらにあかす。あるひは千里の雲にはせて、山のかせきをとりととしをくり、あるひは萬里のなみにうかびて、うみのいろくづをとりと日をかさね、あるひは嚴寒にこほりをしのごて世路をわたり、あるひは炎天にあせをのこひて利養をもとめ、あるひは妻子眷屬に纏はれて、恩愛のきづなかり難し。あるひは讐敵怨類にあひて、瞋恚のほむらやむ事なし。惣じてかくのごとくして、晝夜朝暮行住坐臥、時としてやむ事なし。たとほしきまゝに、のくまで三途八難の業をかさぬ。しかればある文には一人一日中八億四千念、念々中所作、皆是三途業といへり。かくのごとくして、昨日もいたづらにくれぬ。今日も又むなくあけぬ。今いくたびかかし、いくたびかあかさんとする。それあしたにひらくる榮花は、ゆふべの風にちりやすく、ゆふべにむすぶ命露は、あしたの日にきえやすし。是をしらずして常にさかへん事を思ひ、是をさとらずしてつねにあらん事をおもふ。しかるあひだ無常の風ひとたびふきて、有爲のつゆながく消えぬれば、これを曠野にすて、これをとをき山にをくる。かばねはつるにこけのしたにうづもれ、たましるはひとりたびのそらにまよふ。妻子眷屬は家にあれどもともなはず、七珍萬寶は庫にみてれども益もなし。たゞ身にしたがふものは後悔のなみだ也。つるに閻魔の廳にいたりぬれば、つみの

淺深をさだめ、業の輕重をかんがへらる。法王罪人にとひていはく、なんぢ佛法流布の世にむまれて、なんぞ修行せずして、いたづらにかへりきたるやと、その時にはわれ等いかゞこたへむとする。すみやかに出要をもとめてむなく歸る事なかれ。……下略。

蓮如上人の歎異鈔 親鸞口傳のまゝを書きとめられたこの聽書は近來益々その價值を認められ、谷本博士の如きは一年中讀んだ唯一貴重な聖典だとまで謂はれた。何かは知らぬがトルストイの無抵抗主義にも近いやうな素直な運命觀が窺はれるやうに思ふ。今

江部鴨村 愚禿親鸞全集 六三九—六六一
による。

「おのおの十餘ヶ國のさかひをこゑて、身命をたづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こゝろにくゝおほしめしおはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからは南都北嶺にも、ゆゑしき學生たちおほくおはせられてさふらふなれば、かのひとびとにも、あひたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと、よき人のおほせをかうふりて信するほかに、別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまひらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふらう。そのゆゑは自餘の行をはけみて佛になるべかりける

身が念佛をまうして地獄にもおちてさふらはじこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめいづれの業もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしますば、善導のおん釋苦言したまふべからず、善導のおん釋まことならば親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらう歎。詮するところ愚身が信心におきてはかくのごとし。このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々のおんはからひなり。」

日蓮上人の遺文 日蓮上人のことは近く田中智學、山川智應諸氏の獅子吼や高山樗牛氏の熱ある提唱や森鷗外氏の辻説法や坪内博士の法難によつて吾人の耳朶を打たれた。今

日蓮宗全書出版會の日蓮上人全集による。

予事のよしををし計るに、華嚴觀經、大日經等をよみ修行する人をば、その經經の佛菩薩諸天等守護し給らむ。疑あるべからず。但し大日經觀經等をよむ行者等、法華經の行者に敵對を爲さば、彼の行者をすて、法華經の行者を守護すべし。例せば孝子慈父の王敵となれば、父を捨て、王にまいる孝の至也。佛法も亦かくのごとし。法華經の諸佛菩薩十羅刹、日蓮を守護し給上、淨土宗の六方諸佛二十五菩薩、眞言宗の千二百等七宗の諸尊守護の善神、日蓮を守護し給べし。例せば七宗の守護神傳教大師をまほり給しごとしとをもう。日蓮案云々。法華經の二處三會の座にましまし、日月等の諸天は法華經の行者出來せば、磁石の鐵を吸ふごとく、月の水に遷が如く、須臾に來て行者に代り佛前の御誓ひをはたさせ給べしとこそおほへ候に、いままで日蓮をとぶら

ひ給わぬは、日蓮法華經の行者にあらざるか、されば重て經文を勘て我身に於て、身の失をしるべし。(開目抄下) 一たいをなめて大海のしをしり、一華を見て、春を推せよ、萬里をわたりて宋に入らずとも、三箇年を経て靈山にいたらずとも、龍樹のごとく龍宮に入らずとも、無著菩薩のごとく彌勒菩薩にあわずとも二所三會に値ずとも、一代の勝劣はこれをしれるなるべし。蛇は七日が内の洪水をしる。龍の眷屬なるゆへ、鳥は年中の吉凶をしり。過去に陰陽師なりしゆへ、鳥は飛ぶ徳人にすぐれたり。日蓮は諸經の勝劣をしること、華嚴の澄觀、三論の嘉祥、法相の慈恩、眞言の弘法にすぐれたり。天臺傳教の跡をしるふゆへなり。彼の人人は天臺傳教に歸せさせ給はずば、謗法の失脱させ給ふべしや。(開目抄下)

問云々。法華經の心をも知らず、但南無妙法蓮華經とばかり、五字七字にかぎりて一日に一返、一月乃至一年十年一期生之間にただ一返など唱ても、輕重の惡にひかれずして四惡趣におもむかず、ついに不退の位にいたるべしや。

答云々。しかるべき也。

問云々。火火といへども手にとらざればやけず、水水といへども、口にのまざれば水のほしき事やます。但南無妙法蓮華經と題目ばかりを唱ふとも、義趣をさとらずば、惡趣をまぬかる、事いかがあるべからん。

答云々。師子の筋を琴の絃として一たび奏すれば、餘の絃ごとくきれ、梅子のすきこえを聞ば、口につたまりうるおふ。世間の不思議如此。いはんや法華の不思議をや。小乗の四諦の名ばかりをさやづる鶯鴉なを天に生し、三歸ばかりをたもつ人犬魚のなんをまぬかる。何況法華の題目は八萬聖教の肝心、一切諸佛の眼

目也、汝等これを唱て惡趣はなるべからずと疑うか、正直捨方便の法華には、以信得入と云ひ、双林最後の涅槃經には、是菩提因、雖復無量、若説信心、已盡等云云。佛道へ入る根本は信を本とす。五十二位には十信を本とす。十信の位には信心初也。たとひさとりになれども、信心ある者は鈍根も正見の者也。たとひさとりにあるとも信心なき者は誹謗闡提之者也。善星比丘は二百五十戒をたもち、四禪定を得、十二部經をそらにせし者、提婆達多は六萬八萬の寶藏をおほへ十八變を現ぜし。此等は有解無信の者、于今阿鼻大城にありと聞く。迦葉舍利弗等は、無解有信の者也。佛に授記をかほりて華光如來、光明如來といはれき。佛といての給く。生疑不信者、即當墮惡道云云。此等は有解無信の者を説給。しかるを今の世に世間の學者の云々。ただ信心ばかりにて解する心なく、南無妙法蓮華經と唱るばかりにていかでか惡趣をまぬかるべきと云云。此人人は經文のごとくならば阿鼻大城まぬかれがたし。さればさるさとりになくとも南無妙法蓮華經と唱るならば、惡道をまぬかるべし……下略 (法華經題目抄)

……南無妙法蓮華經。

文永九年太歲壬申三月二十日

日蓮 花押

日蓮弟子檀那等御中

佐渡、國は紙候はぬ上、面に申せば煩あり、一人ももれば恨ありぬべし。此文を心ざしあらん人人は、寄合て御覽じ、料簡候て心なぐさませ給へ、世間にまさる歎だにも出來すれば劣る歎きは物ならず。當時の軍に死する人人實不實は置く、幾くか悲しかるらん。いざはの入道さかべの入道いかになりぬらん。かはのべの山

城得行寺殿等の事いかにと書付て給べし。外典抄、貞觀政要すべて外典の物語、八宗の相傳等此等がなくして

は消息もかかれ候はぬに、かまへてかまへて給候べし。(佐渡御書奥書)

(尙この篇に於て是非一言すべきは

國文學に對する漢文學の影響

滑稽文學の大體

だと思つてゐるが、前者はあまり廣汎な資料の爲めに涉獵行き届かずしてやむなく割愛し、後者のみを以下に述べることにした。各時代に渡來した漢籍の詳細、懷風藻と萬葉集との對照、白氏文集遊仙窟と王朝文學、近古に於ける五山文學、近世に於ける儒教思想に根底づけられた國文學、元代の詞曲に暗示を得た、小説、隨筆、漢字と國字との對照、漢文脈のとりいれ、漢文學的着想思想、我邦に於ける邦人の漢文學史など幾多有趣の事項があるが、そは他日の研究に委ねることにした。)

第八章 滑稽文學

第一 總説

一、滑稽 滑稽文學とは何？ 滑稽な感情を盛つた文學を云ふ。吾々が利害關係なき場合に發見する矛盾の感情を滑稽と云ふ。輕裘肥馬の一紳士が山高帽を秋風に吹き飛ばされて、アタフタと馬から下りて、帽の行くへを追つかけるのを見た瞬間（あとでは勿論氣の毒になるが）に感ずるをかしさは即滑稽である。馬鞍の上に意氣揚々たる紳士の本然の姿と今のアタフタ帽子を追へる急遽倉皇の様とは大變に矛盾した極端と極端である。それを見た瞬間には誰しもクス／＼笑ふか、カラ／＼笑ふかニヤ／＼笑ふか、ぢつとをかしさを噛み殺して心で笑ふかする。此場合「笑ふ」と云ふことは、心理的な滑稽感情の過程が、生理的に影響した結果の表れである。が吾々の出あふ矛盾現象はいつもこんなのかかりではない。勿論自分はその局に當つては居ないで、自分は第三者の地位にあつて、甲と乙との交渉談判をはたから見てゐるにしても、あまり甲のやりくちなり、言分が利己一偏で、するいことを看破した時には、その甲の心と行との不一致に對しては、をかしどころか、却つて一種の公憤を感ずる。（之を心理的に觀れば此等も無意識的に自己と交渉があるのである）又よくかうしたことがある。新聞に麗々しく標題を掲げた新刊廣告を見て、本屋に注文して取寄せ、中を讀んで見ると存外詰らない、なぜこんな大袈裟な題をつけたかを怪しまれるやうな感じがする。所謂羊頭狗肉の現象だが當の購讀者たる余はその矛盾に向つて滑稽を感ずる前に先づ憤慨する……つまり自分に利害關係があるからである。

三大節とかその他改まつた儀式の席で誰か、過つて高らかに放屁した（無論あるまじきことだが）とすれば、誰しも一旦は失笑させられよう。常は外であつたならばをかしくも何ともないことでも、かうした場合は儀式の嚴肅と、放屁の解放との矛盾によつて滑稽を感ずるのである。

菊池寛氏の脚本「笑」の扈從、光之丞は二代將軍秀忠の薨去で諸大名が夜伽をしてゐる時、だん／＼夜が更けて、常は威嚴を構へる大小名が、皆コクリ／＼とうたゝねをするのを見て、をかしくて堪らず、伊達政宗、土井大炊頭、板倉重昌、小笠原左兵衛佐、片桐且元、加藤清正、松倉甲斐守などの次々船を漕ぐ姿を、友だちの佐吉郎と二人で「そーら又こつちが始めた」ヤアあつちなのは火鉢に顔が埋りさうだ」など云つてはては思はずふき出したその刹那ハツと眼をあいた大名に見つかつて後に切腹を仰せつけられたと云ふが氏の脚色は大へん結構だが、斯うした場合光之丞ならずとも、誰しも滑稽を感ずるもので、本當を云へば罪は笑ふ方よりは、寧ろ笑はせた方にあると謂ふべきだ。（漫畫などのねらひ所はつまり此點にあると思ふ。狂言も幾分斯うした着想がある）

二、滑稽の種類 自分のことを自分で悪く言ふことは之を自嘲と云ふが此には二通りあつて、一つは純粹な好笑で「私は佐藤と申します。併し決して甘い人間ではありません。鹽で名高い赤穂で生まれました。面相の拙いのは私の責任ではなく、私未生以前の、両親に御詰問を願ひます」など云つた風ので、今一つは自嘲と云ひ條、實は他嘲で、相手の悪口を云ひたいのだが、露骨に云へば不徳義の譏を受けるものだから己むなく自分のことにして散々棚下ろしをするのでこれが表情はむしろ譏笑に近いものだ。

豊太閤が、名護屋の陣營に在つて、諸將の陣屋見巡りの際「てりもせず曇りもはてぬ春の夜の」と掲げてゐる所を見

てこれは敷物がないと云ふ洒落だから敷物をつかはせと命令したと云ふ。これは大江千里が歌で名高いおぼろ月夜にしくものぞなき

の下の句「しくものぞなき」の秀句である。此種の洒落は我國文學には早く發達したが、就中近世徳川時代下半期江戸の通人粹人の續出と共に著しく發達した。

瓢箪から駒が出る 冗談から暇が出る
の如き換意、換義の地口や語呂合せに見られる可笑みは一部甚だよく似てゐるに拘らず、他の一部甚だ相距つてゐる點に存する。

狂言「膏藥煉」に京、鎌倉の膏藥煉がめい／＼自家膏藥の自慢を云ふ所があつて、鎌倉方は生食の馬が上天したのを膏藥の力で吸ひつけたと云ふ。京方は平清盛が北山から庭石を引いて三千人かゝつても庭に這入らぬ石を膏藥の力で吸ひつけたなど云ふ。このをかしみは「誇張」にあるが誇張の根元は、その物の本質に對する大々的割増を加へる點にあるのだから矢張矛盾の觀念である。

醒醉笑には「或肴屋が俄雨に降られてとある家へ雨宿りすると、その主人が飛んだお世辭者で、イヤお前さんは根が商人でなからうの、元は定めて由ある家にお生れなされたらうのと持上けた。スルト肴屋は立ちがけに大きな鯛を一枚くれて「志であるから取つておいてくれ。今日は先祖の頼朝の日だ」と云つた」とある。此は人生共通の弱點たる自惚をあけたもので、皮肉と誇張とから成立つたをかしみで、その内の皮肉は前例光之丞の場合と同様の矛盾が内在してゐる。人間は平素は謙遜の美德を守つてゐるが、その實謙遜とは正反對の倨傲な性質があることを示してゐるから。

佛蘭西の謝肉祭のやうな大袈裟でなくとも、儀式祭禮の餘興にする假裝行列に見るをかしみは所謂諧謔(をどけ)と云

ふもので、徳川時代の輕文學によくあるものだ。これもそのもの本來の眞面目と對照的又は對蹠的な矛盾に生ずる。

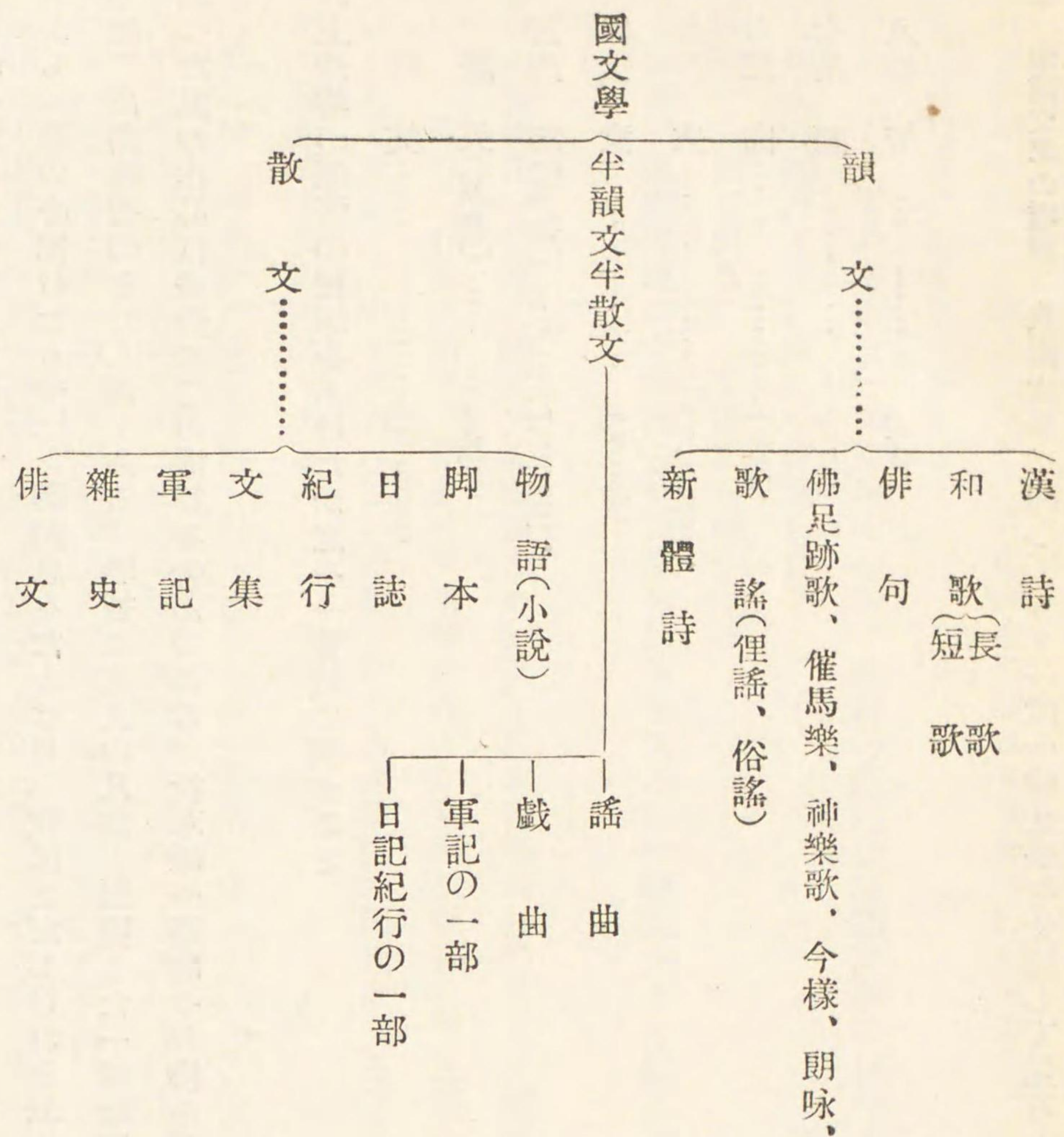
「香爐峰の雪は如何」と云はれて、直に起つて簾をかゝけた清女のやりくちは、當意即妙と謂ふべきだ。同じ清女が、中宮から「花の心開けたりや」と御消息をたまはり「秋はまだしけれど云々」と直ぐ同じ白樂天の詩句を引いたのも同じ趣で所謂機智のをかしみである。機智は凡人の凡想と對照した一極端で矢張矛盾の上に立つ。奇想天外から落ちると云つた風の作品は多分にこの機智を含んでゐる。枕草紙や連歌や川柳や現代文學中の或種のものには此作例が尠くない。

以上滑稽の感情の種類をあけたが之を一覽的に列べると

- 一好 笑……………Humour.
- 二譏 笑(諷刺)……………Satire.
- 三洒 落(秀句)……………Pantomie.
- 四換 意……………Parody.
- 五誇 大……………Caricature.
- 六皮 肉……………Irony.
- 七諧 謔……………Joke.
- 八機 智……………Wit.

三、滑稽文學の種類 我國文學に即してもう一度一般文學を分類して見ると

滑稽文學 第一總説 三、滑稽文學の種類



となる。さて滑稽文學は此等各種の方面に見られる譯なのが事實をこまでは發達してゐない。漢詩に相當する狂詩と云ふ者がある。

居 候

曉 窓

奔命日夜如_二下男_一

常取_二機嫌_一及_二於_三

氣毒矢張贅骨折

御茶依然古澤庵

(狂詩餘學便覽)

和歌の中、短歌の滑稽なものを狂歌と云ふ。

歌よみは下手こそよけれ天地の 動き出してはたまるものは

(宿屋飯盛)

俳句と起源は違つてゐるが詞形は同じく十七音律の五七五となつてゐる川柳がある。

内談の隣へ知れるつんほ同士

散文の方で物語、小説に入るべきものに滑稽小説がある。十返舎一九の東海道中膝栗毛などがその好例である。脚本の滑稽なもの即ち喜劇脚本には早く狂言があり、明治以後に新作喜劇や翻譯喜劇の若干がある。文集には狂文集とも謂ふべき「我おもしろ」四方のあか」などがある。其他の水準を下せば落首、講談、落語、二わか、茶番、地口、前句附、冠附、ものは附、謎々、語呂合などもある。即ち

韻文——狂詩、狂歌、川柳等
 散文——滑稽小説、喜劇脚本、狂文集等

となる。此等各種文學はそれ／＼その發達に遅速があり、又時代につれてその名稱がちがつてゐるから以下その變遷を略説しようと思ふ。

四、滑稽文學の發過しないわけ

我邦には高級な滑稽文學作品は至つて少い。その原因はもとより一二に止まらないが、

滑稽文學 第一總説 四、滑稽文學の發達しないわけ